

早大三年の連勝

老巧と若氣、完成と未完成

東西蹴球争覇に關學敗る

山田 午郎

三年連続關東に覇を稱へた早大

と、久しく京大の蹂躪に委してゐたが四年振りに返り咲いて關西の覇權を収めた關西學院大學との東西學生對抗蹴球戦は十二月十五日明治神宮競技場で行はれた。この日雪もよひの薄曇り、風はないが気温は低く連日の霜解けで球場は水分を多く含んでゐたため、午前中に高専東西對抗、神戸高専對東京商船の試合が行はれたのでフキールド・コンデイションは極めて不良でシーズン捕尾のビツク、ゲームを行ふには餘りにも氣の毒であつた。

午後二時關西學院大學が時計台側をとり、早大は青山側陣に陣してキック・オフを行つた。

この日の天候その他の状態からすれば、いづれのサイドを選んでも可もなければ不可もなく公平なものであつた。この東西對抗戦も七回を數へ、關東五勝一引分、關西は第三回關學と東大の試合において僅かに引分けをとつてゐるだけ、この對抗戦は甚だ香しくないものであつた。早大からすれば關東方のためでなく、三年連続の登場で三連勝を得たいところ、關學からすれば早大と共に三回目の登場で關西方のためにこのあたりで芽をふかしたいところである。

關西學院大學としては秋に明治神宮大會の初に行はれた全日本地方對抗選手權大會の關西代表として出場し不戦一勝で第二回戦には四高俱樂部を破り、准決勝戦では京成蹴球團のために敗れてゐる。尤もこの際は野澤らの強力なるプレイヤーを缺いて攻撃線を整へ得なかつたのであるが、大體に於て今シーズンの關西學院大學の實力は推測

し得た。

これをもつて早大と關西學院大學の實力を比較して見れば早大は七分の勝味を蔵してゐるといふのであつた。然し試合の蓋の開くまで七分三分の試合として豫想せしめなかつた所のは昭和七年まで九年にわたつて行はれた早關定期戦が關學四勝四引分一敗で早大勝味十分と言はれた時においてさへ引分けが關の山であるといふ關學の早大に對する氣負ふ所のものがあり、一方早大に快勝して意氣頓に昂つてゐる點に關西學院大學の希望をつなぐものであつた。

所て試合の幕を開けて見ると關西學院大學は優秀なキッキングに物をいはせて真向から早大を攻め立て互角以上の試合を進めて先づ早大ゴールを陥れた。

この十四分までの戦績を繰るならば早大に對する關學傳統の強氣が早大の三連勝を對するかと思はしめたのであつたが、互角對等の試合はこの得點先取のあたりで影を潜め、後の七十餘分は早大の獨壇場といふものとなつてしまつた。

尤もこの間に野澤らの優れた個人技がコンピテンション・プレイと全く別個に示されることがありそれが試合の緩となつたが、かゝ一方的の試合となつては期待されたビツク・ゲームとしての内容は全く缺けてゐる。かかばかり早關の實力に相違があつたかどうかわからぬが、それはお互に疑ふ所のものである、詮じつめて言ふならば早大の老巧と關西學院大學の若氣が技倆を

遺憾なく發揮し、また完封したのではなかつたらうか。

東西對抗史にはじめて獲す早大の快勝、關西學院大學の惨敗といふ記録は早大七分の勝味ありとして餘りにもかけ離れた結果であつた。早大はフキールド・コンデイションをマスターする一方、對關西學院大學との定期戦に臨みて慎重に構へて偵察を試み消極的態度に對し、關西學院大學はその全力を傾けてスタートした。

この結果として試合は常に關西學院大學のリードするところとなつて早大は引き廻され勝て七分三分は逆に關西學院大學有利に展開してゐた、早大が十一分平松のパスを川本逸して加茂兄がドリブルシュートしたとき右に外れた。これはチャンスであつたに相違ないが右側はスタートを泥土に奪はれて間に合はず終つてゐるが早大のチャンスといへばいへようが、ボールは殆ど關西學院大學に多く出で試合は早大陣を舞台としてゐた、たまたま早大陣で行はれたスローインは三田から左に深く廻され梅園のフリー・シュートとなつてゐる。これは關西學院大學のキッキングに秀でゐる立派な所産で關西學院大學の一點先取で試合の結果は全く混沌として見透しがつかなくなつたのであつた。

關西學院大學は深いW型陣をとつて梅園、野澤、田中を擁し、林、山藤がH B線と重なる位に後退し強いキッキングで爆撃を期するといふ布置を探つてゐた、之がキッキングに自信を持つもの、當然とるべきものであつたに相違ない、走力を多分に蔵してゐる山藤の爆進で一氣にゴールを決定せんとす

るあたり背かれもするし、野澤の優れた體力からほどはしるやうなスタート・ダッシュとその鋭い突つ込みを物をはせるにはこの陣形に非難を浴せ得ない。

それは早大が關西學院大學のそれと同様にスローインから出たボールを西邑ジャンプをよく効かしてヘッドングで浮き氣味に前進したのを川本一見つて後へ捌き出した。これを加茂兄シュートして同點となつた。各線は氣分の崩れかボールのコントロールを失つてゐる。これなどからすれば徒らに守勢に墮した備へであつて實成は出來ない、殊にH B線の深いこの守りにはF B線の前方守備の餘裕を殺いで全能力を封することにもなつてゐた。そればかりかH B線は出たは早大F W線をF B線との間に放り出して闘つといふことをあへてしてゐた。ボールの掻き出しが早く引つかけるのが巧みな早大F W線の曲者にフリーシュートをさせると至つては12-2の開きもまた止むを得ないといふべきか。

一對一の同點となつてからは關志を失ひ個々の技倆が閃光を放つた許りでそれにロング・キックシステムの威力は散漫のうかゞはれたのであつた、關西學院大學は傳統のロングキックシステムを完成してはゐないし若い選手が多く一度崩れればH B線の非力とも各線を整へ得ず繼に一貫する根幹を持ち合せてゐないことを暴露してしまつた。

松井、宮部のF B線は密集に強いついふ噂も早大のH B線が加勢して増幅する攻撃線の執拗さの前にはその持味もなす極めて平凡なF B線としか映らずに終つてゐる。殊にG R西川の前進氣味の守備にゴール・カザアが忙しかつた只一途に敗路を走るやうになつたのも要は未完成のチームであつたといふことに盡きはしないか。梅園、野澤、田中を活用する山藤

と林が全體において満足し得るプレイを見せたのがせめての慰めといはうか。

眞摯なる態度によつての研鑽の効は早大が示した、それは早大が一躍今シーズン善闘の記録を止めたのと好一對で、常に眞摯なる態度が必ずもたらすもの、あるものを一般に垂示したことを喜ぶものである。

H B線は梅園、田中を時に見逃し野澤の果敢執拗なプレイに走らされるとはあつたにしても出で、よく、退つてよく、その職能を果たしてゐた。立原にしてはこれが主將としての最終戦で、笹野にしても吉田にしても久し振りの登場であつても満足し得る好戦好闘に思ひ残すことはなからう。

關西學院大學の兎角横を開けた守備線の布き様にF W線を救済し易かつたこともあつたらうがチームの中樞としては實に堂々たるもので、F B線の堀江が守備範圍を超える場合などの補填は申分がない後半十二分G R佐野のフアンブルした時に關西學院大學は野澤これを拾つてチャンスとなつたが笹野の適時後退に危機をのがれたなど思實な守備振りであつて一例として擧げ得よう。

F B線は奪はれた二點に對して何か非難を浴せられるかも知れないが、これはその守備能力を疑はれるほどのものではないと思ふ。堅實な守備線をついた鈴木、堀江は佐野の奮闘と共に賞讃さるべきものであつた。關西學院大學に比すればコンピテンション・プレイの本體を遺憾なく示し常に攻守に際して厚味と緻密さを見せてゐる廣心の作を残した早大は有終の美を濟した。これは個々の技倆をチームの實力に引き上げる精神的の融和協調のあつたことも見逃せない、早大の三年連勝の不滅の功績に對しては關西學院大學が試合を捨てず十一對一まで薄きつけたやうに飽くまで關西代表と母校の球史の前に力闘をつうけたことと共に敬意を表するものである。

更に練磨すれば尚一層の精彩を發揮し得る光明をこゝに見出した。



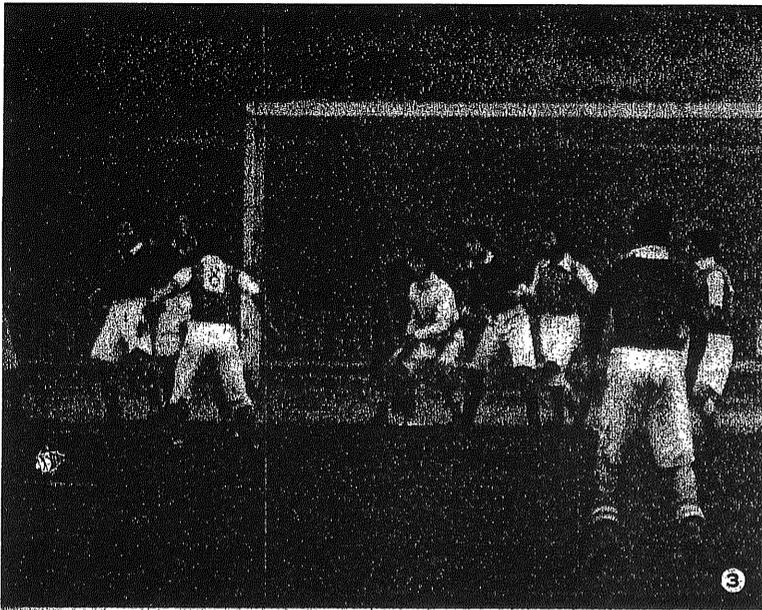
本報記者林福を土東路朝報編輯局長から受け取る早大堀江君

本報記者林福を土東路朝報編輯局長から受け取る早大堀江君

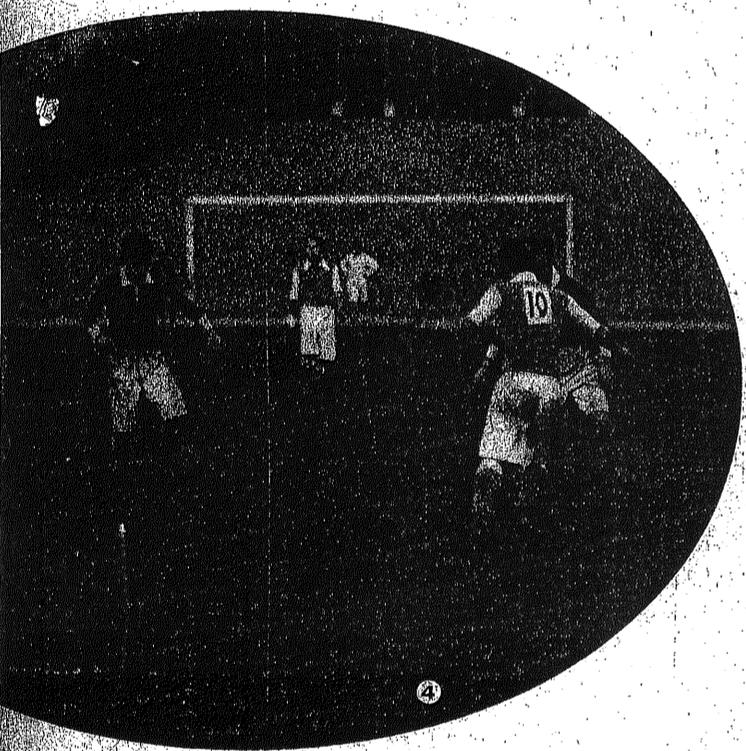
東西蹴球優勝校

早稲田 関学大 の 争 覇 陣

奮闘十五日神宮競技場で舉行
12對2早大三ヶ年を連勝



部宮學關と邑西大早, 前ルーゴの學關分四十二半前
訓應ゲンイデツへの



ルブリドの(兄)茂加大早, 分五半後
寫無がたみ試をルクツタ井松は學關



ムーチ田稻早たつ勝

(RH)野佐(LW)松平(RF)江堀(LF)木鈴(CH)原立列前……らか右てつ向

(R1)邑西(LH)田吉(CF)兄茂加(L1)本川(RW)弟茂加(GK)野佐列後

All-Japan soccer championship game between Waseda, Kanto champions, and Kwansai Gakuin, Kansai champions, Meiji Shrine, December 15, won by Waseda, 12 to 2. ① Nishimura (Waseda) and Miyabe (Kwansai Gakuin) exchanging headed balls in front of the Gakuin goal 24 minutes after the opening of the first half. ② Victorious Waseda, from right, front row, Tachihara (CF), Suzuki (LF), Horie (RF), Hiramatsu (LW), Sasano (RH). Back row, Sano (GK), Kamo younger (RW), Kawamoto (LD), Kamo elder (CF), Yoshida (LH), Nishimura (R1). ③ Mita (Gakuin) heading in front of the Waseda goal four minutes after the opening of the first half. ④ Kamo elder (Waseda) dribbling five minutes after the opening of the second half. ⑤ Nishikawa (Gakuin goalie) throwing himself to make a save 18 minutes after the opening of the first half. ⑥ Waseda scoring her twelfth point 43 minutes after the opening of the second half.

GL 前
KW 半
西 年
川 四
艇 十
身 一
し 分
て の
渡 關
す リ
ン 學
グ ゴ
ル 前
を 早
關 大



關學は野澤のシュート後三田進出ヘツディ
ングで攻めたが外れ早大川本に止められた

後半四十三分の關學ゴール前、
早大第十二點目を得た瞬間



第十三回全國高校蹴球大會は一
月一日から六日間本郷帝大グラウ
ンドで行はれる。前回は未曾有の
亂戦の中に突如一高が覇權を奪ひ
去つたが今回は果して何校が優勝
するか。メンバーの異動激しき高
校チームの強弱を論ずることは困
難であり、加之由來技術的のもの
よりも精神的のものによつて勝敗
が左右されるこの大會の豫想は全
く至難である。されば連勝の例は
極めて少く、また事前優勝候補と
目されるものが優勝することも稀
である。そこに負けても勝つても
涙する若人の熱氣の溢る、インタ
ア・ハイの面白味が存在するとい
へよう。

東北の雄三高は今年OH、OH
を送り出したが依然悔い難い底力
を有してゐる。東北の高専大會に
成城を押しつめて惜敗し神宮大會
には慶應に敗れては居るが、寧ろ
その敗戦は無上の教訓ともならう
FW、OHの攻撃力には見るべき
ものがある。

二高に次ぐものに北大豫料があ
り、闘士OHを送つたことは痛手
だが、なほ相當の實力を有してゐ

優勝を豫測出来ぬ 全國高校蹴球

強味は成城と早高に

大 内 弘

關西は依然として六高強く、主
將自ら攻撃の第一線に立ち、加
ふるに優秀な新人を迎へて専らFW
線の強化に努めてゐるから、攻撃
は相當期待されるが防禦は如何。
GK、DFの跡を如何に補強する
か、HB線の整備とともに首脳部
の苦慮するところであらう。

六高に伍するものに廣島と松山
があり、ともに新人に恵まれて前
途に希望を有する好チーム。然し
インタア・ハイは、特にその三回
戦以後においてはチームの團結心
崩れることのない精神力が勝敗を
左右するだけに新人に期待するチ
ームはいはゆる評判倒れに終るこ
とが多い。各チームとも大いに戒
心すべきところであらう。

五高は不出場の噂があるが事實
とすれば近年上り坂になつて來た
だけに如何にも惜しい。粘り強い
地道なプレイがこのチームの身上
である。五高に代はるものに七高
がある。英艦と引分けて意氣軒昂
たるものがある。九州のため萬丈
の氣を吐いて貰ひたい。

群雄割據の甚しいのは東京であ
る。前回の優勝校一高はその中心
たるOHを送り出したが技術的に
は前回よりも躍りを見せてゐると
思はれる。然しチームとしての迫
力がなく試合の運びの拙いところ
に不安がある。高専リーグにおい
て成城に敗れ、商船と引分けたの
はその現れと見られる。その後や

や精神的に充實を見せ帝大LB、
商大豫料を破つてゐるから技術的
には優勝候補といへよう。HBに
掩護された攻撃は力強いが守備線
の中央が脆い。
成城は往年の面目を改めて技術
的よりもOHを中心としての躍り
に活路を見出してゐる。東北大會
に優勝したのも一高を破つたのも
團結の力によるといへるが、個人
的には二三の選手を除いてそれ程
優れて居らず、それ故無意味なチ
ームではあるが必ずしも優勝は斷
言し得ない。

メンバーの充實してゐる點にお
いて随一といへる早高は練習が少
いためか近年不振を續けたが今回
の活躍は注目し得よう。東高は
これらに比べて技術的にはさして
見劣りするとは思はれぬが、チ
ームとしての力といふ點に大きな手
落ちがあるのではないと思はれ
る。首脳部の奮起を期待する。

この他タクホース的存在とし
て見出すことの出来ぬチームは先
づ武蔵であらう。前回はかなり弱
勢であつたが今度は異動少く傳統
の意氣を以て玉碎的に露進するこ
とは如何なるチームと雖も必勝を
期する譯には行かない。

水戸も漸く躍つて來たので今後
の練習如何によつては注目し得る。
地方では弘前の頭張りや番狂
せを演ぜしめるかも知れない。前
回善戦した浦和は多數の選手を失
つて意氣揚らず奮起を望む。その
他未知數チームとして四高及び新
参加の新潟がある。

戦前の豫想で問題にされぬチ
ームが見事な活躍をするのがインタ
ア・ハイの特色であるから、今回
もその如く突如英雄的チームが現
れるであらうと知れずまた良心か
らそれを望んで止まない。

日本スポーツ古事記

搖籃時代の蹴球

内野台嶺

東京高師の 搖籃時代

私が蹴球をはじめたのは明治三十八年、東京高師に入學してからです。當時高等師範の教授をしてをられた故坪井玄道氏が、高師の生徒に蹴球といふものを紹介したばかりのころでしたから、蹴球をはじめたといつたところでは、球を高く蹴つたり、遠くへ蹴つたりして喜んでゐたものです。たゞあゝでもない蹴球だつたんです。まあ、どうにか、かうにかチームといはれるものを作つて對外試合をしたのが、さうですね。入學した翌年の三十九年ころからだつたと記憶してゐます。

勿論そんな頃ですから日本人の間には坪井氏を有する高師以外にやつてゐる學校はなく、試合の相手といふのも外人でした。築地の外人團、横濱のジョセフス・カレッジの少年連、アマチュア・クラブ、イギリス大使館員などがその當の相手でしたが、いつも散散に破られては口惜しがつたものです。たゞこのうちジョセフス・カレッジの少年連だけはなにしろ相手が子供だけに我々にとつては手頃の實力でいつも相當の接戦をやつたものです。

然しその時の技術は今と異つて、非常に英雄主義的のものでした。これはその時代の影響が多分にあると思ひますが、遠くへ、高く蹴るのが最も上手とされて練習も毎日それを目的にし、試合となれば「俺が」の先陣争ひでドリブルの抜け駆け功名が盛んに行はれたものです。規則は今と大した相違はありませんでしたけれども、團體競技精神だけは可なり異つてゐました。

例へばハーフバックにはチーム中一番下手な者が廻され、フォワードが一番強いものが、次がフルバックといふやうな配陣でしたが、この現在と全く反對の配陣法だけでも、容易にその時代の蹴球といふものが想像されるのでせう。私は一番弱いハーフバックに選ばれたのですが、何度も試合をやつてゐるうちにハーフバックといふ位置は攻守兩様の重要な位置で、決して弱い者を持つてゐるべきところでないことを知りました。そこで蹴球部の會議の時大いにハーフバックのためにこのことを主張したところ幸にもそれが認められて明治四十年ころから漸次ハーフバックが重要視されるやうになり、次第に團體競技精神がチームを支配するやうになりました。

師範學校から地方へ進出
使用した球は未だ當時日本によいものがなかつたため、止むを得ず外國製のものを使ひましたが、とても高く百八十圓位の部費では到底球を自由に使ふ譯にゆかなかつたものです。だから練習の時と日本人同士の試合の時ばかりはポコポコの國産品を用ひ、外人相手の試合の場合は舶來品を使用するといふことに決まつてゐました。さうです。値段は舶來品が一個二十圓位、和製のポコでも十圓位だつたのでせう。おかしかつたのは舶來品を買ふとき、二個も買へば部費がなくなるとあつて大評定が開かれる騒ぎだつたことでした。

こんな風で我々は大いに蹴球を熱心にやつたのだが世間一般には未だ未だ認められてゐないので、その宣傳方法として高師の陸上大運動會の時、蹴球の對内試合をやつて見せることになりました。何しろ足で遠くへ蹴つたり、高く上げた時、時には頭で攻撃するといふ珍らしい試合に見物の方も大層喜びで拍手大喝采でした。こんなことから蹴球がだん／＼認められるやうになつたのですから面白いものです。

高師に次いでチームを作つたのが青山師範、それに次いで茨城師範、福島師範、山形師範、愛知師範、福島師範、師範系の學校をはじめましたが、實力は到底我々の比でなく、なんといつても日本人の間には高師蹴球部が天下獨歩の強

味をもつてゐました。ところがいまの慈惠醫院の前身である醫學部明治四十年頃蹴球部が出来て、友成、口羽といふ神戸の外人仕込みの選手が現れるに及んで、我々も油断出来なくなりまして、一度も負けた記憶はないけれども友成、口羽の凄味には大いに恐れをなしたことはハッキリ憶えてゐます。惜しいことに醫學部チームはこの二人の名選手が卒業するといふにチームそのものが消えてなくなつてしまひました。

探め抜いた
芝浦の極東大會
明治四十二年、私は高師を卒業して豊島師範に赴任し、毎日日々生徒を相手に蹴球ばかりやつておりましたが、選手が卒業すると同時にバツタリ止めてしまふのを甚だ残念に思ひ、社會人チームの結成を志したのです。後年活躍した「東京蹴球部」がそれで、いま朝日新聞の蹴球記事に名筆をふるつてゐる山田千郎君などもその時のメンバーの一人です。

ろ、同志に燃え切つてゐる比島の選手が「侮辱した」とイキリ立つたのが切つかけで、試合の最中、あつちでもこつちでもなぐり合ひがはじまつたのです。ビックリした私が仲裁に入ると今度はフイリッピン人に支那人の應援團と間違へられてなぐられる有様で騒ぎは大變なものでした。レフリーは外國人でしたがこの大喧嘩に恐をなしてどこかに姿をかくし、漸くにして騒ぎを収めたが大切のレフリーがゐないと云ふのでまた一騒ぎ

止むを得ず東京蹴球部の名を借りたのです。關東大會で忘れることの出来ない人が一人あります。いま登山界の權威者として有名な大阪朝日新聞の藤本三三氏です。當時藤本さんは東京朝日にゐられましたが、高師蹴球部主將故竹内廣三郎君と友人關係にあつたところから、我々の方で大奮用の不足を新聞社後援で補ふ頼みを持たされたのです。藤本さんはこの我々の謙しい頼みを快く引きうけて社會部長の山本氏にまで話されたのです。すると未だ當時この新聞社でもやつてゐないのだから一つ先鞭を

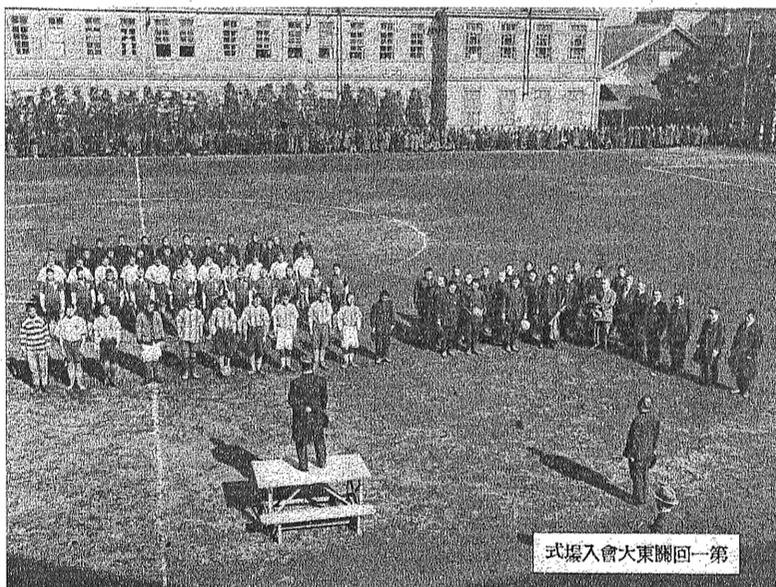
語のうちコーナーキックを蹴球「ゴールキック」を蹴球「フリーキック」を自由蹴などといつたのは今でもよく記憶してゐます。とにかく極東大會の開催によつて蹴球が漸く飛躍の第一歩を踏出したことを思へば、私達にとつて藤本三三氏の名前は忘れられない名前です。

第一回關東大會は大正七年二月九、十、十一の三日間にわたつて高師球場で花々しく行はれましたが、十一日の決勝戦に、久瀨宮様、山階宮様、竹田宮様六殿下が御臨場あらせられ、しかも多大の御下賜金さへ戴き、我々關係者一同恐懼いたしました。そこでこの光榮を永久に記念するため御下賜金をもつて大會優勝旗を作成いたしました。今日まで傳はつてゐるあの優勝旗がそうです。

大日本蹴球協會の成立
第一回關東大會の時英國大使のグリーン氏が書記官のヘグ氏を伴つて來場されてゐましたが、私達はそれがちに大日本蹴球協會組織の動機にならうとは神ならぬ身の知る由もなかつたのです。忘れない大正八年の三月廿日です。私のところへ高師の校長嘉納治五郎先生から呼び出しがありまして、何事かと思つて早速上りました。何事かと思つて早速上りました。何事かと思つて早速上りました。

感激の思ひ出
協會設立以後のことはいもうそんなに昔話でもなくなりますが、お話をどうかと思ひますが、たゞ私が過去、現在を通じて永遠に記憶すべき一事を語りたしませう。それは大正十二年大阪で行はれた極東大會の時のことです。大正六年の大會で散々に買つてしまつたので體弱も餘り蹴球には重きをおかず、グラウンドなども野球場を野球のない時使用するやうな備なない有様だつたのです。この頃には大方々に強チームが出来てゐましたから全國的の豫選をやり、確か大阪サッカークラブが代表として出場したと記憶してゐます。

或る一日のことでした。秩父宮殿下が台臨遊ばされ、御熱心に御觀戰遊ばされておいでになりましたが、そのうちに雨が降つてまゐりましたのでお付きの方が、「時間もまゐりましたから御歸遊ばされては」と申されましたが、殿下には中々御歸遊ばされず、雨中編輯筆を御手に、ハーフラインの近くまでお進みになり試合が終るまで御立ちつくし遊ばされましたが、その時御説明申し上げた私としては全く感激にうたれて思はず涙がにじんできるとどうするとも出来ませんでした。



日本最初の蹴球大會
極東大會が契機となつてその年の秋九月東京蹴球部が發會式をあげ、翌大正七年には東京蹴球部主催の下に關東蹴球大會を行ふことになりました。ほんとうのことをいふとこの大會の主催は、名前こそ東京蹴球部であるが高師蹴球部がその本體で、學校當事者の意見から高師の名を出すことが出来

つけて朝日新聞でやりませうと後援を引受けられたばかりか、大會に要する一切の費用から参加チームへのメダル、はては役員の手当まで出すといふ至れりつくせりの好意を寄せられたのです。

その時藤本さんは毎晩のやうに我々と一緒に集まつて規則の研究や新聞用語の研究やらをやつてくれました。恐らく大會が開始されるまで毎夜の如く續いたと思ひます。その際藤本さんが使はれた用

い、頼みに行つた會長の候補者を挙げてみると藤本君侯、鍋島侯、後藤侯、大谷光明氏、嘉納先生、岸博士の方々だつたが何れも駄目で、最後に藤本の理事をしてゐられた近藤吉吉氏の盡力で現會長の今村次吉氏を得ることが出来ましたが、その後は比較的スラ／＼と運んで大正十年九月十日目出度々現在の大日本蹴球協會が成立したのです。

六高優勝の経緯を辿りて

銘記すべき肝要事は

『巧緻は基本の完成から』

全国高校蹴球大会の印象

山田 午郎

早高の撃破が

優勝への光道

世間並の初春の愉快を他所に毎年年度に行はれる全国高校蹴球大

會も回を重ねて十三、早高、六高はとも三回の優勝を占めて本大會のトップを切つてゐたのであるが今回は優勝の叫び聲薄かつた六高が群雄を薙ぎ倒してこゝに四度覇権を獲得した。

本大會は参加が二十四校、元旦から六日間東大球場で行はれた。参加各校の力量は互角で勝敗の数は混雑たるものがあつたが、中でも粒を揃へた早高をはじめ、二高北大豫科、六高、水戸、武蔵、成城などは優勝候補と目されてゐた技術よりも意氣で行く本大會は大會前の豫想は兎角裏切られやすく今回も結果から見ればその例に洩れないものであつたといふことが出来る。然し六高が優勝したとて全然その豫想を裏切つたといふものではなく、傳統の意氣、チームバランスのとれた點、試合の運びからして優勝チームとしての貫録は十分に備へてゐた。

前回の優勝一高を御け第二回戰でこれも優勝候補の成城を破り、廣島を准々決勝で倒し准決勝では六高のため延長戦の末敗戦の苦杯を嘗めてしまつた東京高校も、准決勝で可惜散り失せた早高も、共に六高に優るとも劣らぬ實力をもち合せてゐた。

六高の四回覇権獲得には意氣、

れば意外といふよりも順當であつたのであらう。六高は二高F線の脆弱を衝きまくつて決して多いのではないがチャンスを決定的のものとして試合を進めた。二高にもう一人の大機がほしいといふ觀衆の囁息も耳にしたがただ一人の大機が球のあるところ大機ありでよく廣くしかも鋭く動いたのであつたが、それは全く及びもつかないことであつた。六高の短蹴聯絡をよくカットしてF線に送り、速いバックアップでF線の軌を補ふことにつとめたが如何に大機が好判断を以てしても六高の確實なパスを破り得ず、次第に點差を加へたのは不思議とするにはあたらない。二高が飽くまで試合を攻勢に進めようとしたのは背かれはするが、チャンス・メイカーとしての浦田、吉田(三)をマークすることなく放り出して置いたのでは大機の巧技をもつてしても常に後手を引くのが當然であらう、六高が二高をして策を施さしめなかつたといふよりも二高が餘り策なくして試合に臨んでゐたといふものであつた。

臨戦無策の

二高の進退

これに匹敵すべき苦闘は更に准決勝においても繰返された。細技に長けた東高が緻密に試合を運ぶのに對し相當苦戦を續け、これが1-0東高リードの試合となつて現れ、追撃戦に入つたが僅か三分の後にはこれを同點とし、本大會三度目の延長戦とした。

ゴールゲッターを擁する左側をきかして一點を加へ執拗な東高の追撃から巧みに逃げ切つて決勝の一手手前に進んだ。

福岡、山形、八高、北大豫科を此程不安も感せず破つてのけ頼風瀧帆の二高と覇を争ふことになつた。勁敵を向ふに廻して連日苦闘を續けた六高が優秀な體格であるとはいへ勝味ありとは斷言出来なかつた。然し試合は蓋を開けて見

缺きF線を決定的に抜けれぬとあつてはコーナーキックから獲し出された零敗を免れた一點であつたのも致し方あるまい、真須の布くF線は鮮やかさを欠いてはゐるが地味ながらも攻守には必要なだけ與つて攻線も守備線も幅してゐた。

GKは吉田にピンチと思はれる事がなかつたからこれは別として平賀は續け續け起る危地をよく外してゐたといへよう。

二高は疲労度の多い許りではなく球を廻すにしても單的で總體的に見れば敗戦止むを得ないものであつた。六高の完勝は實しく認めるところに相違して試合内容の乏しかつた所に萬人感嘆を發すのはなからうか。

大成せんには

先づ基本訓練

二高の敗戦について思ひあたるのであるが勝敗はいづれにしても山形、松本、静岡、浦和、新潟、佐賀、松江など肝腎なキックが未完成の域を脱してゐない、二高が覇権を逸したのも一面キッキングの未熟にあつた。負けじ魂とキッキングのみでも本大會の武器といはれてゐることから思ひ合せるならば試合を頭腦で運ぶ前に先づ原始的の基本訓練を重要視されねばならない。六高をみて判ることであるが試合数を重ねることのみが試合の巧緻を體得させることではない、二高のチャンスを作る事ではなく、ゴールを陥れる者なかつたのもキッキングの劣悪なるためであつた。粗雑の體はあつても廣島の如く技術と闘志で試合を進める段階を経るのだから強靱なるチームの完成は就らないと見た

試合を逆観して

軍扇は六高に

六高は第二、三、五の各點を定石的にF線VのセンターリングをL I 近重がキックまたはヘッドできめてゐるのにも二高のマーキングは手薄であつたバツクスは人を缺いてゐたといへよう。

大機のフィードは兎も角、追風でありながらF線Vのキックはこれを風に乗せ得なかつた。F線Vは六高金田の優秀なキックを問題にせずとも雙方の間に懸隔があり大機一頭地を抜くとするもH線は粒の揃つた六高方が優れ、F線Vは二高の寄せも侮り難きものがあるがF線V大泉の球捌きに難がありL I 佐藤の罌鼠の如くそして執拗なブレイが目立つただけで兩翼のセンターリングに至つては六高の浦田、吉田に比すれば大きな開きがあつた。

それらに肝腎なゴールゲッターを

い。東京附近の如く感まれた環境にあつて十分洗練されてさへ優勝容易ならず地域偏在の六高、北大豫科、四高、松山等々が勇名を轟かす所を省察するも決して徒爾ではあるまい。巧緻は基本の完成から自づと生れるもので敢て模倣に依つて獲得するものではない。

新春蹴球評語

早慶を迎へての 甲子園の四試合 三宅 二郎

カレッジ蹴球のリーグ試合がすむと關西のフットボール界は火の消えたやうな寂しさとなるので、今年のお正月は一つ賑やかに迎へようぢやないかといふので東都が

ら早慶の兩大學を南甲子園運動場に招待したのであつた。

第一日の元日は慶應と關學、早大と關大の試合を、第二日の四日は慶應と關大、早大と全關西選抜

の四試合を行つた。結果は慶應は關學に3-1、關大に2-1のスコアでも勝ち、早大は關大に3-0で勝つたが全關西には反對に3-0で敗れて一勝一敗の成績を發して歸東した。

コンデインヨンは最初の日は快晴微風といふ全く恵まれたものだったが第二日は鬼門の濱から吹き寄せる風強く加ふるに寒氣も募つて状態は良くなかつた。

慶應が二勝したがこれは順當な結果だらうか？

戦前の豫想では關西のどちらかに喰はれて結局一勝一敗位の成績となるのではないかと思はれてゐたのであつた、ところが二勝といふ上出来な結果をあげられて終つてこのところ關西顔色なしといふとこだ、しかし全關西選抜がたとひ早大がベストメンバを捕へて

ゐなかつたとはいへ、制勝し得て全敗から漸くまぬがれ得たのはせめてものなぐさめだつたといふものだ。

「それにしても關大は相も變らず試合下手だね」

試合下手といふよりもむしろ前線が不均整なため得点をあせる結果そこ無理が出来るのである。

しかし早大には後半二十一分まで無得点に阻み、また慶應には後半得点となるべきチャンスが度々迎へながらやつと一點の奪還に止まつたなどは試合上手とはいへないよ、だが今少し兩翼が動いてゐたらと思つてゐるだらう。

關學は全體的に關大よりよくまとまつてゐるチームだが、今一つ底力のないところが惜しい。技術的な方面からいつて、慶應に比してさう見劣りするチームではなかつたが結局慶應FWのスピードのあるラッソニに手出さずバックが立て直る餘裕を持たなかつたのが敗因といへるだらう、もちろんフ

オワードの單調な攻め口も敗北に拍車をかけたものだつたが。

「よく關東のショート・パスに對する關西のロングパスといふが最近の試合を見てゐるとそんな風に思はれないのだが」

小林三氏の著私の行き方」のなかに東京型、大阪型で見ると東京は政治蹴球、大阪は實行蹴球で、關東の方は理くつで進んで行つた感があるのに反して、關西は實際でつき進んで行つたからそこには必然的な違ひは見受けられたが、しかし最近の動向はとりたてていふほどの變りはない。

もちろん人の風貌に變りがあるやうに一つ一つのチームを檢討するときはいづれのチームにも興つた得失を認め得るのは當然だが。

「早大の陣容は關東リーグのときとなら多少變つてゐた、めでもあらうが思つたほど強いチームぢやなかつた、特に對全關西の試合のときなどは大したことはなかつたよ」

たしかに香ばしくなかつた、全關西のときももちろんのこと對關大のときなども後半二十一分に一點を収めるまでは關大バックの健闘にあつて頗る凡戦をしてゐたわけしかし得点してから後の攻め口はさすがに全日本學生界のナンバーワンのことだけあると首肯せしめるものがあつた、あのぐんぐんと力強くつゝ込んで行くところなどは感心させられた。ハーフラインの執拗な掩護のもとにね、一言にしていへば早大は強引なチームだといふ感じがするね。これに反して慶應は絲を繰るやうな所謂巧敏といふ感を受けるチームだつた、關學はとりわけいふ程の特徴もなければまた缺點もなく未完成なチームで、關大は不具者のやうなまともでないチームだつたといへないだらうか。

「この試合は東西の強豪を寄せ集めた試合だけに各方面から異常な

關心をもたれたものだつたが、その中で光つてゐた選手は誰だつたと思ふ」

この試合だけをもちつて斷定を下すことは當を失する虞れがあるが先づ僕の眼に映じた選手を拾つて見ると早大ではFWから川本君と西島君は又句のないところだね、

加茂君と平松君は關大のときは餘り芽えなかつた、ハーフでは立原君。

慶應ではFWの右近君、播磨君だね、駒崎君はよく動いてゐたが今少しいふところがある、廣島一中から行つたGの松元君もなかなかよくつたね、關大ではG

Kの上吉川君は足も早くまた捕球も確實でGの右翼にあげ得べくそれにFWの大橋君、全關西では神商大の大谷君、神高商の小橋君OBでは赤川君、後藤君などが目立つた選手だつたと思ふよ。

この試合は東西の強豪を寄せ集めた試合だけに各方面から異常な

關心をもたれたものだつたが、その中で光つてゐた選手は誰だつたと思ふ」

S 11-1-15



英 獨 國 際 蹴 球

昨年十二月四日イギリスとフランスで舉行、三對零でイギリスが勝つた

寫眞はドイツG K

ハンス・ヤコブ君

の防禦ぶり



S 11-2-1

命 二 強 の 對 戰

ムハンミーバ對部樂俱ルナセーフ雄強の界球蹴スリギイ
デタス・ルナセーフのレブイハ日四月一は合試球蹴の
ワオフ・タンセ・ルナセーフは眞寫たれさ行舉でムアイ
バルフのムハンミーバるす衛防らがなれ倒を撃攻のド
クツ

球 蹴

東西對抗の二球技

勝機を前半に決した 關西陣の善闘

三宅 二郎

一月十九日阪神沿線中子園南運動場において行はれた第五回東西選抜對抗蹴球試合は、今期最終の最大試合でありまた渴望せるベルリン・オリンピック大會選手選考を目前に控へてゐたので試合は各方面から異常な注目を惹いたことは勿論である。グラウンドのコンディションは申分なかつたが、しかし頃から吹き寄せる風はかなり強かつたのでボールはためにプレーヤーの意のままに運ばず時には前方に蹴つた球が後戻りする事さへあるといふ有様で期待された試合であつただけに何となく心残りが出てゐる。

☆ ☆
關東は稀らしくも今までに見ない陣容をもつて場に臨んだ、即ち學生界の玉座を握つた早大チームに僅にフルバックに東大出の竹内君を一人さし替へたのみ以外は単一チームで、關西に相對したのであつた、關西は現役から七人、OBから四人をつまり個人力種を基調としてライン・アップを形成したのは従前とは變りがない。關西は前半風を背にして2點を先取したが、圖にあつて制勝の大きな原因をなしたと見なし得ないことはないが、しかし試合の跡を顧みるときこの試合は關東側にとつては少しも勝味のあるものでなかつた。正月早々早大はベストメンバーではなかつたが既に全關西のため敗北を喫してゐるあともあるの、いやしくも全關東の選抜チームとして銘打つて西下する以上は、他にもつと陣容整備に對して何等かの方法があつたであらう、それとも他に選ばれるべき適

☆ ☆
當な選手がゐなかつたのであらうか、その間の事情は知らないがこの選抜試合は東西學生優勝校對抗試合とも、斯界の最大行事とされてゐるだけに一層に惜しまれてならない、關東協會としても願みて定めし思ひあたる節があるであらう。

☆ ☆
試合の興味は強風のためかなり減殺されたのは致方がないが、しかし全日本の精銳を一堂に集めた試合としては眞に物足りないものであつた。少々の風で自己の持つプレーをくづされるやうなことは駄目で本能的に風力をマスターし得るやうにならなければわが國蹴球界の前途はまだ遠慮といはなければならぬ。

☆ ☆
前半苦戦した關東は後半に入つてからキック・オフの球をLWからLWへそれから更に右へと息をもつが返す見事なショット・パスで一氣に關西ゴール前に攻め寄せると見ると最後に得た西邑のゴール・ショットはこれまた堂々たるものでよく一點を擧げたのであつた。

1-1と開いてからは、關東側の憂色とみに深み凡蹴を繰り返すに過ぎなかつた。後半の中ごろ關西は暫く關東を急追したことはあつたが、しかし後半の大部分を關東は優勢を持しながら得点をアヘッドするに至らなかつたのは要するに攻撃態形の無策にその端を發してゐる。最初から最後まで同じやうな調子で關西陣を刺らんとしたために關西のバツタはその突進の道

を豫知して容易にその進路を断ち得たのである、かゝる場合關西バツタの防備を幻惑さすためショット・パスのみの武器を捨てたまには風を利用してロングキッキングを放つて關西の後陣を亂してから後に得意の手を用ひるのも形勢挽回の一方ではなかつたらうか、關西の善闘を論じ詰めればH小橋の著しい活躍でOH赤川君、RH小橋君の攻防は殊に牙え、攻防の中軸としての責をよく果してゐた。

LW大谷君は脚を痛めてゐたのでよいところを見受けられなかつたが市橋君の好技は目立つてゐた。



東西對抗蹴球後半關西のゴール前

果然大接戦の末

慶大B・R・B優勝す

全日本蹴球選手権大会

野村 正二郎



本社新聞の優勝賞を受けた慶大B・R・Bチーム

第二回全日本蹴球選手権大会は六月十九、二十、二十一日の三日間、山梨県球技場で行はれた。時しむべし、慶大B・R・Bは、この大会に初舞台を踏むが、蹴球代表が全国的な力強い後援と期待を買って、征伐に就くのに當り、この大会を開催してその行を壯にするには、一層意義深い企てであった。二十日のオリンピック列車出発に際しては、出場チーム全員東京駅に参集して名實共に全国的な歡送を以てした事は、代表選手達の意氣を更に高調せしめたものと推察する。

本大会に

海代表名古屋學專門學校、關西代表關西學院大學、朝鮮代表曹成專門學校の五チームで、戦前の理想では朝鮮、關西、關東伯仲の間においてその競争が何處迄強豪に迫込みうるかの程度であった。ところが實際試合が始まつて見ると、これはと豫想的の中したことは最近補に現れるところで、これは情報も正確になつて来たためか、或いは各地方のチームのレベルが平均して来たためか一寸興味のある問題である。恐らく兩者相俟つての結果であらうが、もし後者の理由によるものが大であるとすれば、各地方のレベルを向上せしめるために多大の考慮を要する次第である。

試合の組合せは次の如く、結局B・R・Bと曹成專門とが決勝戦に顔を合せ、大接戦は遂にB・R・Bに勝進を遂げてタイム・アップとなつた。以下順を追つて各チームの寸評を試みよう。

關西學院

従來朝鮮

この試合

【第一回戦】

| | | | | |
|------|-----|-----|-----|-----|
| 曹成專門 | 10 | 6 | 1 | 1 |
| (朝鮮) | (6) | (1) | (1) | (1) |

【準決勝戦】

| | | | | |
|------|-----|-----|-----|-----|
| 曹成專門 | 2 | 1 | 1 | 2 |
| (朝鮮) | (2) | (1) | (1) | (2) |

【決勝戦】

| | | | | |
|-------|------|-----|-----|-----|
| B・R・B | 13 | 6 | 7 | 0 |
| (慶大) | (13) | (6) | (7) | (0) |

大學は前年度の儘の陣容に更に生氣と充實を加へ、歴史的に地方競争を通じて来たもの、特に最近のU.F.野澤の當り物としての聲あり、或いは曹成專門を退けるのではないかと期待されたほどであった。しかるに蓋を開けて見るとオワワッが曹成專門のハーフおよびフルバックスの走力に壓されて球をつぶされ、加ふるに両ウイングの出来悪く、山藤の健闘によく二点を擧げて二一とした。前半のリードを、後半で持堪へることが出来ず、終に十九分〇秒にフルバックスの中央を一舉に割られて得点され二對二の同點となり、爾後關大にも慶大右側に出る好機を得ながら、RWの干渉一律のプレーは徒に曹成バックスの好餌となつてゐた。かくて延長戦に入り、曹成の絶好の左CKからRI木のシュートはGKのフラインドを衝いて一點を得られ、續いて更に一點と逆二點のリードを占められては、この日のオワワッの出来としては意荷に過ぎ、如何ともなし得ずして自滅してつた。バックに今少しの粘りがあつたなら曹成のバックスを抑へられたためか鋭鋒を現し得ず、却つてI山藤の好位置が目立つてゐた。またGK中村の好防と長蹴は、しばしば味方に逆襲の機会を與へてゐたのも見逃せない。關大チームの強味の二つであらう。

チームの特徴の一つは、位置的プレーにあつた。よく球をキープし相手のゴール前でシュートパスを連続してマークを動揺させ、その眩惑するを待つてフリーシュートの機を狙つた。この戦法はハーフバック線の攻撃参加がない點に致命的な缺陷を持つてゐた。勿論攻撃と防禦とをオワワッとバックメンに割然と分擔せしむる舊來戦法を脱してゐるものと推測するが、實際に現れたところでは攻撃の厚味といふものが認められ無かつた。

今度の曹成專門もこの感無きにもあらず、ミッド・フィールドにおいてはFWとHBに連繫もあり、FW間の聯絡も適切で、或いはシュート・パスに、或いはロング・パスに急速にゴール前に殺到しながら、その位置における處置には欠けるとあるかの如きは一考を煩はし度い。ゴール前の不必要なシュート・パスは少くなつたが、自らの技術を過信して、完全なフリー・シュートの機会をのみ捕へようとする點はなかつたか。FWがゴール前に寄せ切つた場合のHBのフォローにも研究の餘地がないだらうか。また防禦に際するRW、特に両インナースの協力が不十分であることも指摘し得るものゝ一つである。

對B・R・Bの後半十九分、RI木のシュートに二對二となつた直後、B・R・B防禦陣の混亂に乗じて今少し慎重さと、オワワッ・アップがあつたならば、勝進を逆轉せしめ得たかも知れないことは、G・Kの守備範圍の狭いことと共に曹成軍のために惜む次第である。

第一回戦に曹成專門に當つた東北學院俱樂部と、準決勝にB・R・Bと對戦した名古屋學專門とは共にチームとしては未完成の域を脱せず、相手の鋭鋒に眩惑されて右往左往、唯懸命に振らされるのみでは勝敗も止むを得ない。マキキングを忘れ、カッティングに出るには出遅れ、却つて相手のスルー・パスを容易にするが如き結果となり、またカットし得た場合にもその處置に自ら窮して漫然と蹴出して、味方にフリードする餘裕を缺いてゐた。特に名古屋學專門はこの感を深くする。闘志においては敢て他チームに劣らぬが、チーム編成後日なほ浅い名義としては恐らく止むを得ない結果であらう。

東北學院の場合は球場も降雨のために不良であつたから、幾分その影響もあつたであらうが、オワワッの攻撃陣型に研究を求めた。フリードされてからスタートするやうでは防禦側に対して優位

を保ち得ないと同時に攻勢の進度を遲滞せしむるだけである。後半三十三分U.F.野澤からU.F.野澤に出た球を、O.F.更に左に捌いた際、I.W.が深く切れ込んで来てゐた爲にフリーマークの機会を掴み得たのであつて、この貴重な一點の裏に含まれる作戦の妙味こそ東北學院の本大会における收穫であつたらう。

昨年年度において全日本選手権、および地方對抗選手権を連続掌握した朝鮮から、この大業を二度重ねるべく送られて来た曹成專門學

は、半島代表たるに相應しい堂々たるチームであつた。その優秀な體格は關大、B・R・Bの二隊と連戦して些かの疲労の色をも見せず、かつ自由な足技、強力なキック等も亦内地チームに一段と立優つて見えた。そしてこれらの長所から我々の間にやゝもすれば不足勝ちに考へられる力強さを感じさせた。

元來關東地方の諸チームは、毎年春季にはコンチンションが著しく低下してゐるのを普通とするのであるが、今年度はオリンピック選手の練習に刺激されたものか、比較的試合能力の充實したチームがあつたことは豫選を通じて感ぜられた特異の現象であつた。

蹴球

初陣の意氣で 戦ひ抜く決心

コーチ 竹腰 重丸



竹腰 コーチ

オリンピック大會の蹴球競技は八月三日からベルリン・フットボール競技場、並びにオリンピック・スタジアムで行はれるのであるが、その試合細則の大略は次の通りである。

技術的執行機關はF・I・F・A(國際蹴球聯盟)で、決勝方法はトーナメント式一回試合とし、九十分にて無勝負の場合は三十分延長し、なほ無勝負のときは再試合を行ふ。そして優勝戦に敗れた者を第二位、準決勝両敗者間の試合を第三位とし、その他の順位は認められない。

参加國数が十六を超えた場合はスケデュールの關係上、大會の正式開始以前に十六に減數するための試合が行はれることになつてゐる。そして現在までの申込みだけで、棄權のない限りこの減數試合は當然行はれることとなつてゐる。この試合を何國が行ふことになるかはグラウンド・ジュリー(最高の技術的裁定員)が指定する規定で、抽籤にはよらない。そしてまたこれらの諸試合はベルリン以外のドイツ國內の各都市で行はれるのである。このことの最終的決定は六月三十日までにはされただけ規定してあり、我々がこの試合をすることに否か否かについては未だ確報に接せず、現在と

してはそれに當る豫想の下に出発しなければならぬ次第である。

蹴球は世界競技とも稱すべきスポーツで、國際蹴球聯盟に加盟してゐる國は五十三ヶ國の多きに達する状態である、そして他に何ら見るべきスポーツを持たぬ國においても蹴球は大眾の間に普及してゐり、世界中ゴール・ポストの立つてゐない都市は探すに困難であるといへばはれるほどである。今回我々は初めてその國際大會に出場することになつた次第であるが、参加の希望は十年以前から持つてゐる。

今日まで隠忍

を續け國內普及

と實力向上に専念して來たのは、實にこの世界の情勢に對照してのことであつた。今や漸く参加の機



蹴球 チーム 竹内 主將

運が熟し、實に文字通り十年待望の機會が到來したのであり、我々は勇躍して征途についた次第である。故に前途に當つて、我々は第一に過去三十年の長きにわたつて積み重ねられた先人の努力に對し、敬虔な感謝の念を表明せざるを得ない次第である。

蹴球は、元來時間や距離などの計測によつて勝敗を決する競技でないために、記録の比較對照による強さの豫測は困難であり、かつわが國は初めての参加であるために、いづれに對して試合し易いかまたは困難であるかなどの豫想も難事である。また事情が異つてゐる場合でも、我々試合に當る者として一切の豫想を排し、ひたすら挺身協力して戦ふべきであると信ずる。我々は拚死奮進の氣合で徹底的に戦ひ抜く決心である。

蹴球の技術的傾向としては、スピードと體系を特色とする北歐派、および巧緻な技術を基とする南歐派の二つが普通に擧げられる。そしてわが蹴球界の最近十年の歴史の中にはその二つの傾向の一つを主流とする時代があり、この一兩年はこの二つの時代から更に

めて検討するべき命題であらう。たゞ我々は初参加といふことのために、徒らに相手が未知のものであると懸念するやうな氣持は持つてゐないことを表白するに止めた。

眞剣な闘ひの 中に得た體驗の

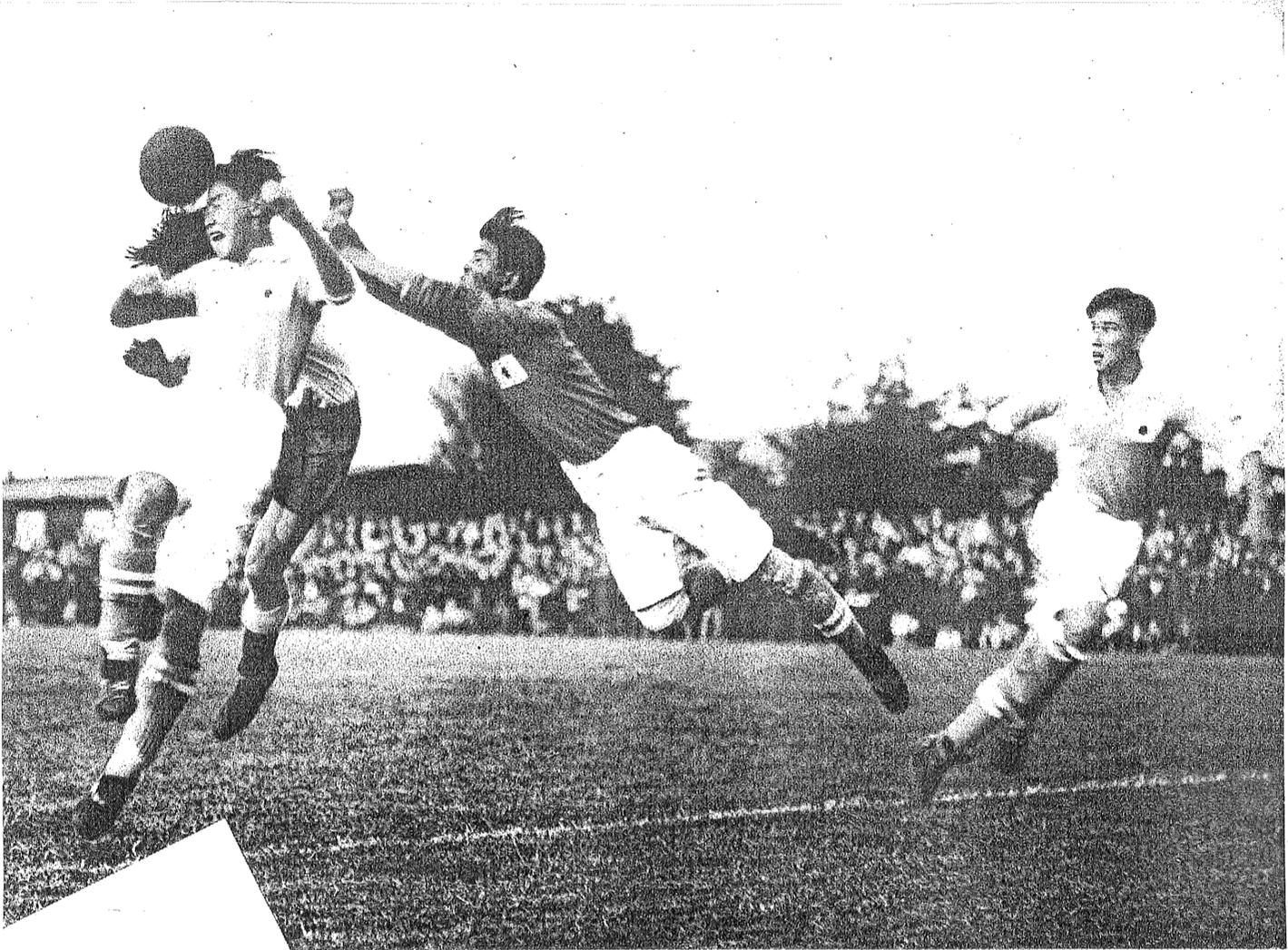
今回のチーム編成は、現在のわが蹴球界の持つものを十分に持たしむべく努めたもので、初参加なるがゆゑに見學を主とした編成などといふ試合に對する決心不十分な編成ではない。蹴球競技に理解ある者ならば必ず諒解し得ることであるが

みが將來の進展に役立つものであつて、決心不十分な試合は寧ろ將來の障礙となるべきことが十分に考慮せられてゐる。

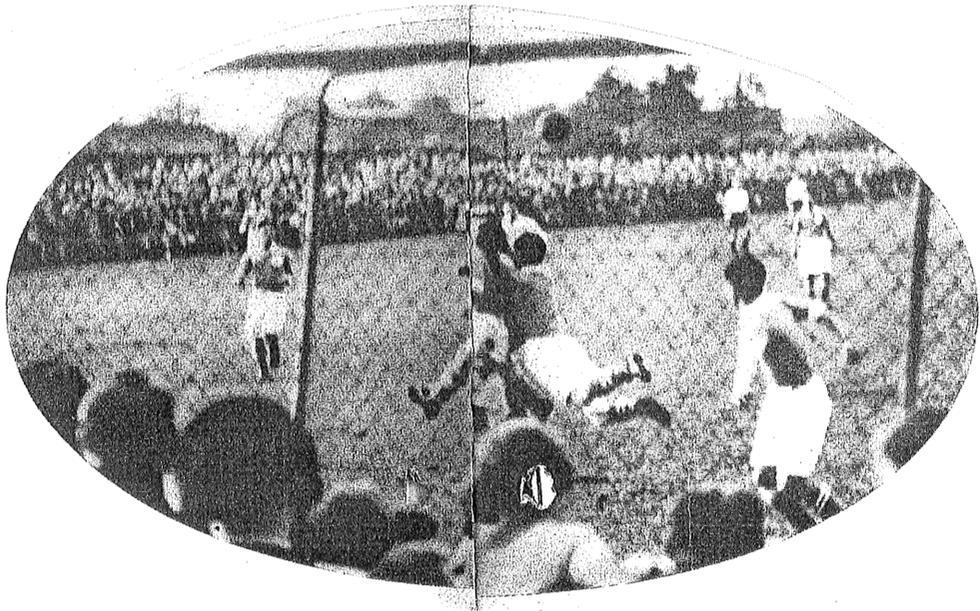
身體の調子を一應無視した練習期を経てのち、六月に入つて急速に全體的な技術的纏りを高め、攻撃については九十分通りの成果を得たやうである。ベルリン着後一ヶ月間の練習、および練習試合によつて守備に一層の纏りを持つに到れば、我々は試合に當り、現在のわが蹴球界の代表として技術的にも十分に持つべきものを持つに至ることと信ずる。

徒らに相手を臆測せず、我々はわが蹴球界の代表として自ら持つべきものを持つべく試合の直前に到るまで努力を續け、試合に當つてはそこに我々の信念を見出し、勇往邁進生命力のあらん限りを盡して戦ひ抜く決心である。

S 11 - 8 - 23



オリンピック開始前日本蹴球代表
チームは七月十四日伯林ライニツ
ケンドルフに獨逸ウツカー倶楽
部と對戦 3-0で快勝先よし



※ 右ページからつづく

得る所多かつた

伊太利との對戰

初舞台にこの堂々たる一勝を収め、中二日を置いて愈々七日全歐を風靡するイタリー・チームとの對戰である。對スエーデン戰に全力を傾けつゝして疲弊いまだ癒えぬにこの對戰は如何に感奮目に見ても勝味はなかつた。第一回戰の對米戰に2-0とはいへ、小手調へ氣味に軽く試合を進めたイタリー軍は、事實刃に血ぬらさぬやうな試合をしてゐる。體格はスエーデンにも優る巨漢ぞろい、フライングボールは如何に彈力を利かしたとて、ハツピングは何の益もないものと斷念せねばならぬ相違で、鐵壁に固ふゴム移にも等しい差があつた。大人と子供ほどの相違といふよりも、素足で向ふほどの開きがある。勿論技術も斷然優れてゐた。最初から捨身に出で、そのボールを陥れる覺悟でぞまねばならなかつた。フールドにひろげられた彼等の身體、その脚と足、それはフールド全面を徹するたといつてもよい全く隙のないものであつた。ボールは彼等の脚と足のかげにたくれてしまつてゐたといつてもこれは過ぎたといひ方ではない。燃ゆる意氣、倒さねば止まぬその闘志も、それは彼等を抜くには遠く及ばぬものであつた。その有名に怯まず、肉弾を以て應戦したが、追へども、追へども追ひ切れず、その巧みなフット・ワークに物をいはせて攻め立てるが、彼らの守りは實に堅固そのものであつた。寄せては返し、返しては寄せるその定まつた

試合の駆け引きは堂に入つ

たものでボールをマスターしてゐる彼らが一度ボールをその足にあてれば、その狂くところはボールが必ずあるといふ巧妙さ、それに體力は鬼に金棒の役をなし、疲れ

切つてゐるわが代表選手にとつては全く施す術がなかつたのであつた。體格、技能の四拍子を揃へて

も致し方ないものであつた、しかし吾らの見た目にフウル・プレイと映つても、それはレフエリーのホ弁スルとはならなかつた、ここで相當試合は亂暴であつたといつて置きたい、相手のプレイを故意に妨害すると認められるフツシニ、體位を崩してしまふトリッピング等が極めて無難に行はれてゐた、それをレフエリーは無難作に看過してゐた、もちろんこれがあつたから敗れたとは見ない、しかしプレイの圓滑さ、形勢の有利を覆されてゐたことは見逃せない、暴に報いるに暴を以てするの卑劣を述べず、敗れても悔いる所なき堂々の試合を進めた事に對して吾々は感服せず、あられなかつた。

試合は相當に亂暴である。レフエリーは相當ラフである。しかしこれを日本の蹴球界が模倣せねばならぬものではない。この亂暴に堪へる體格、技術について如何にして應ずるか考へねばならぬ。彼らのフット・ワークは確かに優つてゐた。吾々はこゝに到達することの激しい練習と研究のあることを強調して置きたい。鈴木總監督の話であるが

體力の劣つてゐるが故に敗

れたとはいはない。吾々は今後この體力の劣悪を、技術を磨くことによつて補ふことについて考へねばならぬ。

體格の相違で勝敗が決するといふ事は認められるが、このハンディキャップを僅かでも縮小するために技術的向上の餘地が残されて

ゐることを忘れてならぬことをこの試合において痛感させられた。攻撃線の闘士右近鮮やかなキーピングを以つて喝采を博してゐた佐野の傷ついたことは、後半の差を一應甚だしくしたのは勿論である、ベストコンディションにあるならば、スコアの示したやうに體格の弁の如き結果とはなつてゐない。體力、技術に開きがあらうともB-0などは考へられないものであつた、各新聞紙は同情的の記事を掲げ、試合を捨てず最後まで勇戦したわが代表チームの試合振りを賞してゐたが、立派なスポーツ精神に終始したチームに贈られるそれは當然の辭であらう。如何に實力の相違があつたとはいへ、ベストコンディションの下にわが代表チームの力量を検討し得なかつたことは返すくも遺憾に思ふ。

しかし第十一回オリンピックの覇者と對戰の機會を得たことは本意とせねばならぬ。スエーデンに對する一勝が既に二十餘年の苦節に報いられてゐる。技術的に進展の餘地を残してゐることの體験、それがこの上ない家苞である。吾々は喜んでベルリンからわが代表チームを送り出さう、東京オリンピックにおける報復を祈りつゝ。

S11-9-4

蹴球 日本對イタリー 試合の一場面



蹴球

大會唯一の逆轉試合は

精神力の制勝

覇者との一戦は貴い家苞

T · K · G 生

押し切つたわ が代表チーム

の戦績に對して歡喜の絶頂に立つたことは十分想像してもらへるだらうと思ふ。ベルリン見でさへ足拍手面白く離し立て、タイムアップのホ非スルさへも聞きとれぬやうな騒ぎ方をしたほどである。キツキングに、ドリダリングに、タツキングに、わが代表選手の一舉一動を、目を皿の如くして見守つてゐた吾々においてをやである。前半はスエーデンチームの正確なロング・パスに眩惑されたわがチームは各ラインの連綿亂れてスピードを缺き、一度タツクル

後半に形勢逆轉

強剛瑞典を撃破

「スエーデンチームを偵察して寄寄協議したのであつたが、何せ體格といひ技術といひ、われに優るものがあつても、劣る所のものは見出すことが出来なかつた」

これを聞いた時初陣のわがチームは彼等の首途を祝ふ犠牲に供されるのではないかと案じられたのであつた。しかし四日に行はれたスエーデンとの第一戦は、前半0-2の優勢をよく後半に挽回し、結局3-2で勝利を奪つてしまつた。吾を忘れて躍り上り、11君と抱き合つて嬉し涙にくれたのであつたが、その時の吾々の氣持、スタンドに陣取つて0-2、1-2、2-2から3-2で遂に

の戦績に對して歡喜の絶頂に立つたことは十分想像してもらへるだらうと思ふ。ベルリン見でさへ足拍手面白く離し立て、タイムアップのホ非スルさへも聞きとれぬやうな騒ぎ方をしたほどである。キツキングに、ドリダリングに、タツキングに、わが代表選手の一舉一動を、目を皿の如くして見守つてゐた吾々においてをやである。前半はスエーデンチームの正確なロング・パスに眩惑されたわがチームは各ラインの連綿亂れてスピードを缺き、一度タツクル

體格の相違は是認せねばならなかつた、敗戦を觀念せねばならなかつた、しかも巨額飛んで一點、また一點、遂に2-0となつた。この強敵に對して二點を挽回することはどうしても不可能とせねばならない。だが、わが代表は心の平衡を失はなかつた。焦らずに多角的のパスをもつてスエーデンゴ

ールの際をねらつてゐた。この沈着とパチンコで弾かれるやうな大身の相手に向つて果敢にも躍り込んできた。一絲亂れぬ攻防のその備へに一縷の望みをかけ、二點の開きで絶望の淵に立つやうな思ひあれやこれやと迷ひ抜いて前半は終つてしまつた。

待たれた後半に入るや鮮やかなショットパスはスムーズに行はれた。速攻、速攻、各ラインの間も一層の密度を加へ、スエーデンのFWラインも、HBラインも、介在を許さぬものとなつた。ヒタヒタと攻め寄せる手は絶望の淵より吾々を救つた。前半進した二、三度のチャンスに優る決定的のチャンスが次に展開しはじめた。一點を酬い、遂にまた一點を擧げて2-2の同點、いよいよ追ふ者の強味が遺憾なく示され、ここにはじめて形勢は逆轉し、劣勢は互角となり、更に優勢となつた。スエーデンに先んじて勝利へ向つて進んでゐるのだ。勝つたその瞬間の喜びもさることながら、この同點となつた時の歡喜も筆紙には盡せぬものであつた。強ひていふならば夢見る氣持であつた。劣ると思はれた技術はスエーデンの技術を制したのだ。速攻でスエーデンの強引のタツクルを外しながら、厚

味のあるフォロウは成功したのだ。技術が同點に漕ぎつけたといふよりも

ングパス・システムを制したと斷ずる事は早計である。地元の各紙が國際的大試合において、前半既に勝敗の決定づけられた試合を覆したのは稀有の事に屬し、恐らくベルリン・オリンピック大會において再びあり得ないと斷言する。そして日本チームの勝利は不撓不屈の精神力であり、チームの協調融和であり、個々の技術をチーム力に導く賢明さであつた、と評してゐる。北歐の王者を以て自他共に任ずるスエーデン・チームを仆した日本チームの殊勳には絶讚に値すると褒めちぎつたがそれは當然のものであつた。恐らく後半の如く試合を速かにそして滑らかに運んでゐたならば北歐に君臨するこの強敵を奪取し退け得たかも知れないと思はれた。スタンドに陣取つてゐた人々は試合上手といつてゐたが、これも當て嵌まるものである。ベルリン・オリンピック

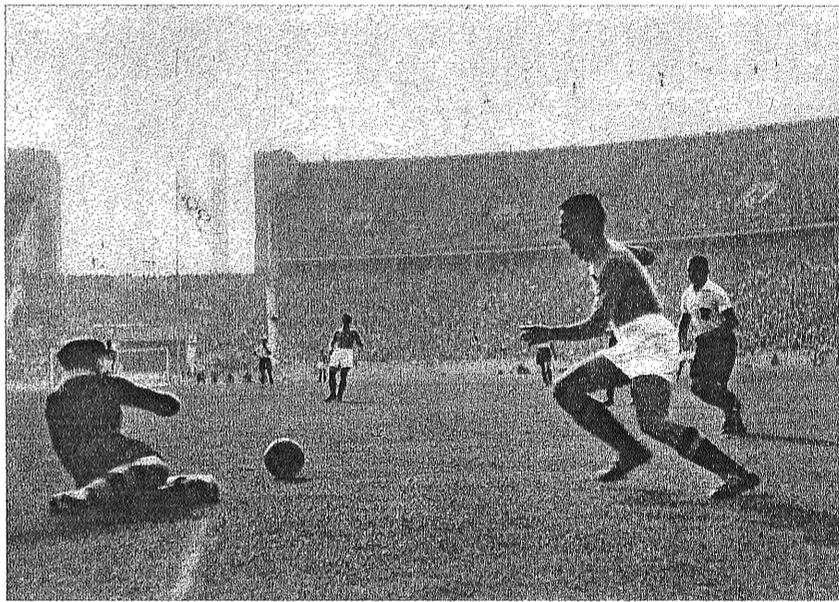
大會を通じて 頹勢を挽回し

たのはこれが唯一の試合であつたが、それだけに各選手は精根の限り奮闘してしまつた。刀折れ矢盡きるまで、心ゆくまでのこの戦ひは實に堂々たるものであつた。

※左ページへつづく



八月四日日本軍は強剛スエーデンと戦ひ3-2の大接戦で快勝した



イタリー對オーストリアの決勝戦イタリーのゴール前

オリンピックの驚異

蹴球日本の跳躍

優勝候補の瑞典を破った

近代的な技術の牙え

獨逸批評家 ハンス・ヤルケ

この一文はドイツの蹴球友人であるウエスファレン氏から送つてくれたもので、同國の著名な蹴球批評家ハンス・ヤルケ氏がフスバル誌に載せた試合評である。岡山醫大蹴球部加藤氏の努力によつて公開出来るやうになつたことを、日本蹴球界のために喜ぶものである——岡山サッカー倶 岩野次郎記

日本對スエーデンの一戦こそは一九三六年のオリンピック蹴球試合における一大センセーションであつた。日本は蹴球界の寵児スエーデンと對戦し、優れた戦術でこれを打ち破つたもので、決して怪我勝ちの功名ではない。事實スエーデン前半2-0とし、後半には入つても風上に陣して當然勝負をものにすると考へられた。しかし日本チームは、この窮地にありながらよく驚天動地の勝利をわがものとしたのであつた。蓋し日本人獨特の粘りと、疲れを知ら

ぬ肉體、かへて加へてG・K佐野の驚異的な活躍および計画的な防禦により

青天霹靂の不思議

意討ちを成就した

たのである。そしてスエーデンは一點を奪還されるや茫然自失したのに反し、日本は一意勝利の道を邁進したのだつた。その意氣と闘志は、けだし十一人の村社選手が蹴球日本への榮譽のために奮闘し、蹴球史上不滅の勝利をもたらしたのである。そ

して満場を感激の坩堝と化し、五千の觀衆はたゞこの劇的シーンに満ちたゲームの推移に酔ふたのであつた。

ベルリンにおいて、日本代表ははがてクラブ・チームと三回の練習試合を行つて友誼を結んだがこの學ぶべき點の多い試合において吾々は日本人獨特の測り知れぬエネルギーと、絶大な果敢さ、及びその粘り強さを窺ひ知つたのだつた。そして吾々は次の事柄を忘れてはならないと思つた。すなはち日本は、今度初めて蹴球の檜舞台を踏んだのであるが、かれらは容込みの早い若者といふよりはむしろすでに一人前の手腕を有しスエーデンに對し真正面からぶつかつて行つたのである。

初陣の不安をもつ日本に對し、イギリス流に整備され、自信たつぷりのスエーデンとの試合は俄然拮据を呈した。そして日本チームの低いショット・パスが滿場の拍手を浴び、スエーデンの強引さも遂に押し切れぬ場面の展開となつた。

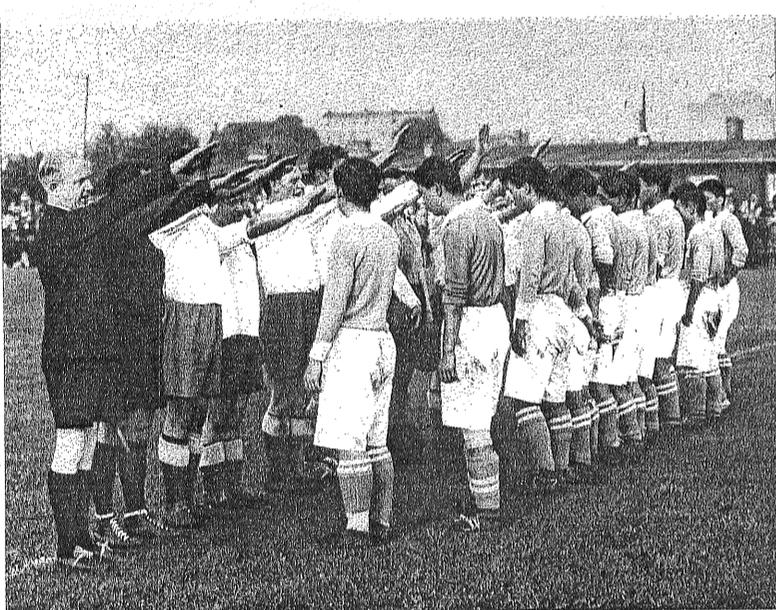
日本チームは、前日のゲームにトロホがノルウェーを苦しめたと同様、最初からスエーデン軍を悩ました。そしてかれ等は、コンビネーション・プレイを目的とするイレブンがある程度の成功をなし同時にその將來進歩すべきことをしめた、これに對し、スエーデンはノルウェーがやつたと同様、最初慎重に「突破および防禦戰」を試みた、そしてスエーデンは前半日本がボールを上げずに攻める戦法を阻止するに効果があつた。

それにして、緻細な日本のパス・ワークはベルリン人を魅了せずには描かないものがあつた。そして日本はこの試合において

蹴球そのもの

の眞の醍醐味を

味はせてくれた。すなはち、いはゆる技術的プレイを見飽きる程見ゆるベルリンも、この日本チームが示した多極めて細かいプレイに恍惚とわれを忘れてしまつた。そして體格的に極めて優れ、



ドイツのワツケル軍と試合した日本チーム

その大きな體格を利用して最初から優勢であつたスエーデンチーム

驚天動地の接戦

日本軍の見事な逆襲

芝生の手入れの行き届いたヘルタ公園内のベルリン球場で行はれたこの日の試合は、次の陣容で火蓋を切つたのだつた。

その日の試合は、次の陣容で火蓋を切つたのだつた。

本(正) 田原内江野
加加川右松 種立竹堀佐
LWIFRWBHBBFBK
LRCRR LHBRLRG

日(正) 田原内江野
加加川右松 種立竹堀佐
LWIFRWBHBBFBK
LRCRR LHBRLRG

【主審】ペーター・ス
【線審】フランク(獨)ワイゲル
トナー(獨)

満場のどよめきの中に、先づ筋骨逞ましいスエーデン軍は、青のユニホーム、黄のパンツに身をかためて場に現はれてゴールを高唱した。續いて體格矮小の日本チームは、興奮した觀衆に對して素知らぬ顔で、微笑をたゞへ靜かに一禮して入場した。

試合はスエーデンのキックオフで開始。日本はスエーデンと同様C月後退氣味の陣形で戦つた。

【前半】 三分スエーデンの「ドル箱」ド・ロナソン、日本ゴール前でフリー・シュートのチャンスを得たがバーを越して機會去る。

しかし優れた體格を持ち、押し強い中央突破を得意とするヨナソンは、粘りのある優れた日本のバックに對しても少からぬ脅威を與へた。最初上り氣味であつた日本も、落付を取り戻してからはしばしばスエーデンのゴール間近く押寄せ、右近のショットもはげれて空し。十分、巧みに攻めハルマンの見事なショットがあつたが佐野アイスティングアウトしてキー

も、この日本チームの牙えた技術による逆襲を防ぎ切れなかつた。

この日本チームの牙えた技術による逆襲を防ぎ切れなかつた。



3-2の大接戦で勝つたスエーデン軍との試合

日本は奇襲のチャンスを得た

がコーナーキックとなつたのみ。しかしスエーデン依然として慎重に守らざるをえず。

三十七分スエーデン第二點目を得た。混戦の末ベルソンの放つた低いロングショットを佐野止め得ず——このショットは全然止められないとは見えなかつた——そこでスエーデンは最早とり返されさうに思へぬリードを得て「ハイフタイムとなる!!」

【後半】 日本軍はスエーデンのリードに怯む様もな。その態度に一齊に拍手が送られた。今度はスエーデン風上となり、確かな豫測は下されぬとしても、まづゲームは手中にありといへよう。日本攻め寄せたがケルストレムこれを自らコーナーキック

としては不十分。しかし四分、L・W加茂(正)絶好のチャンスを得て物にする。即ち加茂(正)弟と共力して無二突進し、更に中へ切れ込み、彼を追ひかけたスエーデンのバックメンをばつして鮮やかなシュートを放てば、G・K手の施しやうなく、見事日本最初のゴールイン成る(一)かくてスエーデンの勝利の見通しは掃きかけ、球場の空気がセンセイショナルな變化を示した。スエーデンのプレーヤー達は平靜であり、また彼等の技術的肉體的優越は疑ふべくもないが

日本軍は氣持

の5分プレーを

隨所に示し、特別の粘りを以て戦ひ、スエーデンの強引そのもの、攻撃にも少しも怯まなかつた。しかしスエーデンも互に協力し、引しめてかゝつた。なほスエーデンは最後の勝利は吾にありといふ自信を持つてゐるやうである。それに対して日本軍は體は小さくも捨身となり、リスの如く敏捷に、しかも粘り強く立廻り、スエーデンにとつては漸次軍重大となりかけたのである。

十七分、スエーデンの總ての安心も、自信もすっかり消し飛んでしまつた。右近のシュートは二二の同點とした。それはスエーデンの夢想だにし得なかつたことであり、右近の放つた巨頭は全く防ぎやうもなかつた。L・Wからのセンターリングのボールを滑らかに確實に蹴込んだのである。勿論R・F・B・A・D・S・O・Nのポジションが悪かつたのであるが、誰一人としてそれが味方を破滅に導くとは豫知しなかつた。果然戦ひは白熱して勝利の豫測つかず、日本は今や非常な機敏を示し、全力を傾注して戦つた。

オープンに展

開したゲームは

思ひがけず先づスエーデンの最後の攻撃となつた。數次効果のなかつた攻撃の後、L・I・G・L・A・N・S・E・Nに金的を射止めたかに見えたが、佐野よくフイステイングアウトしてコーナーキックに逃る。次いでベルソン、シュートするも竹内よく危機を救ふ。観衆の熱狂した叫聲の下に日本軍びくともせず、またスエーデン觀察の風の標なきときの聲も今や不安となり、是が非でもと懸望する勝利を齎してくれた。

タイムアップ五分前、後半戦のスエーデンの自貢と落付なき不注意とは遂にボロを出し、日本三二二にて劇的の勝利を得たのであつた!

すなはちR・F・B・A・D・S・O・Nの二度目の失策が思ひ掛けぬ結末を用意してゐた。左に偏して位置してゐたR・W・松水がアンダーソンの自信ありすぎてこぼしたボールを沈着に取り、スエーデン、ゴール直前までフリーで運んでシュート

日本は世界の一流

近代戦術の巧みな運用

捨身の挑戦よく自貢を超した自貢を打破したのだ!

この一戦をチームワークといふ點から見ると、日本は聯絡において後半は誠に有效な戦線を描いてゐた。スエーデンは前半強い風下にあつて非常に要心して戦ひ、G・H・E・M・A・N・S・O・Nの如きは最初ベナルテイ・エリアの邊りからは出ないといふ慎重振りであつた。F・B・A・D・S・O・Nとケルストレムは守りは堅固だが、この二人に安心し切つて、ゴール前の防禦を任すわけに行かなかつたので、G・Hは前半兩F・Bの間に位置し、好技をもつてよく味方の危機を救つてゐた。

近代戦術を

具へた敵に出會

機敏で粘りがあり、且つはしたスエーデンは、まづたく敵

大會の覇者となつたイタリア軍との試合にわがゴール破らる



トすれば、G・K・ベルググピスト身を挺して捕へんとするもおよばず、こゝに止めはさされて瀟灑然、拍手喝采しは止まず。

た。その他の者に至つてはオリソニック級とはいへない。

日本こそ偉大なる勝利者である。ゴールキーパー佐野は優秀なプレーヤーだ。天才のキーパーとしての巧みな術を具へ、かつ非常に軟い體を持ち、捕球は正確であり、殊に勇敢無比である。彼は

天賦の才に恵

まれた世界的

一流のキーパーである。彼の神出鬼没の大活躍が、スエーデンの確實さを殺いたのである。日本の低いシュートパスがスエーデンを漸次いらくさせ出したといふことは、第一に冷靜且つ圓滑で、素敵なコンベネーションを持つ日本の攻撃に負ふところ大である。非常に粘り強い日本人の敏捷さと、その巧技は、スエーデンのバックを極度に悩まし、スエーデンは前半既に奔命に疲れ切つてゐた。

L・I・G・L・A・N・S・E・Nは中々巧い、全速力で疾走しつゝボールをコントロールすることが出来る。こんな上手なL・Iはベルリンにはゐない。

日本の攻撃と

は比較にならぬ

程日本の方が優勢であつた。

G・H・種田は、身長の大いG・D・ヨナソ(勿論彼はスエーデンワールドの中心人物だ)をマークした。種田は縁の下力持であり、スエーデンの中央突破戦術を失敗に終らせたのである。日本軍の防禦は全く賞讃に値する。それは殆んど完全に計畫通りとなつてゐる。サイド・ハーフ立原、金の粘りは、スエーデン攻撃の萌芽をへし折るのに大いに寄與してゐた。またF・B・竹内、堀江は、誠に勇敢かつ効果的に動いてゐた。日本の防禦に際しての一致協力した緊密さと周到さは感嘆の他ない。

G・K・佐野およびL・I・加茂(健)はすでに世界的一流選手である。前者は壯麗なプレーでバックメン中特に目立ち、後者は次から次へと絶えず攻撃を續行せしめるのにあづかつて力があつた。

日本軍は強い氣魄と戰術的に優れた立脚点を持つてゐた。殊に最初の一點を擧げて後の日本チームは、完全に一團となつて機敏な防禦を示し、終始スエーデンの攻撃を見事に打ち砕いてゐた。

一九三三年のオリンピックにおいて水泳日本が大活躍を示したやうに、一九三六年のオリンピック大會では多量球日本が飛躍的のたつた!

シーズン迫る!

蹴球・ラグビー界展望

蹴球

大飛躍を期待

小長谷 亮 策

オリリン
ピツクの刺激に

さきにベルリンに選手を送つて
初陣ながら天晴れ北歐の英雄スエ
ーデンを接戦の末組み伏せ、覇者
イタリに挑戦して善闘した日本
の蹴球界は、今や物凄いまでに張
り切つてゐる。その上四年後の東
京オリリンピツク大会の決定を見
て、全日本の各陣営は極度の緊張
を見せ、殊に東西の學生聯盟戦は
舊人新人を擁して代表軍の歸朝
を俟つまでもなく、火花を散らさ
んずの意氣に燃え、こゝろ三年來
の不振を脱して今や黄金時代への
スタートを切るかの如くに見え
る、私はこの時、今秋の關東學生
蹴球聯盟の各陣営を展望して、些
か豫想を試みようと思ふ。關東學
生蹴球聯盟はこれを大學聯盟と高
專聯盟とに分ち、これを各々三部
に段階づけてゐる。今その顔觸れ
を記せば大學聯盟は【第一部】早
大、東大、文大、慶大、商大、農大
【第二部】立大、明大、拓大、慈
大、法大、千路大【第三部】中大、
工大、國大、日醫大、上智大の十
七校。

【第一部】商船、成
城、一高、東高、日高、府高【第二
部】東高、成高、外高、青高、東高、
高専聯盟は【第一部】商船、成
城、一高、東高、日高、府高【第二
部】東高、成高、外高、青高、東高、

【第一部】商船、成
城、一高、東高、日高、府高【第二
部】東高、成高、外高、青高、東高、

【第一部】商船、成
城、一高、東高、日高、府高【第二
部】東高、成高、外高、青高、東高、

【第一部】商船、成
城、一高、東高、日高、府高【第二
部】東高、成高、外高、青高、東高、

伯林大會の強 力陣の樞軸であ

つた選手選を擁する早稲田大學で
あつても、今秋は全く安泰を許さ
れない。風雲は急である。殊に第
一戦に新人多数を以て代表選手選
の跡を埋めた軍を以て新鋭商大と
對戦せねばならぬにおいては、い
よいよ以上つてこの感が深い、そ
して勝てば兎に角、失敗の時は早大
の前途は波瀾に富んだ難路行であ
るといはねばならない。しかし如

つた選手選を擁する早稲田大學で
あつても、今秋は全く安泰を許さ
れない。風雲は急である。殊に第
一戦に新人多数を以て代表選手選
の跡を埋めた軍を以て新鋭商大と
對戦せねばならぬにおいては、い
よいよ以上つてこの感が深い、そ
して勝てば兎に角、失敗の時は早大
の前途は波瀾に富んだ難路行であ
るといはねばならない。しかし如

つた選手選を擁する早稲田大學で
あつても、今秋は全く安泰を許さ
れない。風雲は急である。殊に第
一戦に新人多数を以て代表選手選
の跡を埋めた軍を以て新鋭商大と
對戦せねばならぬにおいては、い
よいよ以上つてこの感が深い、そ
して勝てば兎に角、失敗の時は早大
の前途は波瀾に富んだ難路行であ
るといはねばならない。しかし如

つた選手選を擁する早稲田大學で
あつても、今秋は全く安泰を許さ
れない。風雲は急である。殊に第
一戦に新人多数を以て代表選手選
の跡を埋めた軍を以て新鋭商大と
對戦せねばならぬにおいては、い
よいよ以上つてこの感が深い、そ
して勝てば兎に角、失敗の時は早大
の前途は波瀾に富んだ難路行であ
るといはねばならない。しかし如

如何に團結を 鞏固にし意氣壯

なるかを看取することが出来る。
新人R.W.屬が駿敏に活躍してチャ
ンスを作れば、E.W.松村また小幡
ながら巧敏と闘志とに身體的弱勢
を補つて相呼應する。新人L.I.河
西と古縁R.I.徳田の一段の進境は
春以來光つてゐた阿部の存在を薄
からしめ、シュートの正確さ、鋭
さは東大ファンを北斐突ませてゐ
るとの噂である。このフワード
陣が主將H.H.大内の統率するGH
菊地H.森の掩護下に敵陣に肉薄
する時、相手方後陣の薄気味さ
は推して知るべきである、更に輕
快驅逐艦を前に置いてのハーフ以
下の守備陣が平均體重一七貫六百
といふ巨漢を擁へガツナリ腰を下
しての仕切りは正に豪華版そのも
のである。殊に築島、藤岡の堅實
な動きと最近若く進境した高橋

鬼才松永の率 ゐる文理大があ

る。巨漢原崎を失つた後に場を入
れての後陣は相當頑丈なるものが
あり、殊にG.K.中垣内にして堅
實、果敢にプレーすることを齎得
したならば容易に抜くことを得な
いものがあらう。しかし機敏はフ
ワードにある。如何にG.I.松永
が大軍に奮戦しても、これを援け
るに人がなければ所詮勝つことは
出来ず、攻撃は最良の防禦なりと
は軍の鐵則である。幸ひにL.I.久
下、R.W.小川の進歩著しきものあ
ると聞く、たゞL.W.阿部または永
島、新人R.I.原崎弟の邊にやゝ不
安なしとしない。しかしこのチ
ームが昨年以上の活躍を見せるなら
ば、蹴球界は一段と活氣づくこ
とであらう。玉碎的奮闘を期待し
て止まない。
次に商大は、昨年度第五位で一

關學依然強し 次いで京大、關大か

關西學生蹴球聯盟定期リーグ試
合の第一部は、十月十七日京大對
神高商をトップとして南甲子園選
動場において開催されることとな
つた。
今シーズンは昨年の覇者關西學
院が依然優勝の呼聲高く、それに
對して關大、京大のピツク・ツイ
が肉薄して例年のごとくそのスリ
ルに光彩をはなつものと見られ
る。
◇ ◇
今春以來惑星
的に雄姿を現は
し、第一回春期トーナメントに
廣島文理大主催大會の決勝試合に
今一步のところで惜敗した神商大



神商大の蹴球試合

異常の強味を
示して追ひ詰る
これを傳統の如く誇つてゐる。こ
れに西川、石井と、G.K.河本の防
禦陣も強靱性を持ち、従つて早
慶、東に對戦して悪びれず、堂々
の陣を張つて面白いゲームを展開
することは必定である。殊に一部
進出の餘勢を驅るにおいては一層
興味津々たるものがあらう。
第二部では明大が斷然たる強味
を有し、他の諸チームを寄せつけ
ない。一部Bクラスの實力を十分
に備へてをり、優勝候補の隨一で
すでに二部にゐること六年、漸く
今年一賜來復、一部に還へるの日
を迎へるとならう。L.I.中島、
G.I.片岡、G.K.田中の活躍が期待
されるが、なほ自重を新つて止ま
ない。これに續くものに立大と拓
大とがあるが、立大よりも拓大に
強味があるのではあるまいか。
第三部では工業大學の呼び聲が
高い。高専聯盟では昨年の覇者高
等商船が一高、成城、東高と鎗を
削つて優勝を争ふことにならう。

注・小見出しは本文を兼ねてい

今後の早大に

期待される飛躍

關東蹴球界の諸懸案

關東大學蹴球部第一リーグ

戦はこれまでに早大對商大、慶大對商大、帝大對慶大、帝大對文理大、慶大對慶大戦の五試合を終へたに過ぎぬが、昨年第四位の屈辱に甘じわばらなかつた慶大が生氣を取り戻し、獨り好調にあつて順當に二試合を物したに反し、他の五校は各々一敗を喫してをり、戦前好調の呼聲が高かつた帝大が返り新慶の農大に氣をなく敗れ、昨シーズン辛くも一部に残留した新進商大が、早大の留守軍を第一戦の血祭りに擧げて仕舞ふなど、既に戦前の豫想に二石を投じて、オリンピック選手の歸參出陣と相俟つて優勝と、一部残留を納めて幾多の波瀾を豫想せらるゝに至つた。

慶大のF・Wは走力と球の保持力があり、得意の速攻に加ふるに今シーズン二宮の圓熟味を見せるに及んでその攻撃力を増幅し、かつO・H松元の健實な掩護、給球は攻撃力を重厚にしてゐる、商大を四對零、慶大を八對零で得けたのは順當の結果である。しかし失點零であるといへば、なほ守備陣の脆弱味を認めない譯には行かないが、右近がO・Hとして出場することになれば強味も増し、シーズンの進展につれて相當整備されると思はれるから、捕尾の早大との一戦は見應へるゲームとならう。

帝大は戦前より好調を傳へられ多大の期待をかけられてゐたが、第一戦には、慶大の奔馬の様な意氣と、キック・アンド・ラッシュに完全にかき廻されて施す術なく凡戦敗退した。帝大が農大に引ずられる事なく、ミッドフィールドで今少し球をキープして廻し、農大のH・BとF・B線の聯絡の缺陷を衝いて行つたなら、悠々勝てる試合であつた。對文理大戦においてはオリンピックから歸參の高橋、種田をO・FとF・Bに使用して三對一で勝つたが、帝大は未だ昨シーズンほどの纏りを見せてゐない。

文理大は松永のオリンピックよりの歸參を待つて、第一戦を帝大と行つたが、松永に頼りつゝも松永と調子合はず、且つH・Oの進退が著しく積極性を缺き、各ライオンが孤立するが如き結果となつてゐた。

商大は意氣と、精神的な纏りをもつて早大留守軍を六對四をもつて血祭りに擧げ、勢を驕つて第二戦を慶大に挑み、全員必死に健闘したが、四對零で敗退した。商大F・Wは球の保持が弱く、且つ決定力も不足し、ミッドフィールドにおける健闘も今一步のところまで瓦解してゐた。

慶大は返り咲きの第一戦を帝大と行ひ、旺盛な意氣とキック・アンド・ラッシュの玉碎主義で見事帝大を破つたが、この試合における帝大の敗因は、農大の調子に廻されたためであり、農大は従の聯絡、特にF・BとH・Bの聯絡の缺陷を暴露せず終つた。しかし次の對慶大戦においてはこの缺陷を衝かれ、八對零と大敗しなげればならなかつた。

早大はメンバーの過半数をオリンピックに送り、その留守軍をもつて第一戦を商大と行ひ四對六で敗退した。まだこの一戦を終へたのみで、この次よりはオリンピック歸參の選手が出場することと思はれるが、歸參の選手が疲勞より抜け切つてゐるならば、オリンピック選手を中心となつた早大チームは、日本蹴球の飛躍の問題に對して何らかの示唆を與へるものと思はれる。またそれを希望してやまない次第である。

今シーズンのこれまでの試合を見るに、まだシーズンの初めではあり、各チームとも慣れと圓熟によるチーム最高の纏りを見せるまでにはいつてゐないが、歐米チームのゲームに比し、その試合の進め方に緩急がなく、著しく單調であり、その結果ゲームに味がなく、そつが多い様に思ふ。ゲームがスピーディーなことは非常に善いことであるが、そのスピーディーな變化を續ける個人技の高揚と同時に、個人技に對應するベースの變化を企圖しなければならぬと思ふ。

また、ゲームのスピーディーを考慮してゐるに拘らず、ゲーム中において時間の空費が非常に多い。それはゴール・キック、コーナー・キック、フリー・キック、スロー・インなどの場合に必要以上に時間が空費されてゐるのである。過日の帝大對文理大戦と、第二部の拓大對千葉醫大戦を材料として、九十分間中その正味プレイされる時間を計つたところ、想像とはまたかけ離れた結果となつて現はれた。即ち帝大對文理大戦は正味プレイ時間が五十三分五秒、拓大對千葉醫大が僅かに三十八分四十秒であつた。つまり五十一分二十秒が空費されてゐることになる、スポーツの本質は技術上の量的困難に能ふ限り完全に勝つことの強制に在り、これよりして正々堂々勝つことに意義があるのではなく、能ふ限り勝つこと、また劣勢の場合能ふ限りその差を縮めるにあらねばならない。かう考へると、蹴球においては、與へられた時間を一秒でも多く目的に使用され、如上の量的困難に打ち勝たうとするのが蹴球精神であらうと考へる。かくすれば、觀る方も競技時間の半ば以上も退屈する時間を持たないですみ、蹴球をもつと面白く觀ることが出来る。

小野卓爾記

傳統を誇る京大も、最近攻守に迫力を缺き、不振をかこつてゐるのはどうしたのか。京大の更生を願ふならば、士氣の鼓舞であり、毎シーズン後期に強みを示す同軍としては最初より玉碎主義に駒を進めねばなるまい。

斯く見るとき、關東連覇の鍵はリーグ隨一の稱ある野澤、山藤、梅岡、田中に、新人田島を加へたF・W線の活躍に待つところ願する大である。H・B線は病後の笠井がC・Hにカムバックし、兩翼には田邊、三田を配し、バックスは松井官部、G・Kに中村のトリオが陣するが、過般瀟灑進軍との試合においてその片鱗を示した如く、この後陣は完璧を誇り、容易に他校の追従を許さぬものがある。

關大は今夏奈良の合宿に豫期以上の收穫を得たと傳へられてゐる。先づF・W線は田坂、林、石垣、武田、大谷と豫想されるが、兩ツインングに難色あり、加ふるに俊銳大橋の缺場は一抹の淋しきがある。H・B線は塚井、淺野、山田と陣容を整へ、F・Bに西田、中島の兩新人で堅め、老巧土吉川が昨シーズンと變らぬ捕球に一段の牙をみせてゐる。

全體が新人登場のやむなき同チームは、春以來の缺陷の再吟味と修正とが十分満足を得れば今シーズンも相當期待される。

持地、長岡の強豪を學窓より送つた京大も、四高から小野、成城高より岡本の兩新人を入れ、ほかは昨シーズンと大差なく戰術全く完了と聞くと、前線左から市山、麻野、小野、中森、右藤のF・W線も活躍範圍廣く、特にC・H小野の球捌きに妙味あり、G・Hに原田が頑張り、サイドに政家、森と位置し

F・Bは栗原、安原と組み、G・Kは金澤の再來を傳はせる岡本が後陣にひかへて

相當重厚な守備陣を構成して

みるから、京大今後の補強工作に満足を得れば他校の脅威であり京大の面目一新ともならう。

今シーズンのダークホース神商大は、ホープ大谷、前川を主力に島、松本、高橋と、リーグに古參の顔ぶれでF・W線を形成してゐる。

H・B線も吉江、中西、今村と攻撃に強く、唯バックの川野、平田G・K行田のトリオにいさゝか弱みを藏してゐることは同チームの春以來の悩みであるが、攻撃力に最大の威力を擁してチームに纏りを見せてゐるから關東、京大、關大のいづれも得點を獻せねばなるまい。

神商高も、その日の出来によつては關大、京大の上位にゆくべく主將横田、高垣、永井のセンタースリーに兩翼の加藤、井藤ときびきびしたF・W線を持ち、宇野、前川、小橋のH・Bも試合巧者でF・Bに田林、藤井、G・K橋本と聯絡を見せてゐるから容易に軍門に降るまい。特に今春關東との試合に前半對等の運行振りを示してゐるから、虎視眈眈たるものがある。

關西學生リーグ戦第一部的上記五校の實力接近は、躍進途上にある蹴球界のために眞に悦ばしいことであり、今シーズンの試合運行は相當豊富な内容と刷新さが隨所に展開することであらう。

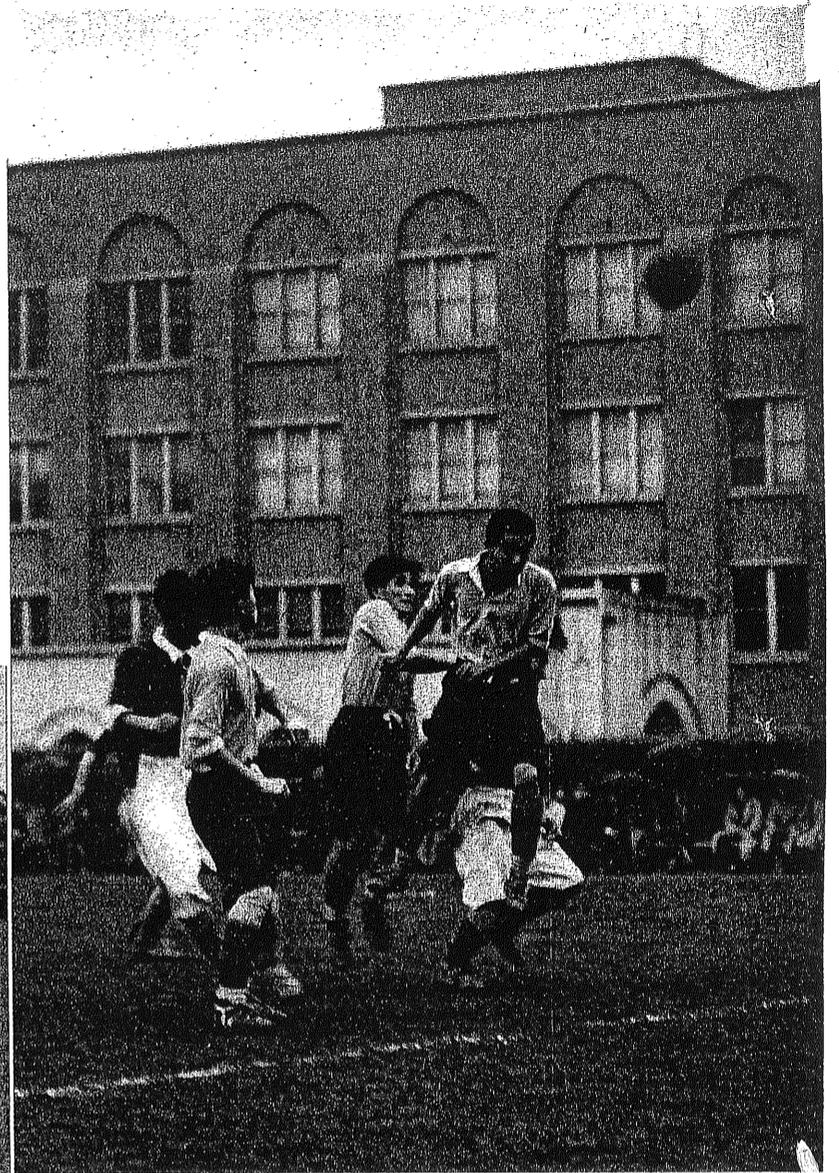
※右ページからつづく



文對大帝たれは行で場技競宮神日六十月十 **躍活のKG**
る遁を攻猛の大帝で球捕進前内垣中一パーキルーゴの大理文、戦球蹴大理



甲南、日七十月十 球蹴生學西關
さ幕開らか合試高戸神對大京で場技競闘子
つ勝づ先大京で一對三、たれ



球蹴の大農對應慶 **ゲンイデツへ**
十半後、行舉で場球大東、日八十月十は合試
ンイデツへて得をクツキーナーコ左應慶、分
す勝大應慶で零對八、む攻でグ



帝農蹴球 十月十日神宮競技場で舉行
農大OF大野がシュートする直前、二對一で
農大勝つ

ゴール 應慶試
合後半二十分ごろ應慶
強襲し見事ゴール



蹴球界——大勢漸く決す

東關 果然早慶戦?

文理、農大の何れかが轉落

慶大對文理大の試合は十月二十七日明治神宮外布院競技場で行はれたが、北西の強風は球の操作を難化し、相當ゲームにも影響して試合の興味を減殺してゐた。

これまで他の五チームが各一敗を喫してゐる中に、獨り連勝の好調に在り、且つ先頃の對農大戦には相手が脆かつたといへ、速攻に、巧緻に、その攻撃線の強力を感ぜしめた慶大が、風禍による制球難があつたといへ、文理大バツクスの挺身的な健闘に阻まれ、六分の優勢に戦ひを進めながらも無得點、前シーズン同様再び零對零で引分けて仕舞つた。

慶大はこの試合に初めてオリンピック代表の右近をH・Cに据えてH・B線の強化を圖つたが、F・W線は對農大戦に示した圓滑なパス・ワークも見られず、且つ前進して奔放に動く文理大の松永を抑へる爲めに右近が下り氣味に稍々スリー・バツクスの形を取つてゐたが、その動きに對應するハ

ーフサイドとインナーの動きに調和を欠き、得意とする速攻に展開する端緒にも乏しかつた。慶大は前半二、後半一の決定的と思はれる好機を逸して焦燥し、運命を支配すべきペナルティ・キックも文理大G・R中垣内の左に見せた虚につり込まれてその術中に陥り、つひに無得點に終つて仕舞つた。

文理大はH・B線を後退させ、防禦陣を厚くして極力失點を防止し、前進して奔放に動く松永に球を集中し、機を見て奇襲を狙ふ消極的戦法を取つたが、之は現在の文理大の慶應に對する策としては止むを得ざる窮餘の一策として許容さるべきも、それにしてもD・W線の聯絡悪く、松永を救援する動きのない以上、この戦法に勝味を窺ふことは出来なかつた。しかしバツクスの忠實なマークと挺身的な潰しに、慶大の鋭鋒を浴びたのは偉とするに足り、此一戦を引分けたことは文理大に取つて成功といふ可きであらう。

① 商大對慶大の試合は十一月一日本郷帝大球場で舉行せられ、前半慶大は二點をリードしたが、後半

商大は逆轉せしめて遂に三對二で商大の勝つところとなつた。慶大、慶大は共にこれまで一勝特定點二點を有してゐるが、これまでの情勢より見ればともに第二部轉落の圏内にあり、此一戦によつて何れかが一部に残留することになるので、兩校にとつては重大な試合であり、兩軍極度の緊張裡に戦ひは進められた。



慶應對文理大の蹴球試合

② 商大は前半バツクスの凝縮よく特に閉きすぎたD・BとH・Cの位置、並びに聯絡が悪く、慶大C・E大野を常にフリーにしてゐた。F・W線も持球力に乏しく、且つ緊張が過ぎて制球力すら失つてゐた。後半になつて商大は調子を取り戻し、F・W線の聯絡も整ひ、やうやく疲勞の色見えた慶大の後陣を掻き亂して三點を挙げ、戦ひを逆轉してしまつた。

③ 慶大は、前半商大の開き過ぎたD・Bの中間に球を受けたG・F大野に歴次の好機があつたが、突破する積極性に乏しく、かつフリーの兩ウイングに好パスの捌きもなく、決斷力に乏しい動きはあたら幾多の好機を潰してゐた。慶大が前半商大の浮き腰を衝いて、失つた好機の中の一つでも物にしてゐたなら、或ひは戦ひは農大のものとなつてゐたであらう。後半に入つて慶大バツクスはマキキング悪く、相互の聯絡もなく散漫となつたF・Wに對するフリードも正確を缺いて潰滅して仕舞つた。

④ 早大對文理大の試合は十一月七日明治神宮外布院競技場において、豪雨を衝き、物便い悪コンディションの球場にて行はれたが、水溜りに禍ひされて何等技術上の興味なく、内容の乏しい試合となつたのは残念であつた。お互ひに強引なプレイの應酬に終始し、結局個人技に秀れた早大が三對零で勝つた。

⑤ 早大は七人のオリンピック代表を揃へ、その演技は期待を持たれてゐたが、この豪雨の中ではそれを見る事も出来なかつた。しかし早大はこの試合において、今後何等かの新味を見せるであらう處の期待を思はせた。

⑥ 文理大は、松永をH・Cに置いて攻守兩面に活躍を意圖したが、矢張り悪コンディションはその意圖の遂行を阻み、前半零對零に死闘したが、三十五分G・R中垣内人專不省に陥つて退場し、L・W長島代つてG・Rとなり、十人で戦ふにおよんで攻守兩面の力を救がれ後半一點をリードするにおよんで潰れて仕舞つた。

⑦ 帝大對商大の試合は、十一月八日和田泉明大球場で行はれたが、個人技において商大の上を行く帝大が順當に三對零で勝つたが、パス・ワークの妙味もなく、味氣ない試合であつた。

⑧ 帝大はいまだ昨シーズンほどの纏りなく、且つ試合ごとにボジションが入替へられるため、全體的動きにも連繫が足らなかつた。

⑨ 商大はD・Wの持球力不足のため、端的に生れる好機を自ら崩る結果となる、またバツクスの動きに聊か積極性を缺いてゐた。

⑩ これまでの試合により、覇權争ひは早大、慶大、帝大の三巨頭となり、商大はすでに特定點四點となり、假令残る對文理大戦を失ふも一部残留が確定し、文理大と慶大が二部轉落の運命を賭けて戦ふことになつた。恐らく優勝が早、慶大の間に争はれる結果となると思ふが、もし帝大が兩者の一つに喰ひ込む時は、再び覇權をめぐつて波瀾をまき起す結果となり、爾後の試合に多大の興味を懸つてゐる

【小野卓爾】

※左ページトづく



十一月七日神宮競技場で行はれた雨中の早文蹴球試合、三對零で早大勝つ

※左へシのフック

關西 關學依然強し

結局神商大と争覇か

關西學生蹴球聯盟試合は、去る十月十七日行はれた京都帝大對神戸高商の試合を皮切りとして關西學院對神戸高商、京都帝大對神戸高商、關西大學對神戸高商の四試合をこゝに了した。これで第一部にランクされた各學校は一通り顔を現はしたわけである。

①

リーグ試合のトップを切つた京大對神戸高商の試合は、豫想通り京大の勝利を告げたが、京大はこの日GHの政家君をFBの中間に下げ、神高商のCF横田君をマークする、所謂3FBのシステムを採用し、前半或る程度の成功を収めてみたが、後半に入つてから神高商はその裏をかいて横田を後方に引き下げ、京大GHの布陣を惑はせて、後半戦には反對に1-0のリードをさへ奪つた。

之は京大の3FB布陣に對する研究の不足に因由するもので、京大は對神商大戦にも同様な姿で臨んだが、神商大のFD島君の快足を防ぎ切れず、ここでもまた不覚をとつて終つた。

京大の失敗に反し關西學院に對した神戸高商は、關學のOD野澤君を完全にマークすることに成功し、敗戦を豫想された試合を、1-1の引分けといふ好記録を残した。これは關學が3FBに對する策を誤つたもので、關學は常のごとくチャンス・メーカーである野澤君に主としてボールを集中したため、神商大のGHをして易々と防陣せしめる結果となり、得意の球捌きも發揮出來ず、未だに芽を断たれて終つた。かゝる場合關學のバック、或ひは両インサイドなどはもつと球をキープし、相手のバックスを引きずり込んでGDだけに球を渡さず、マークされてゐない、ウイングにボールを廻すと

か、或ひはバックからロビイングで相手方防陣の背をつくとか何らかの對策を講ぜねばならぬところであつた。關學のこの引分戦は、誰しも關學に勝利を豫想してゐただけに凡戦の譏りを免がれない。

②

關學に善戦した神商大は、對京大戦にも健闘し、5-3のスコアをもつて京大を降すの殊勳を擲つた。この成績は兩チームの持つ力の相違であつて、當然の結末と見られる。そして、京大敗因の主たるものはFWの劣勢にあり、CF野澤、LI小野にはやゝ生彩を認め得るが、前線は總じてゴールの決定力に乏しく、折角相手のゴール前深く攻め寄せながらシュートの態勢定まらず、ミッド・フィールドにおける優勢も無爲徒勞に歸せしめてゐた。これは兩ウイングの動きの鈍いことにもその一半の責がある。

以上四試合を通じて見た各チームの強さは、神商大戦には引分けの拙戦を見たといへ、關學が一番上位に置かるべき實力をもつてゐる。そして、個人、個人を見ても、いづれもかなり高度な技術をもつてゐるから、今後の試合において、對神商大戦のごとき（マ）を演じない限り、まづたんにたる徑路を歩みつづけることであらう。

神戸高商はチームとしてのまとまりにはまだ欠けてゐるが、同チームの持つ強味は、何といつてもFWに大谷、前川の聲級選手を擁することである。大谷君の快足に乗せて相手のバック陣の隙を巧みに衝いて放つ中央送球に、或ひは自ら運ぶゴール・シュートなどは鮮やかなもので、リーグ中一段と光彩を放つウイング・プレイヤーである。また前川君の攻守への進退

も厚味があり、OD島君も、對京大戦には堂々と快技を發揮してゐたが、難をいへば、未だ試合の駆け引きにささか缺けてゐることである。

バック陣は先づ何か糊塗してゐたが、對關學戦および京大戦の終り近く混乱に陥つたのは、練習不足のためとも見られ、執拗さが足りなかつた。同チームは對關學戦を切り抜けるならば、後は神商大戦であるから、關學と同率の成績を残し得るものと豫想される。

③

神商大の著しい躍頭に比し、花やかな球歴を誇る京大今シーズンに對する賞力は、昨シーズンに比し一段の見劣りがする。前述のFWの非力もあるが、ハイフ・ラインの攻撃掩護力にも厚味がなく、また左FB森君の攻撃から逆襲への威力に欠けるところがある。森君のペアー栗原君はいよゝ堅實味を増し、またゴール・キーパーの岡本君は、一見先輩金澤君を彷彿さす柔軟さがあり、捕球もしつかりしたものであるが、結局同チームは何となく厚味に缺けてゐる。

昨年素晴らしいカムバック振りを見せた關大も、今春多数の優秀選手を送り出したため、昨年ほどの生彩を認め得ない。對神高商戦の際には、泥濘戦の悪條件の下に置かれてゐた爲、同チームの持つ全貌を露はしてゐなかつたが、京大と同様に昨年よりスケールが小さくなつてゐることは否めない。FW線には、まだゴツゴツとしたところがあつた、バック陣も、失つた穴を或る程度補強工作に成功してはゐるが、氣合の點に關聯を來たし、間々ソツを見せてゐるのは、今後に残された研究課題である。しかしGR上吉川君は、一頭地を抜く優秀な存在を示してゐる。

岡田、小橋兄の俊鋭を送り出した神戸高商は、その痛手をまざまざと現はして二敗を喫して終つた。爾後の神商大、關學に對しては到底望みがないが、對京大、および對關大戦の後半に示した如く、最後まで試合を捨てることなく戦ひ抜くことを願つておく。たとへ武運拙く敗れても、精魂を傾け盡した後のものであるならば自ら慰められるものがある筈だ。

④

要するに、今季の關西學生リーグは關學、神商大が先づ首位を窺ふべく、これに對して關大がどう前者の地位を覆さんとするか、現在の京大では、關學に對して先づ一籌を輸さねばならぬが、用兵の妙を得れば、關大戦には多少の希望をつたぎ得るであらう。

【三宅二郎】



十月二十七日神宮競技場で行はれた強風中の慶文蹴球試合、無得點で引分となる

ツープラスセサア

12月1日號

大正十一年三月十五日第三種郵便物認可昭和十年十月二十日印刷紙六、十月二日發行
毎月一回（日、十五日發行）昭和十二年十月一日發行（第十四卷第二十八號）

朝日新聞社發行



ラグビー戦線今や酣

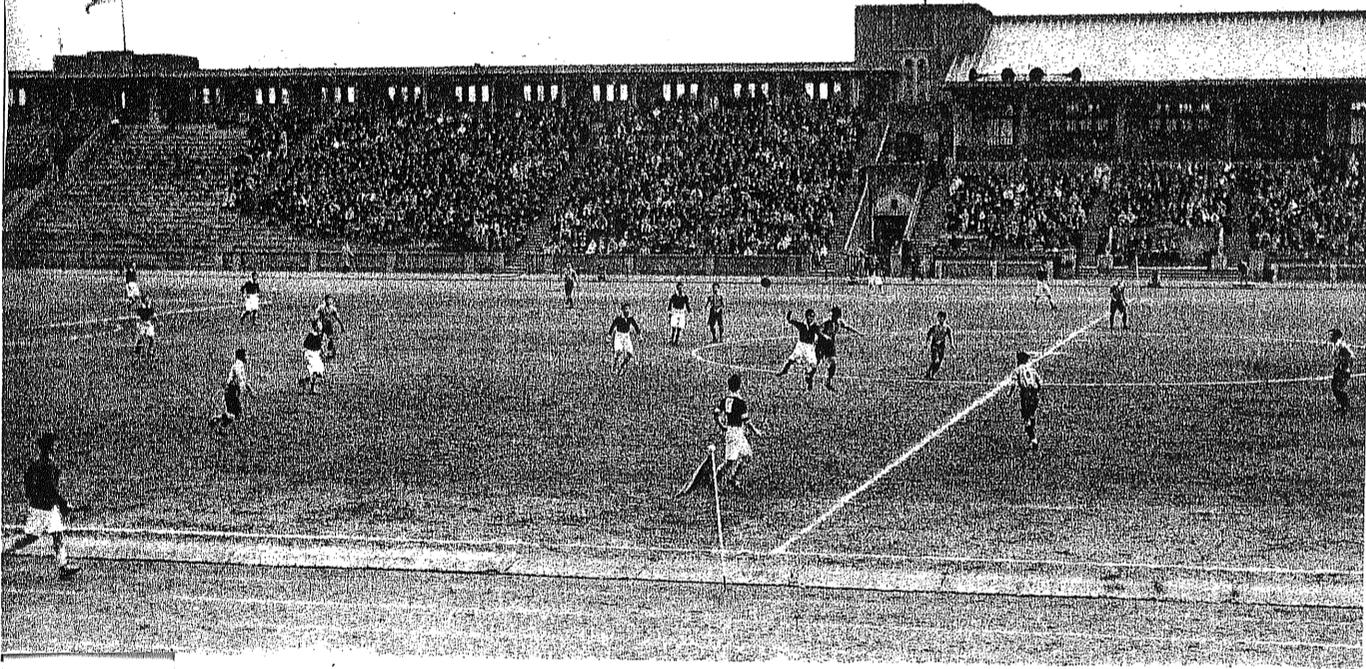
早慶、明同試合戦評

早明、京同争覇豫想

【カレンダー添付】

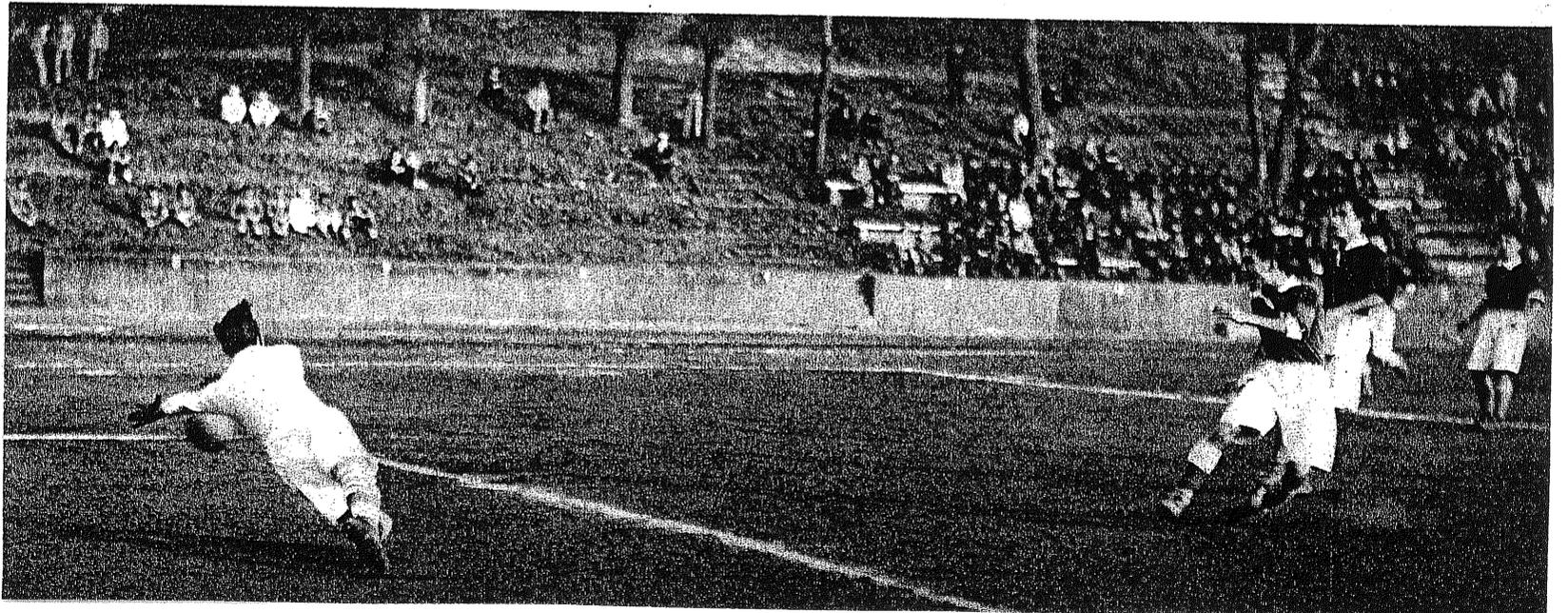


慶応蹴球 後半七分慶大駒崎君のゴールエリア邊からの好蹴を帝大G・K高崎君がチャイナに會ひ、はたき損ねて慶應得點す



早慶蹴球 前半五分ころの試合全景

早慶蹴球 早大G・K佐野君、慶大の猛蹴を美技に阻む



| | |
|--------|---------|
| 關東學生成績 | (22日まで) |
| 慶大 | 100 |
| 早大 | 200 |
| 東大 | 200 |
| 文大 | 200 |
| 大正 | 200 |
| 大東 | 200 |
| 大南 | 200 |
| 大北 | 200 |
| 大西 | 200 |
| 大東 | 200 |
| 大南 | 200 |
| 大北 | 200 |
| 大西 | 200 |
| 合計 | 544445 |
| 平均 | 644432 |

| | |
|--------|---------|
| 關西學生成績 | (23日まで) |
| 關大 | 100 |
| 京大 | 200 |
| 東大 | 200 |
| 南大 | 200 |
| 西大 | 200 |
| 合計 | 3355 |
| 平均 | 4444 |

望展戦グーリ球蹴西東

早大F.Wの健闘 慶を破り四年連覇へ

工藤 孝一

早、帝不慮の一敗、慶文の引分けと波瀾曲折を繰り返した。關東大學蹴球リーグ前半戦も、歸朝後のオリンピック代表選手の疲労回復につれて、いよいよ順調な歩みに返り、Aクラスは慶、帝、早の覇権をめぐる三つ巴戦、Bクラスは、商大が二勝を博して、一部残留にホット安堵の胸をなで下ろし、一勝の慶大、一引分けのみの文理大がそれぞれ浮沈の瀬戸際に立ち至り、必死の奮闘に瀕する苦境と、まづ形勢二分の状態となった。

かくして制覇をかけるビッグスリーの第一戦として、十一月十四日、日神宮競技場に慶帝相見えたが、エース高橋豊が傷ついた帝大の脆弱な攻撃ラインでは到底勝味なく、加ふるにG・K高橋弘の前半における心もなき捕球の二失は、帝大エレヴンをして全く反撃の



早慶蹴球、前半二十三分慶のG・K津田君が早大川本君のシュートを蹴倒しながら防ぐ

の氣勢を失はしめ、結局五對〇といふ大差で帝大敗へ無く散つて了つた。

應慶 は、對文理大戦における攻撃前線の不振に鑑みてか、オリンピック代表、R・Iとして、赫々たる功績を樹てた右近をF.W線に引き上げて、専ら得点力の増加に意を用ひてきた、かくての快勝はこの「攻撃は最善の防禦なり」との信條の下に奮起した積極的戦法が、齎したものと云ふべきである。氣遣はれたサイドハーフ宮川、加藤も二點の拾ひものからすつかり氣を良くして、カッテングの出足において見違へる許りの鋭さと速さを増し、F・B伊藤、石川の冷静なカバーに支へられて守備は全く危な氣の無いプレーに終始した。

然しながら熱チームの精華ともいふべきは、矢張り左右均衡したF・W線、むらなき攻撃力であり、ミッドフィールドにおける右近、播磨の巧みなキープから兩翼に流されるスループスの圓滑さ更に二宮、駒崎の快速と、緻細なタッチプレーに、相手バックスを左右にゆすぶつて鋭く寄せる連サイドの突つ込みがゴールゲットの實を結ぶことで、此處に熱チーム攻撃の合法性が認められ、後半における三ゴールは、如實にこれを物語るものである。

シ ズン開戦に先立つて、最も呼び聲の高かつた帝大は、巨人群像の守備陣の鐵壁に對する絶大な期待に負ふところ多かつたが、G・K高橋の脆さ以外に、O・H菊地の浮動のブレ、マーク法の不徹底が大きなきたつてゐた。すなはち、對慶應戦に慶のO・F増田と並立に過ぎた菊地が、増田の柔軟なシールドリングによつて、あつさりスリッパされ、これが延いては味方サイドハーフとフルバックとの重複、混亂を來たし、慶の兩翼をして徒らに名を成さしめた。しかしてその攻撃は、バック



文慶蹴球、後半文理大の松永君がドリブルからシュートに移らんとする瞬間

スから兩翼に放たれる長蹴が唯一の武器であつたが、L・W側田は、常にゲームの進行とは無關係な位置に在り、R・W側田また慶のL・B伊藤の巨軀の影に姿を没して無策に陥つたから、先づ帝大の得点は遙か薄となつてしまつた。O・F慶の氣力あふるる、ダツシュに、慶F・Bのミスからたゞ一回の好機あつたが、両インナーのキープ拙劣、積極的ゴールラッシュ不足では奪取もまた止むを得ない。

れこ に續いて十五日には早大が當々六對〇で慶大を退けたが、この試合では早大の持つオリンピック選手F・W加藤兄弟、川本、西島、G・K佐野の快技を見るに止まり、前半僅か二十五分迄に四對〇と引き離して大勝を決定した。然しながら、このF・W四銃士の本場仕込みの老練なテクニク、瞬引きと決め手の鋭さは、見るものを最後まで十分にプレーを樂しませ、目新しい足技と、トライアングルの妙を展開した。かくて大詰めに近づいた今シーズンは、二十一日文理大對慶大の第二部活部を決すべき最下位争ひ、二十二日は早慶兩横綱の覇權争ひとなる。

一勝三敗の慶大に對し、文理大は一引分け取と、ともに浮沈の瀬戸際に立つ兩軍イレヴンは、必死の意氣を極度に尖鋭化して相對し、文理大が開始もなくL・I久下の一蹴でリードすれば、慶大もほどなくR・B伊藤の長蹴からL・W天野、O・F天野の協力で同點に追いつき、前半は文理大のキープ攻め、廻し戦術の優勢に對し慶大は、ひたすら肉體による悲壯な防禦にこれつとめた。

然 ながら、守備に組織的マーク網を持たず、たゞ軍に個々の體格を武器とする慶大バックスは、後半戦におよんで疲労困憊し、文理のエース松永のマークのみに氣を奪はれ、他を省みぬ處から遂にR・

W小川の見事な右足の一蹴に、ガクリと降参して了つた。更に原崎の一點を加へた文理大は遂に三對一で制勝し辛くも第一部に残留する事となつた。木村、藤田のH・B間に支へられ、F・松永の個人技術を頼つて球をキープし得る能力あるだけに、その勝利は順當なものといふべきである。守備はF・Bの内寄り勝ちた位置から時々慶大の突進を許してゐたが、慶大F・Wの右側に、甚だしい二つのプレーキがあつたお蔭で太過なくすんだ。

再び二部に逆もどした慶大はその技術、戦術の劣勢からすれば當然の歸結で、従來同志と突つ込みのみを旨とし、個人技術並びに戦術の合法化、緩急の變化を省みなかつた同チームは、この敗戦の苦杯によつて教示されるべきが多かつたに相違ない。

大に引分けた半黒星以外は、何れも望まざる快勝を續け、最後の戦を残り慶應に對して、早大はオリンピック選手の留守中、商大に一敗地にまみれ、更にリーグ戦最終日の對帝大戦を残してゐるから、四年連覇を前にして是が非でもこの一戦をものせねばならぬ苦境にあつた。早慶戦は傳統的特殊の雰囲気の下に事實上の優勝戦として、名實ともに絶大な期待をかけられた。

しかしながら、いざ戦開開始といふ間際に、早大は意外に落ちついたもので、慶應が約三十分も微しいウオーミングアップを行つたに反し、僅か三分位の足馴らしでこの大試合に臨んだ。果せるかな慶應は、開始直後五分間は猛烈なるダツシュに次ぐダツシュで早陣に殺到したが、早大は悠々これを受け流して得機の姿勢を取らうと、八分早大は左側加藤兄弟のキープから右に廻し、深遠緩急の妙を含んだセンタースリーの變幻極りなきトライアングルの妙に移り、O・F川本右足の強蹴はネット左上隅を揺がせて軽くリードを奪つた。これに奮起した

應慶 は、風上に乗る盛んにロビンゲを早大スリーブックスの背後に送りF・Wの突進に託したが、早G・K佐野の憎いまでに落ち付き拂つた捕球とR・B吉田、O・H末岡の、すばらしい當りで遮られた。

後半慶軍オールアツクの氣勢に出て、しばしば早大ゴールを脅かしたが、依然としてF・Wのシュート弱く且つ早大スリーブックスの、適宜のゴールカバーで幾分かあせり氣味となつて得点なく、タイムアップ五分前、早大はR・W大越からO・F川本へ渡り、巧みなダツツテングで慶バックスを惑はし、G・K津田のブラインドを衝くシュートは遂に左隅に決り、二對〇と大勝を決してしまつた。押されたが、耐へた早大の勝利は川本主將の快技、オリンピック

ク代表選手の卓越せる試合劇れに因るものであつた。

ミッドフィールドにおけるF・W有効適切な動き、球を無駄にせぬ確實なキープ攻めは、先づ左側加藤兄弟の足技の妙味を繰る好コンビから口火を切り、西島川本、加藤兄弟と進ずるパスワークの變化、ゴール前の物すごい爆發力、鋭烈なるシュートテングの威力は驚異的なものであつた。

し然 この日の殊勳の第一に挙げらるべきは吉田、末岡、上野で組むスリーブックスの健闘であり、巧緻華麗なパスワークから、鋭い寄せを誇る慶應の攻撃をして無得点の汚名を負はしめた、強固なるマーク擔身のカバーは、絶縁に慣ひするものである。一方、また給球の大任を果した笹野、關野の忠實な縁の下の力持ちの役目も見がし難し、殊に慶のホープたる右近、播磨を執拗に追ひ込んだ力闘は目覚ましい。

慶軍の敗因とも見らるべきは、一言にしてF・Wの不出來にありといふべきで、懸念された守備軍が、タイムアップ直前まで早大F・Wの強攻を一點に支へた氣力と體當りによる決死的好防も、これがために削られなかつた。二宮右近、増田、播磨、駒崎と左右均衡した前線捕ひの最前線は立原、堀江、鈴木の三オリンピックバックスを、一時に送り出した早大後陣の若手を、まき得なかつたことは何に因るか？ 二宮、駒崎、増田が、早大スリーブックスによつて固くマークされるにもかかはらず右近、播磨の両インナーのキープを恐れた、速攻一點張りの攻法は前半の風上においては一應うなづけるものもある、最後までこれを固守した作戦の單調さは、諷刺に苦む最たるものである。

に更 このF・Wの悪癖たるシュートテングの拙さ、弱さが最もひどく現れてゐたから、徒らにゴールキック

※左ページへつづく

※右ページからつづく

の数を増したに過ぎない。H・B線でも後半幾分ブロー良攻勢に出たがフイードの變化に乏しく、まづバックスの五人で、ひたすらに守備に奔走したといつても過言ではない。

要するに、得点争ひのシーズンゲームを豫期されたこの試合は、兩軍バックスの意外の健闘によつ

擡頭の神商大

關學と再戦

清水 金 二郎

今シーズンの關西の覇権は、一大躍進を遂げた神戸商大か、古縁關西學院か、十一月十四、五の兩日行はれた神商大對關大、關學對京大は五十一、七十二、二十二、三の兩日行はれた關學對神商大、京大對關大戦は九十三、三十一でいづれも豫想通り前者が制勝し、關學は對關大、神商大は對神商大戦を發し、互に同成績で對峙してゐるが、兩校とも恐らく最後の一戦に勝つものと推測され、過日の引分試合の結果をつけるべく劇をかけての一戦を非常に期待されてゐる。

神商大—關大

率直に 北は豫想された所だが、それにしてはあれほどの惨敗を喫するとは思へなかつた。關大の敗因としては、F・Wに徒ら

た横走りや無駄なパスが多く、また好聯絡なきため一貫せる攻撃線が形成し得ず、従つて散漫的攻撃より出来なかつたこと、H・Bが防禦に追はれ、攻撃に際しては思

覇権は何れ

大谷、前川兩君がリードする神商大F・Wが、對關大戦の如く好調を保持し、且つ關學を自己のゲームに誘ひ込み得れば、榮冠を獲得し得るであらう。が、關學としても過般の對戦の如き拙戦は繰返すまいから、商大としては相當苦心を要するだらう。

もし關學が神商大の3D・Bゲームに誘ひ込まれず、F・Wに十分活躍せしめ得れば關學が覇権を握ることとなり、結局兩チームの各ラインを比較すれば、神商大よりも關學が一段上位にあることは否定し得ないから、公平に見て關學にやゝ勝味多しといはねばならぬが、神商大の3D・Bシステムを關學のF・Wが如何にして破るか、また商大バックスが關學の猛襲をいかにして腹止め、勝利への



神商大、關大蹴球戦、神商大が二點目を得んとする關大ゴール前の猛攻

に放置したことを指摘し得るが、むしろ精神的缺陷が最大敗因と思はれる。

この日の關大イレヴンには、傳統の旺盛な闘志（これはラフ・プレイとは異なる）もチーム全員の精神的結合も殆ど見られなかつた。それでは名手吉川君が、いかに頑張つても制勝は困難である。この點に關大イレヴンが猛省すべく此處に留意すれば、若い選手が多いから易々として立直り得るはずである。

神商大

はこの日も縮纏に動き、その快勝の跡を辿れば、F・Wの大谷、前川兩君の優れた技術もさることながら、一段劣弱と考へられた右側が豫想以上に活躍し、むしろ右から攻めて大谷、前川兩君にゴールを破らせることに成功して得点を重ねた。またバックスが味方の優勢に乗じ、ソツなく動き大きな破綻を見せなかつたこともその勝因の一つである。

が、F・Bの動きやG・Kの判断には未だしの感があり、特に大橋君の右タツチ近くからのシュート

トを、G・Kが頭上を越されてその儘ゴールせしめた如きは、試合の後半だつたから好いが、もし前半だつたら試合全體に影響するところ大となつたららう。これらは神商大が今後最も戒心を要する點である。

關學—京大

京大は

對關學戦に、病氣で缺場してゐた山中君をR・Iに、O・F小野君をR・Wに廻し、F・B栗原君をH・Dに据ゑる等、背水の陣を布いたが、遂に敢なく敗れ去つた。

この日の京大は、前半に全員の拗に球を追ひキビしくした動きを見せたが、後半次第に疲勞し、何處かに物足らぬ點があり、練習不足の感をさへ呈してゐた。その上いはゆる3D・Bシステムも相變らず板につかず、關學の野澤に中央を削られてゐた。

またこのシステムを採る際には、兩インナーが攻防、特に攻撃のキポイントとして最も活躍を要するのだが、京大兩インナーにはこれが出てゐなかつた。これが

敗因の主なるものだ。とはいへ、最後までゲームを捨てずに戦つた態度は誠に好しく、この意氣で二、三年前の黄金時代の再建に努力されることを望む。

關學は

對神商大戦の時と異なり、巧みに聯絡を保ちH・Bの忠實なブローを受けて、リズムカルな攻撃を行ひ得た當然の結果である。だが後半二十七分京大の小野君の單身ドリブルを、二人でポケットして追ひながら、フリーストで得点を許した如きは、小野君の巧技を賞するよりも關學バックスの無策を責めねばならぬ。

なほ關學イレヴンに對しては、ボジショナル・プレイを重視すること、即ち球を持つ者が正確なパスを送ることと同様に、否それ以上、球を持たぬ者がパスを受ける好位置を發見し、これを占めることに努力するやうに希冀する。これが出来れば關學は、チームとしての威力をなほ一層増大せしめ得るであらう。

本場の球技にさまに



パンチング・アウト!
アーセナル対シエフィールドの蹴球戦に、シコフイ
ル軍のゴール・キーパー、ブラウン選手の活躍



最初のゴール——フルハム対フリーの蹴球試合で、
フルハム軍C・Fペリー君のシュートで得点

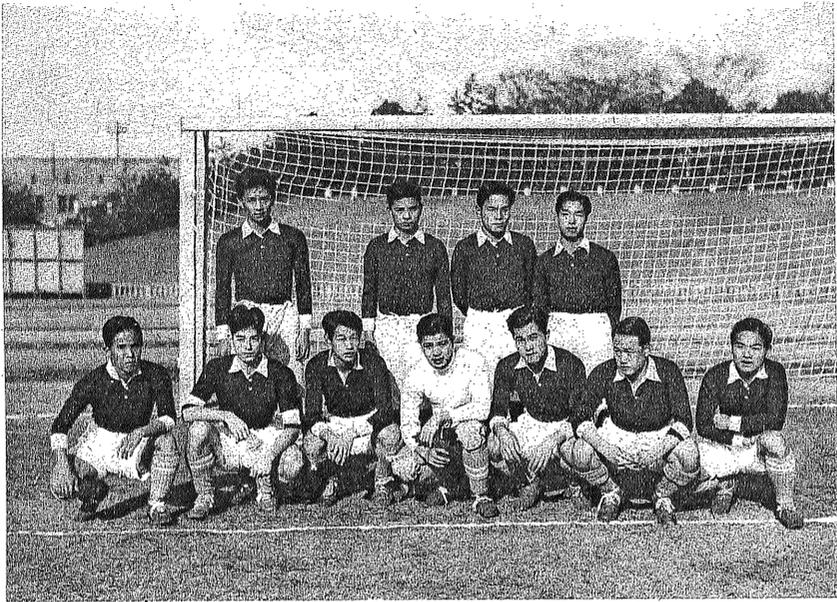
東西學生蹴球の王座決す

早大四年連勝

東大バツクの健闘空し

高師 康

| | | |
|----|----|----|
| 勝 | 分 | 點 |
| 早大 | 41 | 87 |
| 東大 | 11 | 7 |
| 文大 | 23 | 5 |
| 商大 | 23 | 4 |
| 農大 | 22 | 4 |
| 工大 | 22 | 4 |
| 理大 | 22 | 4 |
| 医大 | 22 | 4 |
| 薬大 | 22 | 4 |
| 歯大 | 22 | 4 |
| 経大 | 22 | 4 |
| 法大 | 22 | 4 |
| 政大 | 22 | 4 |
| 学大 | 22 | 4 |
| 大 | 22 | 4 |



優勝した早大チーム(向つて右から後列)関野、上野、加茂元、加茂弟、前列)末岡、笹野、吉田、佐野、川本、西邑)

早大、東大戦

關東大學蹴球リーグは、十一月十九日の早大對東大戦をもつての幕を閉じた。試合の期待は如

何なるバツクをも粉砕する早大のダイナマイツトFWと、良いバツク

に乏しい關東リーグのうちで、巨人を揃へて技術的にも勝れた東大バツクとの正面衝突にあり、更に

な無味乾燥なものとなつた。

部分的

に見るならば、早大は西邑によく球がつき、早慶戦の時のやうなピツコにもならず、インサイドブレイの面白さも味はれ、興し易しとし



高大ゴール前の混戦(對文理大試合)

落さず処理した巧味、必死に追隨する東大菊地のスライディングタツクルを強硬に第一点をあけてから繰返した猛襲は、僅か四分間にシュート六回を放つ、東大の好防に點はならなかつたが、そのキツクの強さは早大FWなればこそその破壊的威力を示すものであつた。

後半に は流石の巨人群も疲れ、タツクルは一瞬の差で及ばず、老巧川本のために徒に名を成さしめた、一方早大バツクの全體としての出来は、今シーズン最上のものであつたがスライディングは極めて消極的で、両サイドハーフも中央に寄つて樂に動いてゐながら、FWへの給球や、スローインの際にも苦心の形跡なく、FWは老巧なるが故に、

リーグ総評

この試合はタツクル不能を誇つた早大FWに、東大がタツクルを敢行して成功したこと、早大FW川本がブレイに忠實なりし故に、得點四點を獨占した事、その他多くの示唆を含むものであつた。

さて今シーズンの試合を省みて記憶に残る幾つかを拾ひ出して見よう。

FWは球の扱ひと、身體のこなし、コンビネーションには素晴らしい進歩を遂げ、または完成近き進歩過程にあるものが多かつた。しかし、バツクメンにはFW流の球のこなしは出来ても、その使命たる強力な一蹴を放つ得る基礎的練習に缺けてをり、許し難いミスキツクやファンブル乃至は不必要なタツチアウトがしばしば見られた。これがバツク不振をとられる原因をなしてゐるものと思はれる。GKには、スライディングの花々しい所をねらひ過ぎて、體重のかけ方、モーションの起し方が、高いボールに向かぬほど極端なものもあつた。一方、頭腦的戦術においても個人ブレイでも、従來の一流プレイヤーの觀念よりも、一段階だけ上を行く超一流の選手と第二流選手とが多く、この間の一流選手の飢饉時代の觀があつた。

超一流

選手を個人的に示したのが、早大GK佐野で、コンビネーションとして示したものが、早大FWであつた。佐野を危機に追ひ込む

Wがなかつたため、彼の眞の技に接すべくもなく、實の持腐れ(補欠となつてゐるオリビツク選手不破に至つてはなほ更このことがいへる)であつたが、この片鱗を示したものに彼のゴールキツクがある。

彼の一蹴は優にハイフラインを越えるが、FWの位置や、ゲームの次の展開によつて長短高低自在の球を、素早く或は悠々と、そのタイミングまで考へて送つてゐることである。FWの場合には、ウイングがセンターの位置に行き、左右のインナーが入りかはつてもそのポジションのブレイに少しの不都合もなく、しかも誰かが空いたポジションを必ず埋めてゐた。

足先、足裏、踵、インサイド、アウトサイドなど足のあらゆる部分に勿論頭、胸、腹等による球のストツプが完全で、フイドを受け取るもの、スタートの起し方、ポジションの取り方も高度に洗練されたものであつた。

各チーム

Mについては、早大はFWと、GKのチームで、攻撃は最大の防禦なりの格闘を具現して、優勝をものしたのであつた。第二位慶應は、最もムラなく纏つてゐたが、シーズン前の好調は遂に續かず、對文大戦の引分以後は下り坂を歩んでゐた。FWの不振はすでに商大との第一戦にも見られた。たゞ早慶戦はバツクの闘志を煽つて、氣魄の鋭さはむしろ慶應に認められたが、偉大なる素材二宮の使ひ損じが早大の軍門に降るとともに、あはせて覇權から遠ざかる因をなした。

三位を保つた文大は、バツクの體力に勝れてゐたが、FWに松永以外人なく、彼がマークされた場合は無爲といふ極めさであつた。しかも松永は、試合ごとに球の扱ひ、判断などに進境を示す完成途

上のものであつた。東大は芳しからぬ成績で商大とともに第四位に甘んじなければならなかつたのは素質のある選手を擁する反面、メンバーの異動が激しく、聯絡の完成されたものが見られなかつたことを惜まれる。

商大は小柄にまとまりを見せ、FWの聯絡に見るべきものがあつたが、華奢で迫力に不足し、バツクメンは身體のこなし悪く、試合馴れもしてゐなかつた。第二部へ陥落の最大は、劈頭の東大戦にFWの好キツクと、GKのラッキータ防備、LW天野の二點でものにしたが、以後は粗雑なブレイに禍され、商大との二戦にも二點のリードを後半に失つたり、文大戦も今一押しといふところで成功せず、敵に對する研究不足などが見え、遂に最下位となつた。が、實力から見ても順當なものであつたらう。



早帝蹴球 前半二十三分帝大ゴール前の混戦、帝大H・B菊地タツクルに防ぐ

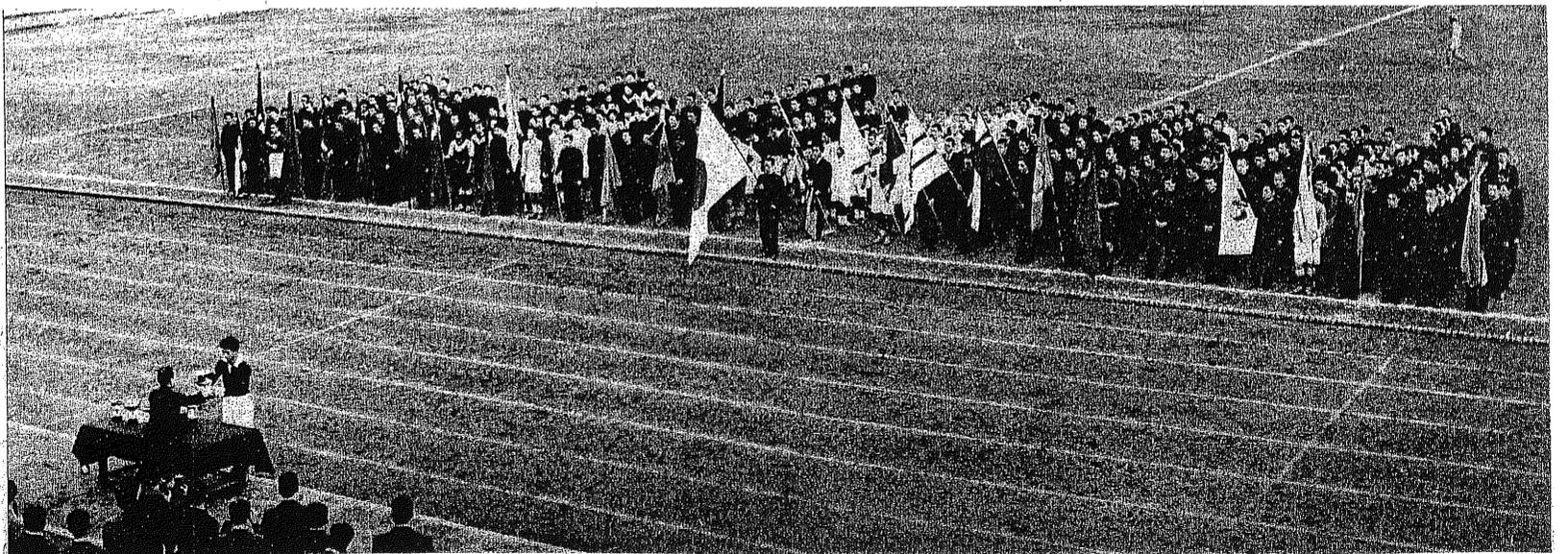
(左ページの
写真参照)



加の大早分五半前 球蹴帝早自
(帝1-4早)る迫にルーゴ大帝茂

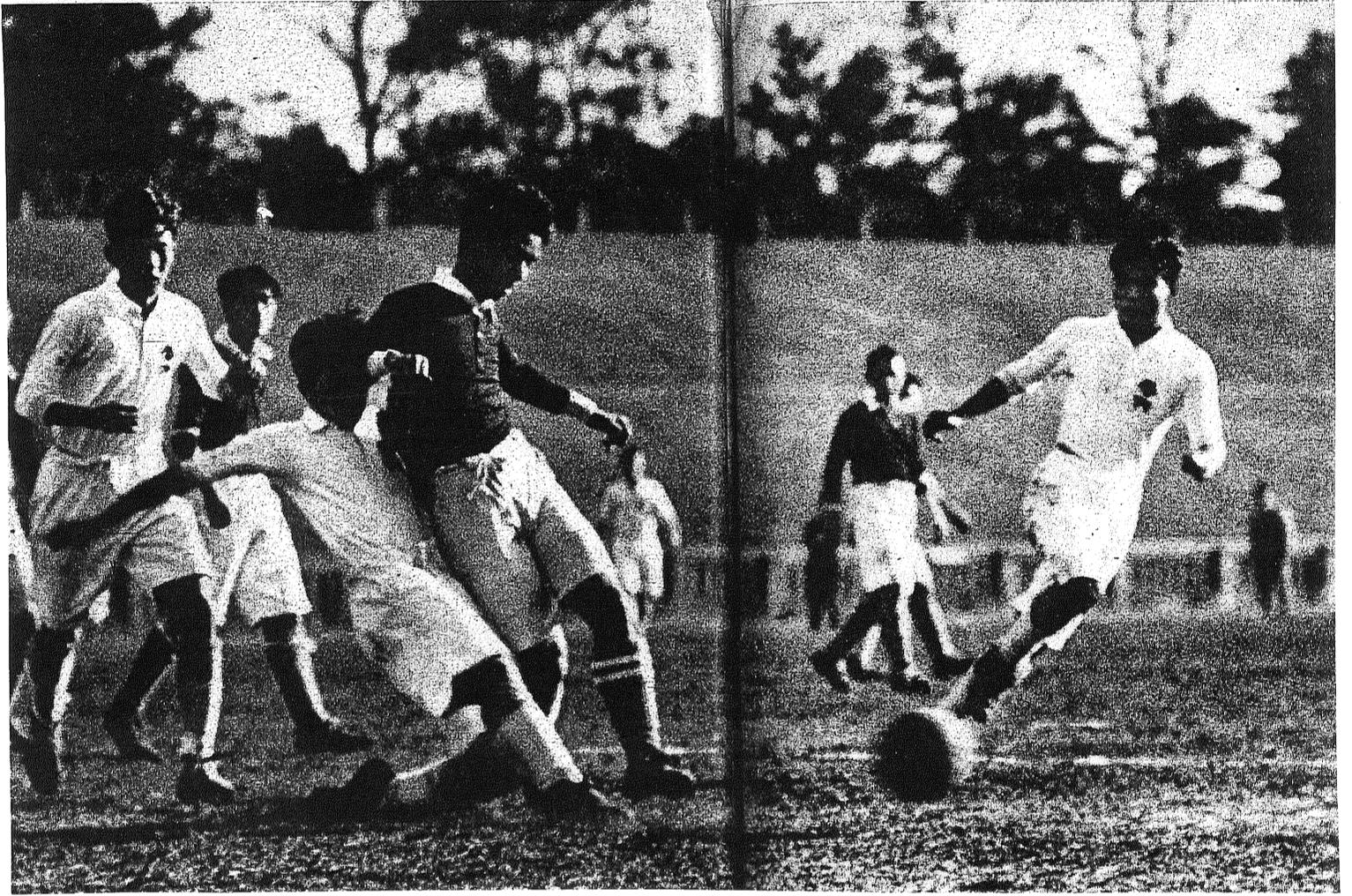


神商大優勝 對關學の爭覇試合における神
戸商大が三點目の得點を擧ぐる直前のFWの
猛攻(神4-1關)



關東學生蹴球の閉會式(カッパ
を受けけるは早大の川本主將)

熱球の覇制



※ 右ページの写真と連動した
見開き写真

※右へ、ページからつづく

すれば、それは早大式ショートパス時代への逆轉であり、十一、二年前の蹴球に退歩したことを意味するであらう。

更に早大の

守備は、E.H.關野がオリビック選手陣野に優る健闘をした以外に見るべきものなく、G.H.末岡が後退してG.F.をマークする形は、商大が第一得点の際に失策したのみで破綻は起さなかつたけれども守備組織全體として見れば、いはゆる三人F.B.制としての統一的活動を示さず、味方F.W.の球を持つ力の強さに援けられて僅かに支へ得た感が深い。三人E.B.制を採る際に當つて、攻撃への展開及び決定的な味方の破綻を防ぐ爲にそのF.W.の隊形配置を如何にするべきか等のチーム全體の構成は論外としてその守備面のみに見てもこの日の早大守備は、F.B.が不慣れた故に渾然と兩側に開いて位置し、そのウイングをマークする方法にウイングに球が渡る前に潰さうとする場合と、極力切れ込むことを警戒する場合と區別がないやうに見受けられた。或はまた觀念としては區別してゐてもそのF.B.が近來の守備者の通弊である開合ひをこころの訓練不足のために、そのやうな外觀を呈したのであるかも知れない。

ともかくも

早大は餘りにも無計畫に似た攻撃法のために、より多かるべき得点が僅かに三點に止まつた。その第三點目の決まりは川本の個人技に負ふとしても、第一點は加茂兄の鋭い出足から速いドリブルにより突破し、進出した川本にパスの過程、第二點一商大ゴール近くで一寸したG.H.の動きを利用して川本がマークを外し、その出先に西色下り縦のパスを送るの経緯に現れた早大F.W.の強味を基礎に、今少しの計画的攻撃法を採用すべきではなかつたらうか。これに對する商大の得た二點は、F.W.の隊形による速攻的攻撃法に、名手大谷の個人技を十分に配した結果であつ

て、全員の術力比較において多少劣つた商大としては、正に探るべき方法を取つて成功したものと賞すべきであらう。

オリビック選手への期待は、川本に渾然と見たのは判り難い、機微なコツを掴み進歩があつた場合には、加茂兄が疲れてゐながら

時折賞讃に

値する鋭さを示したと、加茂弟が全體としては不振で、大谷に及ばない感を抱かせたが、ゴール近くに飛び込んだ後の球の處置に多少の進歩を示してゐた程度以外に見るべきものがなかつた。早大

甲子園原頭に再現する 蹴球界の最高峰戦

東西四強剛の對陣豫想

正月十日には、南甲子園運動場において東都の巨豪W.M.W.（早大俱）と、早大に次いで關東學生リーグの第二位をかち得た慶應義塾大學が、本社の招待に應じ、W.M.W.は關西學生リーグの第二位校たる關西學院大學と午後零時半から、慶應は關西リーグ加盟以來初の鴻業を達成した神戸商業大學と午後二時半から相見ざるべく勇躍西下することゝなつた。

想ふにわが蹴球界は、逐年堅實な歩みをつづけ、昨年八月には待望のオリビック行の願望も成就し、しかも世界蹴球界に驚異を張る強豪スエーデンを見事に降して、世界の蹴球戦線に大波紋を投げ與へるといふ、眞に目覚ましい業蹟を、わが國蹴球史上に刻み込んだものだった。一方斯界の主流をなすところの關東、關西學生の兩リーグにおいても、その數において又賞において、球道の最高峰を再現する内容を保持してゐるが、しかしながら東西兩リーグの間には、互ひに相接する機に乏しく、一年間に或る一、二の學校が東西優勝競争試合、或ひはまた選ばれて全日本選手権大會に出場する機に接するのみであつて、東西相會する數は僅か數度に過ぎない現状なのである。

東西が緊密な

接觸の度を増すことは、お互ひの技を練り術を磨く上において必要不可欠から

の試合振りは、樂に戦ふことを主としてゐるかに見える。果して然りとすれば、球を持つ力をつけて樂に攻め込んで行くことを習ふと同時に、全線を観察して良い位置を占める觀察技術と、頭腦の發達を併せ圖らなければ、それは外國チームの外見のみを學ぶものであつて、それをもつてしては決戦死闘と我武者權に、精氣一ぱいの試合をして行く間に得るものよりも少く、遂には今日の指導的地位から轉落するのではないかを危ぶむものである。敢て苦言をならべて今後の精進に俟つ次第である。

三宅二郎

る角度から爆撃する力は當代隨一の感がある。加茂兄のボチッションに川本が入り、高橋がその脇に配されることがあつてもその威力

はさして滅殺されはしない。關學がこの猛襲をいかにして防禦するであらうか。

關學は恐らく川本を強くチエツクする策を採るであらうが、しかし、他のプレイヤーを配置するならば、そこから豫期せぬ失點を厭せねばならぬことになるから、餘程慎重な防陣を布く必要があるわけである。關學のH.B.線は好調をたもつたならば換球力はゆたかであり、また執拗に追ひまくることであらうから、F.B.とのコンビにソツがなければ或る程度の成功を見せることであらう。ただ戒心を要することは、F.B.が相手には抜かれてからの動作に脆弱さがあること、この點重々の考慮を拂はねばならない。G.R.中村は、大試合の場数を踏んでゐないから、どれだけの守備力を發揚するか、未知數として興味の一つであらう。

慶應大學對神戸商大

慶應は關東學生リーグで早大に2-0のスコアで惜敗し優勝を逃し第二位となつたがその實力は早大に比しは多少遅延のあるチームではない。このチームの特長とでも見るべきものは、全員に餘りムラがなく非常に均整のとれたエレンであること、神戸商大が對早大戦に、假令善闘したとはいへ決して輕視出來ぬ強敵である。

慶應のF.W.は五輪選手右近の強力な猛者と増田、播磨のセンタースリーを擁し二宮、駒崎のタッチ・プレーも實に堂々たるもので球捌きといひ得點能力に於ても素晴らしいものがある。ウイングの二宮が何れのボチッションを口むるか未定だが、何にしても老巧駒崎らの好プレーは、得點レンヂが著しく増幅してゐるので、對早大戦に殊動を擧げた神戸商大も餘程の健闘を要することにならう。

味方の薄力を知つて、常に頭腦的な作戦に功を奏してゐる。

神

商大は、この試合にも周到な用意をもつて臨むであらうが、果して何んか姿で現はれるであらうか。G.H.木下、R.B.吉江の重厚な守備陣は既に定評があるが、第一線に強豪を揃へてゐる慶應を向ふに廻し、可成りの難航を覚悟せねばならない。

F.W.線のL.W.大谷、L.I.前川のコンビは、對早大戦において堂々

ステムを採用するに違ひなく、だから關學としては中陣で三人のF.B.を誘ひ出し、その穴にラッシュする策を講ずべきで、もしその意圖が奏功するならば、試合は可成り纏れることとならう。

試合は順當に行けばW.M.W.が有利に展開するであらうことは豫想されるが、しかし關學のH.B.線がW.M.W.の猛攻をよくカットし餘裕をもつてフリード出来るならば、前線がゴール決定力を持つてゐるから、關學の優劣二道の鍵は一に守備陣の廣狹如何にかゝつてゐる。

鋭

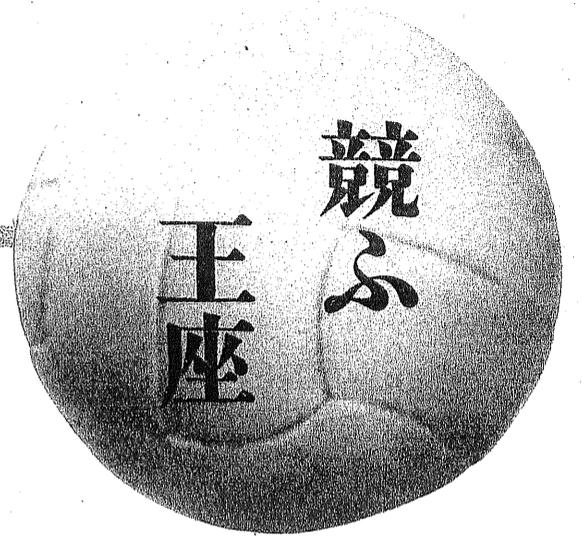
突き得やうから、圓熟しつゝある慶應のH.松元もかなり手古すらねばなるまい。

慶應のBの石川、伊藤の兩者はシツクリと氣合ひが合つてをり重厚なディフェンスをもつてゐるがただ大谷に相對する慶應のR.B.伊藤が、抜かれてからやゝ脆弱さを暴露するとの評があるから、曲者大谷にゴールを狙はれる懸念が多分にあると思はれる。G.R.は慶應の津田に對して神戸商大は行田に對するが、津田は新進ながら東都において既に定評あり、行田は一見、動作が緩慢のやうではあるが關學及び對早大戦には先づ無難に役目を果してゐたから互角と見るべく、兩者の優劣はF.B. H.B.の車前工作如何にかゝる問題である。

試合は慶應の全線が張り切つて、思ふ存分グラウンドを馳騁し得るならば、慶應に有利を認められるが、しかし神戸商大は對早大戦に自信をつけたことであらうから、かく考察すればこの一戦こそ勝運の驍騎を新踏し難い。

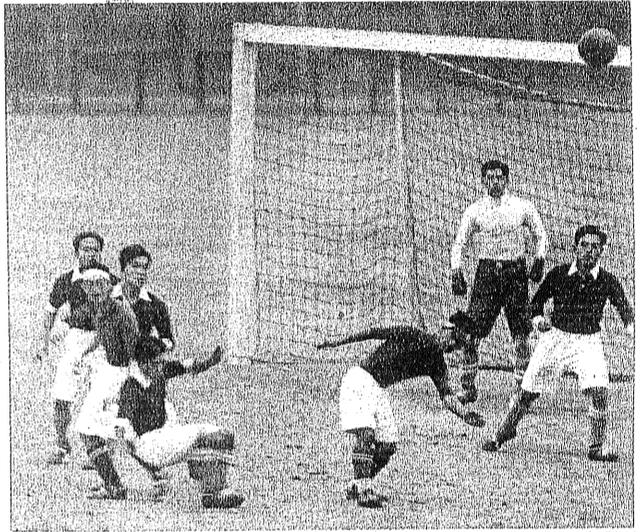


早大の猛襲——儘くもゴールアウト



早校勝優の戦グーリ球蹴生學西東
二十は戦覇争の大商戸神對學大田稻
早、れは行て場動運南園子甲日六月
四を権覇、勝制て戦接の二對三が*大
たし得獲績連年

ムーチ大早たし勝優



前半早大ゴール前における神商大の猛襲

後半二十分早大が右に得た
コーナーキックを商大GK
木下君ヘツディングで防ぐ



バックからの長途球で神商大
が二番早大ゴールに迫る



前半二十二分早大加茂弟のシ
ユートが商大GK行田の正面
を衝き得点とならず

去十一月十四日イギリス・ドーファンタス、チソリブでだけチエテシ対サダン
ドラの蹴球試合に於けるボールの動き、キーパーのゴールを撃つ選手の動き、ゴールキーパーの動きを捉えて



蹴球試合は十一月二十日ロンドンで、チソリブのバックがクリアしたのをアールのドリフトがヘッドしたところ



豊島師範連勝

関東中等府縣 對抗蹴球

関東蹴球協会主催、朝日新聞社後援の第四回関東中等學校府縣對抗蹴球選手権大會は、十二月二十五、六の兩日に互り明治神宮外苑競技場において舉行された。参加校は各地方豫選を経て代表となつた豊島師(東京)、湘南中(神奈川)、埼玉師(埼玉)、千葉師(千葉)、茨城師(茨城)の八代表。

戦前真紅の大旗は結局豊島師、非崎、埼玉師の三強豪の何れかに歸するものとされ、その三校が全く伯仲せる状態にあると考へられていたが、豊島師は准決勝戦に強豪埼玉師を屠り、勢を騰つて非中に果敢な戦を挑み、遂に山梨の豪族非中の首級を擧げて二年連覇を確保した。

試合の第一回戦は豊島師9-1千葉師、埼玉師15-0陸奥中、非中5-0宇都宮中、湘南中3-0茨城師と大荒れに荒れて殆んど一方的ゲームで見るべきものがなかつた。

准決勝戦

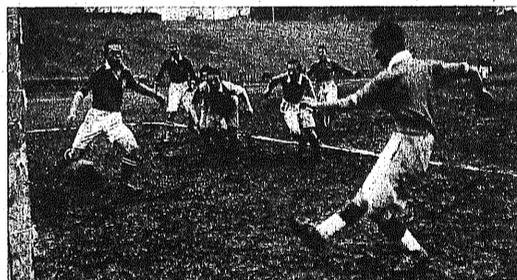
豊島師 2-0 埼玉師
非中 4-0 湘南中

豊島師は開始直後の浮き腰を衝かれ、バックスは退屈的となり前日の如くハーフラインの積極的な攻撃参加がなかつた。両インナーが攻撃と防禦の機に終始しては、到底この試合に勝味を盛ることとは出来なかつた。老練なG.F.鈴木とG.H.の欠場は、埼玉師に取つては攻防両面の痛手であつたらうが、より積極的に果敢な戦を行つたならば、或はこの試合を我が物になし得たかも知れない。豊島師は全員の懸命な動きに、俊敏な出足に、そしてムラの無い纏りに牙をを見せて強豪埼玉師を退け、勝運の微笑を浴びつゝ、決勝試合に進んだ。

決勝戦

豊島師 2-0 非崎中

非中はミッドフィールドに於て良く球をキープして廻したが、相手は抜いて残すことが出来ず、パスワークを成功して、常に再び前面へ相手に廻られる結果となり、ためにG.H.吉川に球を戻して再び展かなければならない結果となり、且つ瀟灑のグラウンドにおいては球の操作に難澁し、出足の早い豊島師にカットされ、潰されてゐた。G.H.吉川が守備に偏せざるを得なかつたために、F.W.は端的な動きとなつてしまつた(この場合の両インナーの動きが悪かつた)



非中ゴールに迫る豊島師

をキープすることもよいが、グラウンドが溼潤な場合は特に中盤より展いて速攻に出る方法を考へなければならぬと思ふ。守備においてはF.B.が常に立ち遅れの形で、H.B.との聯絡が圓滑でなかつた。

豊島師は全員の必死の動きと、俊敏な出足をもつて相手を潰し、ロングパスによつてウィングより一気に攻める方法を考へたのは、賢明である、試合上手といへよう。

本大會に現れたところによつて関東中等學校の水準を考へるに、數年の過去より決して進歩したとは考へられない。チームワークの方面に頭腦的な進歩の跡を認めることが出来ないでもないが、チームを構成する素材の、個人技術が一向に進歩してゐない。蹴球の基礎は個人技術にあり、これを高揚することを、先づ考へねばならぬ。それには基礎技術に敷をかけること、要は没頭することである。貧弱な基礎技術の上に、高遠な戦術理論を建築しようといふのは馬鹿らしい企てだ。先づ基礎技術の擴充を心がけられんことを切望する。

小野 卓爾

優勝した豊島師選手



東西対抗蹴球の盛況

蘊奥を盡した四大學

邀撃の關學と神商大に利なく

西下の早大俱、慶應に凱歌

概評 W關戦 濱田 諭吉
慶神戦 田邊 治太郎

| | | | |
|------------------|-----|-----|-----|
| (WMW) 弟兄本島野野田野野 | 20 | 7 | 9 |
| 加加川西渡岡未吉上佐 | | | |
| (W) F W | H B | F B | G K |
| 關島野野中井田邊 都村 | | | |
| (關學) 梅田野野田笠三田 宮中 | 12 | 3 | 1 |

わが國運動競技の中軸は殆んど全部が學生となり、その中心と強力は帝都が断然ぬきこんでるうちに蹴球のみは依然として關西のチームが相拮抗してゐるにも拘らず、たゞ一年一回東西の優勝校が相會して技を競ふのみ、國外へはオリンピック遠征といふ大業を遂行しながら内にはこの矛盾あるを遺憾とし、かつ斯技の發展向上に資すべく朝日新聞社主催の第一回朝日招待蹴球大會が、一月十日スポーツの繁華境、阪神甲子園南運動場で開催された。蹴球界の征服者WMW(早大)を邀へるは歴史にも輝く關西學院、關西の覇者神戸商大を征すべく勇躍西下したのは關東の二位慶應大學、この二大試合は蹴球界最高のものとして全國の視線を集めたことはもちろん、四大學とも一ヶ年の球史に、更に花を添へんとする意氣に燃え、互に技術の蘊奥を傾け期待に反かぬ内容豊富の大接戦を演じた。

| | | | |
|-----------------|-----|-----|-----|
| (慶應) 大谷 野田村下野野田 | 13 | 8 | 17 |
| 神商大 前 橋 今木中川吉行 | | | |
| (W) F W | H B | F B | G K |
| 田近宮野野川元藤藤川田 | | | |
| (關學) 増右二掃刷松加伊石津 | 6 | 6 | 5 |

線に3F B線がガツキと食ひ込んで、各人が櫻の役目を果してゐるので容易にゴール・シュートの機会を得させないが、W・M・W側は受身だ。しかも瀆刺味を缺いてゐる。

隣席の關西側の某君から「早稲田、こんなもんですか？」と訊かれる。さういへば、舊慣行はれた學生リーグ東西對抗戦の日にも、他の某君から同様の質問を受けたことだ。

六名のオリンピック選手を主軸とする今シーズンの早大は従来の急進調一點張りの試合振りに緩徐調を混ぜ、プレイに一生面を指した。無駄に精力を費さずに、決定的瞬間に爆發的威力を發揮しようとするその戦ひ振りは、終始懸命に働き六分以上も球を奪つた慶應を、巧みに射つた早稲田に於

關學 WMW 2-0-1

關學の敗因は3バツの研究不足

風を背にして今シーズンの學生界の覇者早大(W・M・W)が位置づく。例のスリー・バツス、R・Wには不振の大越が、退けられて、新進氣鋭の渡邊が拔擢されてゐる。W・M・Wの名に隠れて、試合に本腰を入れないとのデマが戦前飛んでゐたが、正に最善の陣容、關學は勿論玉碎を期してゐることだらうし、これならば面白くなるぞと、こつちも早くも本腰を入れた。それに主審は近來船と船を

吹かなかつた竹腰君だ。嚴格忠實を以て鳴る同君が本場の審判振りを見聞して来て、さてどういふ工夫にやるだらうか、これも興味だ。風は、時とすると慮かれた球を動かす程度。それに昨夜の雨でフィールドのスタンド寄りか、やゝ滑るのが試合の内容を些か割引させる。

ゴール前に雪崩込んだ

關學はキック・オフ後、直ちに相手方

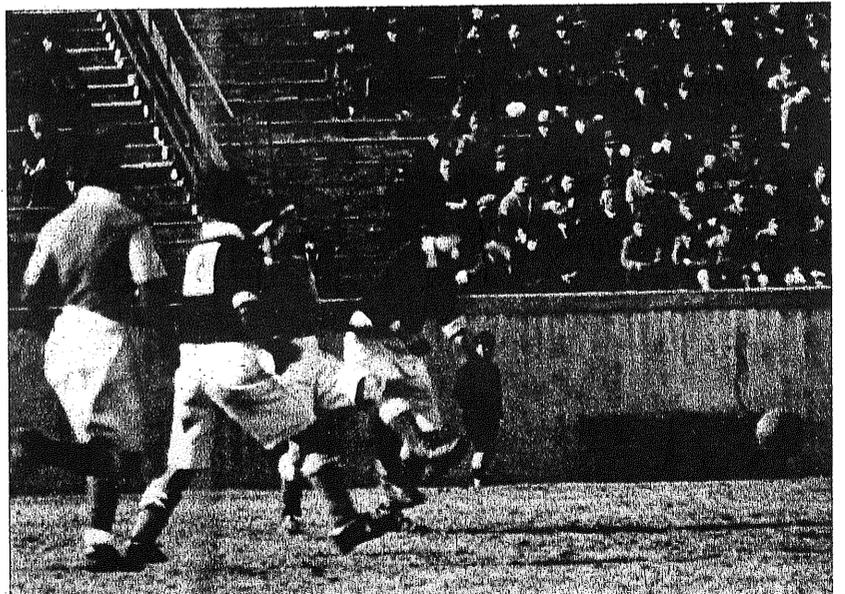
て最も有効に示された。プレイにも気分にも餘裕があり、球が無理をせずに滑らかに自陣にキープされ、試合は彼らの振る指揮棒に連れて樂々と運ばれて行く様にさへ見えた。だが

爾後早大は樂なやり方

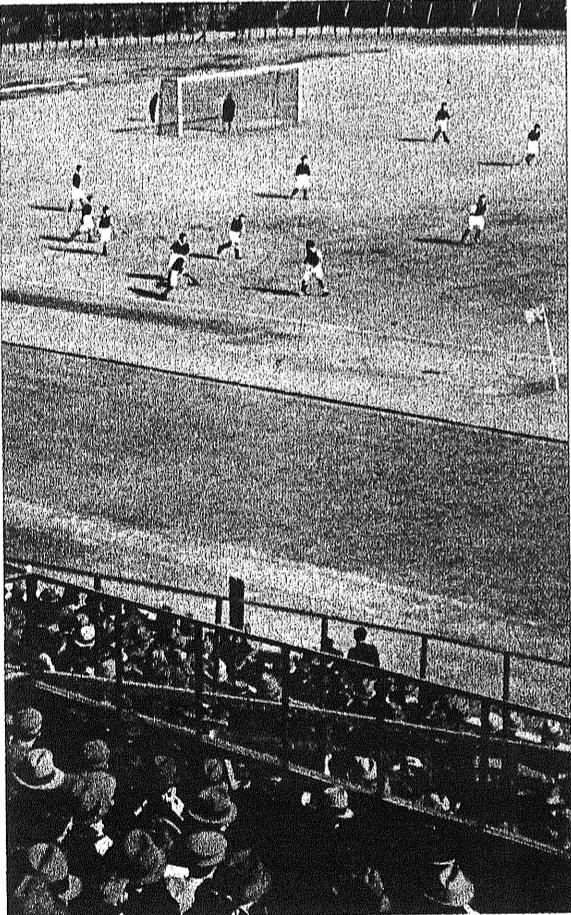
になつて、嘗ての急テンポを切迫したプレイを、新たに採り入れた緩テンポ、餘裕のあるプレイの後に失つて行きつゝある様に見える。恰度、減速蹴りをしない様に注意してゐると、すつかりキックが

試合は漸く高潮して行く

。徒らに飽い動きを累積して



後半中央附近で關學の田島蹴球方にパス



關學の攻撃を早大R.H.が巧みにカットし、さきに後陣に出んとせよと云ふ

みたW・M・Wも漸く活潑となり、二十五分I I加茂兄が、關野川本一加茂弟と巧みに廻されたパスを受け、一瞬ダツシュに移つて相手方R Bを風のやうにすり抜け、

アウトサイド・キックにゴール右ポスト僅かに寸餘の強敵を放つ、惜しくも得點に至らなかつたといへ、正に驚嘆目すべき快技だつた。

このころからW・M・Wが戦局を支配し始め、三十三分には得點機械の名を譲られるR川本が、R I西田からの縦パスを二、三步ドリブルして敵を躰し、無難作に第一點目と同様得點を得る。關學は好機の供給者であり決定者でもあるR野澤が、相手方後陣の一の出足を持つR末岡に緊縛されて振はず、ために火線音を潜めて空しくハーフ・タイムを迎へる。

後半戦に入つてからの關學は、俄然勢を盛り返し、僅く四十五分間は壓倒的地位を占め通した。前半戦には漠然と不満や期待外れを感じさせただけで、具體的には暴露しなかつた相手チームの缺陷が、エンドを風下に換へてから破綻を見せ始め、關學側に集ひした

※左のページへつづく

加茂兄弟のどの妙技は

だ。W・M・WのFW川本が、巧緻なパスワークも依然として観る目を眩ませた。けれどもこれを帳消しにする様な大きな缺陷が数へ上げられた。

先づFW線は3FBシステムに不可欠の要件たるW型を探つてゐない。両インナーはこの場合半ばHBの役をすべきであるに拘らず、後陣から遊離して味方の防禦に重荷を負はし、延いてはFWFDを乏しくさせてゐる。OFは已むなく前方に残つて、常にゴールを照準すべき任務を放棄し、自ら球を求めて後退し、その結果、前線の動きがバラバラになり、RWを除く四人が右に左に移動して、相手を惑はすよりも味方を攪亂してゐる。

一方關學は四分バック

からの長送球を受けたLW梅園が一気に切れ込み、OF、RWの

球は巧みに操られ、絲を引いたやうなパスが續くが、いはば無目的で殆んどゴールへの道を開拍し得ない。それに、球に對する執拗さが足りないし、ショットパスに膠着してサイド・チェンジがない。センターリングすら稀にしか行はれないのだから、攻撃の成果を期することは無理だ。

W・M・Wの決定的機會は、僅かに三十七分L加茂兄弟のセンターリングを、新人RW渡邊がフリーでしかもゴール直前で迎へながら逸した唯一つに止まつた。他に特筆すべきは、更に兩三回繰返された加茂兄弟の見事なドッキング。

しかし、今少し策を施したら、更に戦局が有利に展開しなかつたらうか。例へば風に乗つて大きくウイングに渡る球は、殆んどノーマークで收められた。これに續くクロスパスも最も有効な攻め手の一つだつた。しかも攻撃の口火をこゝから切らせようと思圖してはゐなかつた。

火線のリーダーOF野澤を攻撃の據點にしようとする戦法にも全然反對するものではないが、それならば、その足許に縦パスを送る

小見出しは本文と兼ねている

竹腰主審はテクニカル

なものを除く他のフアウルに對して、現はれた結果もだが、むしろプレーヤーの意思一故意なりや否やを重視した様だつた。これは當然のだが、關學はこれのみならず、W・M・Wの二に對し九の反則をとられ、その失點の一もこれに本づいた。見解が餘り神経質などの評も一部にはあるらしいが、私はその綿密な觀察力、正確な判断力を高く評價すべきだと信じ、名レフェリーとして推す。

慶應 2²0⁰1 神商大

大谷の活用を誤つた神商大

第一戦の慶應は甚だ好調に見え風上に位置し、非常にスピードのある攻撃に試合を開始した。あるひは近來にない調子であつたかも知れない、これに加ふるに前半三分右近の送球を三宮うけて右に割り込み、一點を先んじたのは必至の得點であつたが、二十七分の二宮ヘッドインの得點は何れかといへば商大GKの守備力の狭さから來たものと観る。商大GKの弱さは従來商大それ自體の評價を甚だ低くするものであるがその粉骨碎心の努力は大いに賞すべきである。このハンディキャップを計算に入れないでも、商大の

商大は元來守備に勝れた

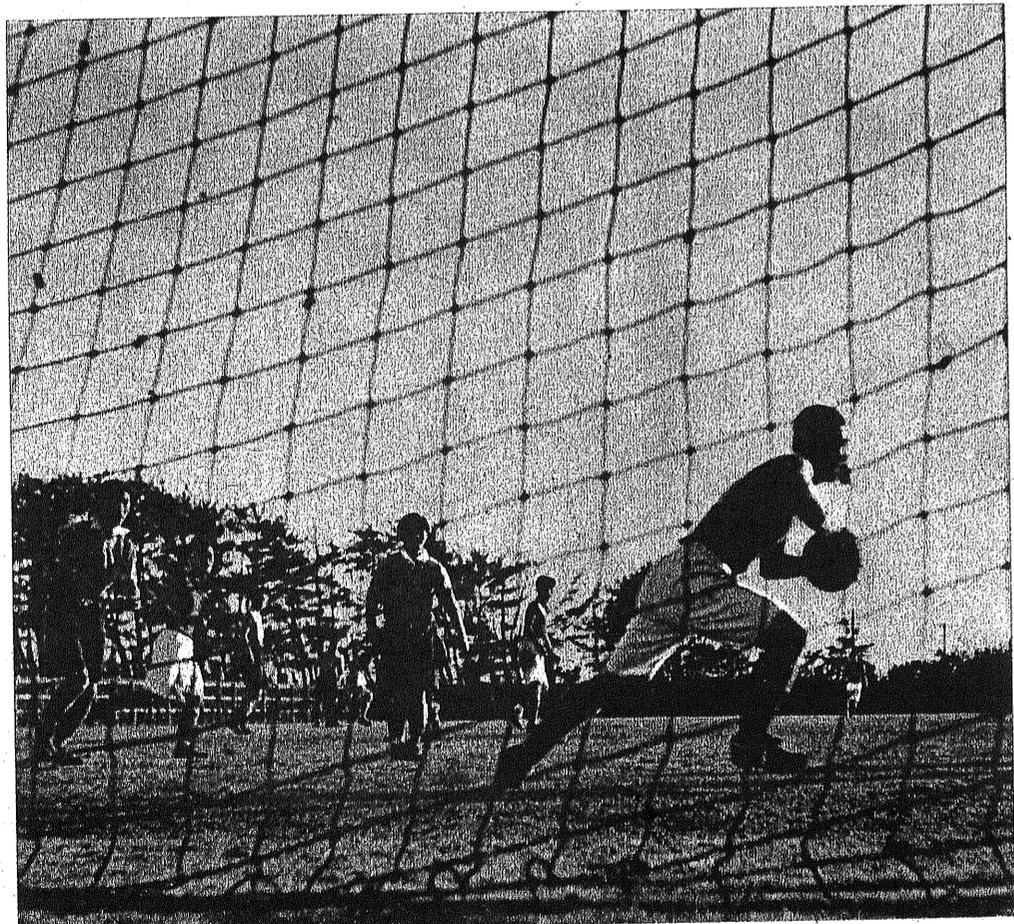
選手を待たず、たゞ大谷を中心とする商大後陣を、あれだけのスピードを持つ慶應が前半二點後半僅かの機會にゴールにせまつたに止まり、ハーフ以下が防備に主力を注ぎざるを得なかつたのは、なほ慶應それ自體の攻撃が鋭い割に、コンビネーションの壓力に缺くものがあるためではなからうか、強きが上に再考を要する次第である。單に鋭く動いた結果この疲勞の集積が、後半における神商大の壓迫となつて現れたと觀せしむべきではあるまいかと思ふ。な

主將の大谷によつて意外

に統一されたチームである。フオワードのパスの受け方及び受けた後の出方の良さにおいて見るも、また寄せに移る過程を吟味して見るも、前に試合をした關學よりも優れてゐる。關學も好調でありつたやうであるが、送球は何れも止つたパスであり、受ける方も停止間に球を處理しようとし、その結果は防禦制を利し一見速い線に見えながら、單線的な流動性を缺いた攻撃的企ての繰返したに近いの比しても數等高く評價すべきものである。即ちチームとしての良さを多分に持つものといへやう。若し、その間の改良が關學に採り入れられてをつたなら、關西リーグの月桂冠は依然關學が月旗の下を去らなかつたであらう。

見劣りする戦績を残すの

結果を招來したのである。元來大谷の様な個抜けたゴールゲッターが存し、またそれが唯一に近いものである場合において、商大の採るべき戦法はこれを極度に活用し、他のプレーヤーは努めて鎗石となり、大谷にゴールゲッターの全機會を確保せしめるの二法あるのみである。しかるに商大フオワードはこの點を輕視したる觀がある。平素大谷の最もよき補助者たる前川ですが、大谷を生



慶應CK津田君が神商大の攻める球を好捕しブラインド・サイドに脱れんとしてキックする刹那

※左のページへつづく

※右のページからつづく

かすことを忘れてゐたやうであ
る。それが有らぬか、大谷は自
ら難境の打開に努め、しばしそ
の位置を變じ、かへつて手足ら
ずの寄せを演じ、あたかも好機を逸し
てしまつた。

英蘭リーグ第一部エヴァートン
F(英蘭國陸軍軍の名)がデイキ
シー・デーンに、全部のプレイヤ
ーがナースとしてパスを集中し、ゴ
ールゲットせしめてゐる極めて明
白な極めて単純な戦法を採つてゐ
る事實を見ても、この間の方策は
自ら明かなものがある。この觀
念上の誤謬は、本試合における商
大最大の敗因をなすものといふも
取て過言ではあるまい。

後半における

神戸商大の

回復は非常なものであり、全員
の好協力に試合を有利に進めたが
ミッドフィールドより寄せに移る場
合に無暗と焦り、加ふるに慶應の
バックアップが多数なるに及んで
往々にこれ等によつてしまつた
感がある。僅かに活動意に満た
ず中央に位置を移した大谷が、四
十分後陣よりのロビングをヘッ
ドして一點を回復したが、追撃遂

に成らず長恨を呑むに至つた。

なほ附記しておきたいのは、試
合中に一兩回見たるこの慶應
右近の果敢なるゴールキーパーへ
のチャージで、たとへそれが反則
をとられたとはいへ、正當なる合
法的チャージならある諺見のも
とに行はれなくならんとする本
ンズンの實情に顧みて、甚だ面白
い問題だと考へられる。即ち大日
本蹴球協會審判統制委員會の見解
によるも、正當なる體當りは、こ
れを許容するところのものであ
る。従つて右近のチャージが視る
角度によつて多大の疑問を有する
限りにおいて、これ自體を採り上
げること少時おくれも、ゴールキ
ーパーは如何なる場合におい
ても

チャージし

得ずといふが

如き考へ方を、此際一掃して正
當なるチャージを研究し、體當り
技術の發達を志し、ゴールマウ
スにおけるフレイに最後までプレ
イする蹴球本来の面目に立ち歸る
べきであらうと考へる。



ハーフトタイム、神戸商大の作戦

武藏高校優勝

高校蹴球評 工藤孝一

日本人としては十分な體格、巧妙
なるドリブル、可成りなシュート
イングレンジを考へる時、相當な
體格を持ち、運動神經の發達した
いはゆる勘の良い選手を正しい見

解の下に十分に養成して、來るべ
き東洋大會およびオリンピック大
會を一つの目安とする蹴球國策の
實現に願ひを寄せらるべき。

東京、京都兩帝大主催の第十四
回全國高校蹴球大會は、順例に依
つて一月一日より六日關東都府
公園運動場で開催された。参加廿
四チームの熾烈たる意氣と熱、
満々たる闘志を盛つた肉弾戦の展
開と……本大會特有の穿鑿氣を醸
らして蹴球界一九三七年年度の曙
鐘を打ち鳴らした。

今その戦績を顧れば、戦前、關
東高専の第一位たる一高ととも
に、優勝候補の最前線に擧げられ
てゐた前年の覇者六高が、一回戦
で東高にもくも敗退するの番狂
はせを演じ、續いて二回戦にはこ
の金的賞の東高が、新興東京府立
に押へられて千仞の功を一獲に缺

| | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 武藏 | 八高 | 浦和 | 新成 | 五高 | 水戸 | 四高 | 成城 | 東府 | 早高 | 北高 |
| 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 2 | 2 | 0 | 0 | 3 | 0 |
| 武藏1 | 武藏1 | 武藏1 | 武藏2 | 一高1 |
| 武藏1 | 武藏1 | 武藏1 | 武藏2 | 一高1 |
| 武藏1 | 武藏1 | 武藏1 | 武藏2 | 一高1 |
| 武藏1 | 武藏1 | 武藏1 | 武藏2 | 一高1 |

最終日の武藏對早高戦は、誰
しも早高の優勝を豫期してゐた
が、武藏の全員が協力一致した精
神力は、技術の劣勢を完全に克服
し、二對〇といふ番狂はせの快勝
を博して初の制覇を遂げ、早高は
強敵打破後の疲労と氣分の緩みか
ら惜くも覇権を逸した。

年々技術低下の一方をたどるとい
はれて、各方面より多大の關心を
持たれてゐる本大會は、今年度より審
判法の改正改革によつて、打開の道
を講ずる事となつたから、粗雑に流

しかしながら三年後のオリンピ
ック大會を背負つて立つべき素材
を養成する本大會にあつては、意
氣も勇気も出来ない一要素だが、
進歩過程の順序として、身體の柔
らかな高校時代に正しい技術を十
分に延ばさしめる事が、最も重大
な事であり、この點から見て今回
の主権者側の新方針は誠に妥當な
ものといふべく、因襲打破の斷
行に對しては心から敬意を表した
い。

員の満々たる闘志、小粒ながら何
處といつてムラの無い編成がその
強味とするところであり、これが
OH渡邊の卓越した好技と、巧み
なりドに依つて制覇の偉業を樹
立したといつても過言ではない。
それにFW五人が良く均衡を保つ
て適度に球をキープし得る能力を
有し、またバックスがアタック、
タックルに重心の安定と體當りの
鋭さを持つてゐたことは、その特
色として擧げるに足るものであ
る。しかし最後の一戦まで常に
ゴールを死守したGR守川、巨艦
を利する鋭い割り込みを敢行した
OF岡部の隠れたる功績も見逃し
得ないものである。

一高は、對早高戦に全力を注いだ
が、その特色とするバックスの長
脚法は、早高のストリーパックス守備
法に喰ひ止められ、徒らにゴールキ
ックの数を増したのみで敗退した。
LW大谷、OF金川を頼みとして速
攻を焦つてゐたやうだが、インナー
に技が十分あつたから、武藏の如く
この両者に今少しキープさせたらと
惜しまれた。バックスのOH佐竹、
LB大山は超等級選手として坐々た
るものであつた。



原若が蹴り込んで一點を先取

ユーモアを観戦記



X 寒い。
Y 寒い、寒い。
Z 寒い、寒い、寒い。實に寒い。
X もういいよ。そんなに合組を打たなくとも。
Y いや、もう少しはしてくれ。今日は全く寒い。
Z 冬が正體を現はしたんだ。
X 朝日新聞に敬意を表して。
Y どうして?
X 今日は招待球だから、それで冬も正體を。——
Y それは空しい。
X でなければ、陽氣の神が今日の試合を心から喜んでるんだとほくは思ふ。
Z 寒氣(寒氣)がはげしい。——
Y といはうと思つてるんだらう。
X おい、そんなつまらない話は止して、今日の大試合の豫想でもやらうぢやないか。
X いや、それは止さう。
Y まだ、洒落か。
X さうぢやない。豫想をやるも観戦の興味が半減する。ほくは白紙の氣持で観戦したい。
Y おい、おい、でも豫備知識は必要だよ。W M Wにはオリンピックの各選手が数人あるとか、神商大のF W、前川と大谷とは實にエンタツ・ブチャコ以上の名コンビであるとか。——

早大のタツクル 角田 不二夫



X いや、さういふ先入観念に禍ひされて、裁きに公平をかきたくない。
Y おい、裁判ぢやない、サッカーだよ。君、試合が分かるか?
X 失敬なことをいふな。分るよ。向ふにスコアー・ボードがあるから。
Y おい、おい、駭駭を見に来たんぢやないよ。本當にサッカーつてものを知つてるのか?
X 知つてるとも。サッカーほど近代スポーツの精神に適つたものはないよ。——君は近代スポーツの精神は何だと思ふ?
Y 逆襲だね。近代スポーツの精神は、さうだな、ジョン・ラスキンは頭腦の戦ひだと規定してゐる。
X さうだ! しかり而して、サッカーほど頭を使ふ競技は他にない。ヘッドインはサッカー獨特のものだ!
Y また、やられた。
Z やあ、いよ、試合開始だ。W M Wが右側のゴールを決つたな。
Y どうして分る?
Z ゴール・キーパーを見て一遍に分つた。
Y あの細そりとした、背の高い男——?
Z さうだ。ほくは一目見て、あの人は早稲田か、でなければ法政に違ひないと思つた。
Y 法政? どうして?
Z どうしてつて、あの體格から察すれば、早稲田(稱せた)か法政(細せえ)より仕方がないよ。君も餘り當にならん。あれが有名な、オリンピックで頑張つた佐野君だ。
X やあ、開始のホイッスルが鳴つた。やあW M Wの加茂兄弟、

Z 最近から悪いぞ悪いぞ。
Z 敵方を騙しようといふ強敵だな。さあ来い來れと構へてゐる。實に名は體を現はしてゐるね。
X どうして、加茂といふ名前が——?
Z 加茂と綴る前に、O M E・O Nといつてくれ。
X なるほど。——ああ、ボールが神商大の梅園に渡つた。ああどつちも足跡の悪いのが擲つてゐるな。
X だが、ゴール・キーパーといふ地位は氣が長くないとやれんね。
X 君はゴール・キーパーといふ意味が分らんか。
Z 分つてるよ。ほくは學校ではいつもゴール・キーパーだつたよ。君やつたのか。
X いや、學校の成績がいつもゴール・キーパーだつた。
X といふと——?

Z いつも危ないところで喰ひ止めてゐた。
X はつはつはつ、なるほど。
Y おい、喧しいぞ。黙つて見とれ!
Y の一喝でX Z、口をつぐむ。沈黙の中に九十分経過。試合は二對二で、W M Wに凱歌が上つた。
X 白熱戦だつたね。
Y ほくは神商大が今日の試合を目標に、血の出るやうな練習をしてゐるのを見てゐるんで、或ひは……と思つてゐた。
X でも、凄じい角の體格だつたよ。しかし、神商大に今一步進志が欲しかつた。進二無二、押し切つてない儘があつたな。
X 進二無二といふところかな。
Y 驚ないひ方をするなよ。
Z しかし、ほくはいつもサッカーを見て感心するのは、どんな熱狂的プレイがあつても、決して野球のやうに三拍子拍手なんか、スタンドに起らんことだ。
Y それは當り前ぢやないか。
Z どうして? 寒いから腹ろ手をしている、その故かい?
Y いや、サッカーぢや、手を使つたら反則だよ。
Z あつ、さうか。
X さうともさ。手を出したら負けに決つてるよ。
Z それ、喧嘩だらう。
X うつかりしつた、喧嘩の話だ。

Z スキーとかスケートとか。
X 何故、スキーやスケート、冬にやるんだらう?
Z 夏は雪や氷がないからさ。
X あつ、さうか。これは無理だ。
Y おい、おい、はつきりしろよ。皆、笑つてるぢやないか。
X 随分見物人が來たね。いくらみると思ふ? 當てつこしよるか?
Z いや、見物人より、次の試合にどつちが勝つか當てつこしよる。
X よろしい! ほくは神商大だ。
Z ほくは慶大だ。
X 神商大は去年暮の東西優勝對抗試合に、早稲田の銅鑼を見事に抑へたし、この試合は完全に神商大のものだ。
Z いや、慶大のものだ。
Y さあ、試合開始だ。ホイッスルが鳴つた。だまつて、二人とも見てゐるよ。
Z あ、ほく、ちよつと失敬してW・Oに行つてくる。
X ははん、彼奴、こはくてやうみてないんだな。……あ、あ、あ、神商大マキキングが足らん。あ、慶大もどにシエーとして一瞬か。……君、ほくもちよつとW・Oに行つてきます



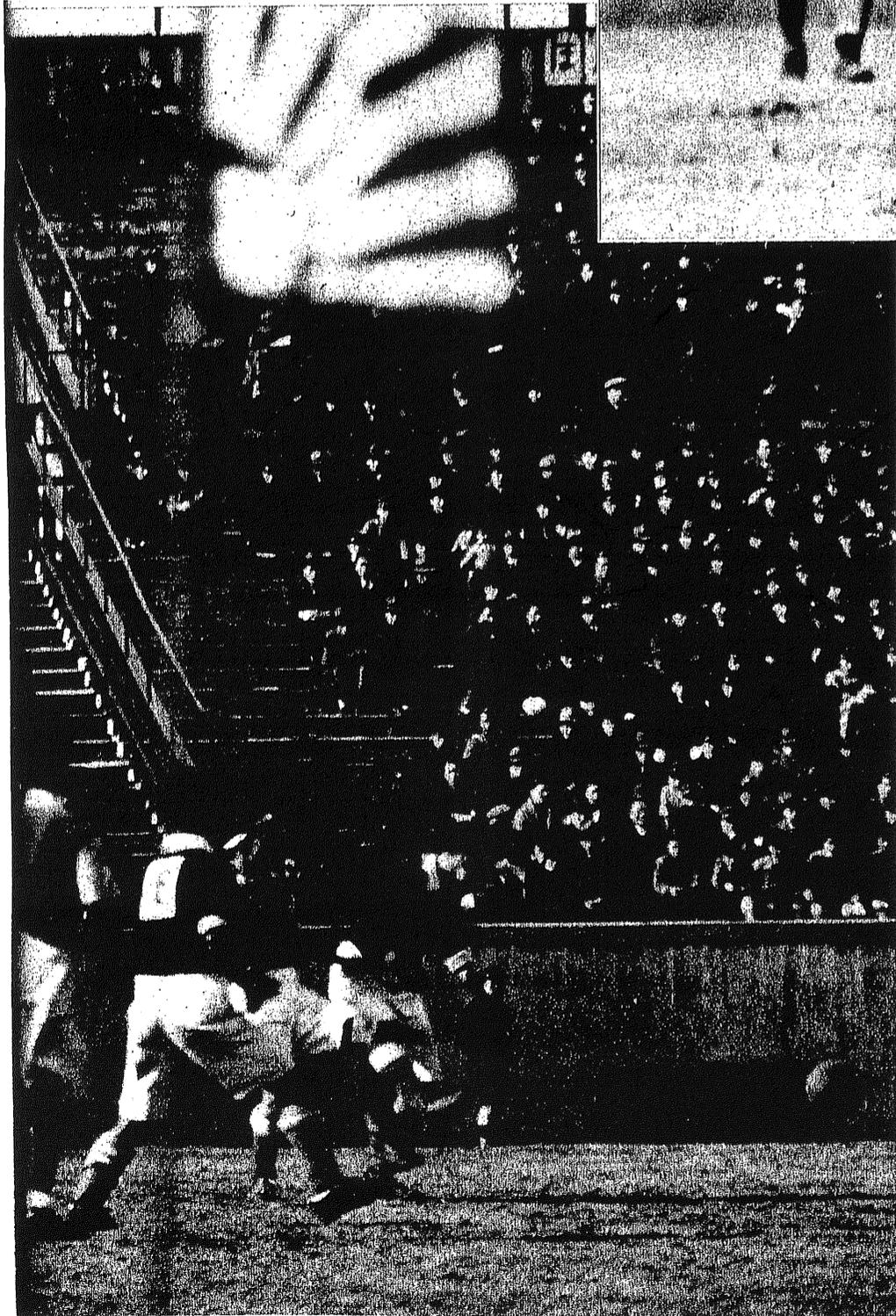
Z 可愛いサッカーファン
X 彼奴も到頭逃げ出したつた。これでゆつくり試合がみられる九十分経過。二對二で慶大の勝利に歸した。Yが外に出るとX Zが併せて、傍によつてくる。
Z どうやつた?
Y 神商大の奮戦、ものすごくつたよ。タイム・アップ直前の大谷君のみごとなヘッドインでの一瞬、君にみせたかつたよ。
Z どんなもんだい!
X さうか。ちや、一瞬で慶大の負けか。
Z お氣の毒だつてね。
Y はつはつ。お氣の毒だとは實は君だよ。ノー・サイド間ぎはの奮戦はものすごくつたが、スコアは二對二で慶大の勝ちだつたよ。
Z えい?
X すまんね、君。
Z さうか、残念だな。
X 口惜しいだらう。サッカーの規則通りの口惜しがり方だよ、君の氣持は。
Z といふと——?
X 手は一切使へないから。——分るかい?
Y 地獄がふんで口惜しがる! といふ洒落だよ。
Z ふむ、さうか。
X まあ、ゆつくり家に歸つて、朝刊の批評でも讀むんだね。——アシからず!

Z さうだ。ほくは一目見て、あの人は早稲田か、でなければ法政に違ひないと思つた。
Y 法政? どうして?
Z どうしてつて、あの體格から察すれば、早稲田(稱せた)か法政(細せえ)より仕方がないよ。君も餘り當にならん。あれが有名な、オリンピックで頑張つた佐野君だ。
X やあ、開始のホイッスルが鳴つた。やあW M Wの加茂兄弟、

學大四西東

學關一俱大早

ノ頭の攻防戦—前半早大ゴール前の混戦



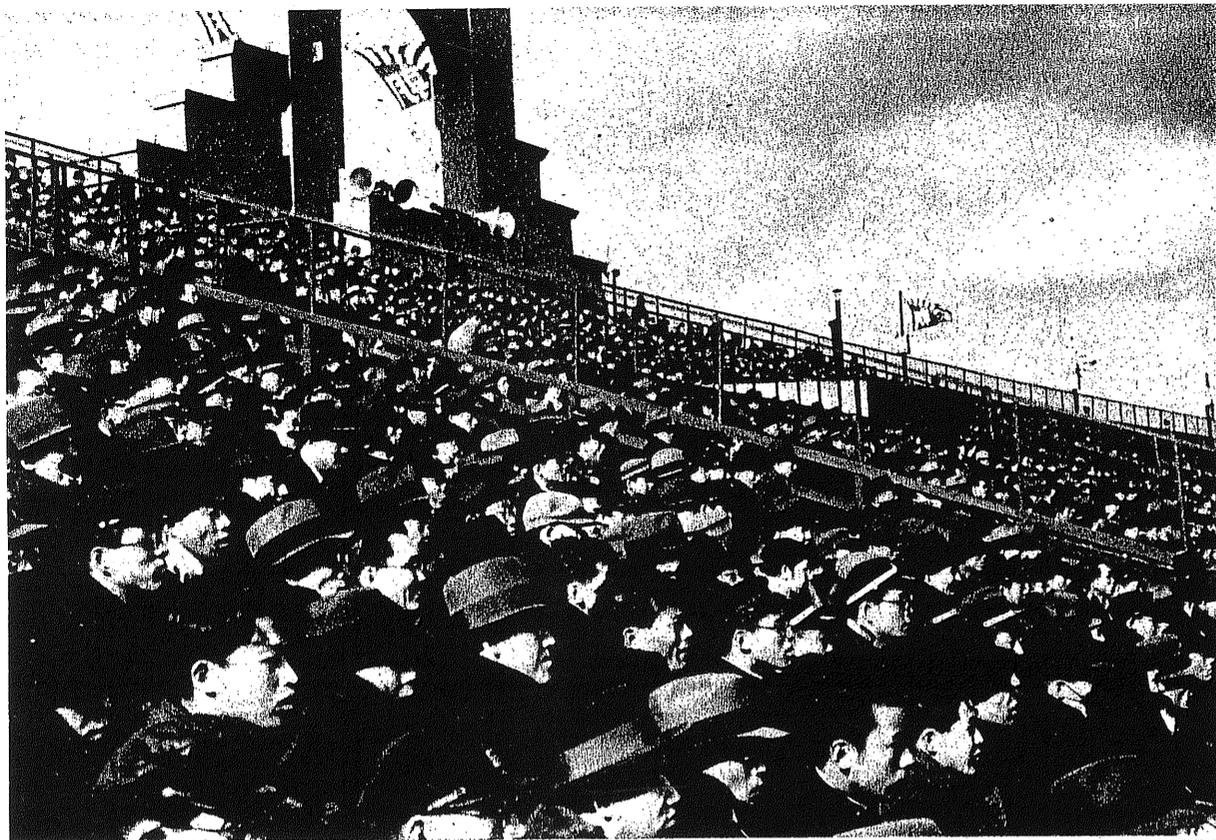
後半戦の一場面—中央附近で
關學田島君味方にパスす



ムーチ大早たつ勝



る成ルーゴの大早



衆観大の日のそ

観盛の球蹴

大商神一大慶



る外にか僅がだい防にルクツタBH大慶

慶大ゴール前の競り合ひ



前ルゴ大慶=チンピ



賞受のマーチ大慶



蹴球 全日本



選ばれた第一人者



さすがが權威者の考察 首肯出来る選出

蹴球界では未だかつて試みられたことがなかつただけに、各方面の權威者選や現役選手諸君が、どんな風に考へてゐるか？この疑問符の解決に對して非常な興味と期待をもつて楽しみにしてゐた。ただ、ここで考慮のうちにに入れて置かねばならなかつたことは、關東の定住者は關西を、關西のものは關東の事情に比較的強いといふ點であつた。ところが結果は、これらの相變を一掃して東西から大體首肯し得る人選を得たことは欣快に堪へない。

ノオワードとか或ひはゴールキーパーなどの動きは、直接得點に影響をおよぼすポジションであるから、その優秀は比較的容易に判断し得るので、推薦の票數はさして分散しなかつたが、これと反對に下積み形となるハーフ或はF Bでは、その動きが判然と断定し兼ねるためか、候補選手が多數飛び出す有様であつた。例へばL HおよびH Hなどの如きは、各十五人づつの選手が選ばれてゐた。

何れにしても、今回の企てにより大方の傾向を知り得たとともに、向後の動向を下する上において多分の示唆を得たことは、斯界にとつて確かに有意義なことだつたと信ずる。次點者となつた候補れを擧げて見ると次の通りである。

佐野 理平君



宮部 芳男君



竹内 悌三君



種田 孝一君



木下 勇君



三田 英夫君



大谷 一二君

加茂 健君

川本 泰三君

西邑 昌一君

市橋 忠治君



L W 加茂正五(早大、14票) L T 前川(神商大、40票) C F 大谷(神商大、26票) R T 右近(慶應、20票) R W 朝崎(慶應、16票) L H 松丸(慶應出、15票) C H 右近(慶應、10票) R H 中西(神商大、14票) L B 栗原(京大、28票) R B 市田(早大、12票) 石川(慶應、12票) G K 上吉川(關大、42票)

(三宅三郎)

ラグビー 選手

ラグビー

(回答總數百廿六)

- LF 山地 (早大 52票)
- CF 西垣 (早大 50票)
- RF 松木 (早大 72票)
- 2RL 大野 (早大 50票)
- 2RR 山口 (早大 84票)
- LB 米華 (早大 108票)
- RB 新島 (早大 80票)
- OH 山本 (早大 40票)
- S 伊藤 (早大 76票)
- SO 林 (早大 36票)
- LW 北野 (早大 60票)
- LC 鈴木 (早大 92票)
- RC 川越 (早大 106票)
- RW 山野 (早大 26票)
- FB 井川 (早大 106票)

蹴球

(回答總數百十四)

- LW 大谷 (神大 88票)
- LI 加茂健 (早大 42票)
- CF 川本 (早大 84票)
- RI 西邑 (早大 56票)
- RW 市橋 (慶大 59票)
- LH 三田 (關大 16票)
- CH 木下 (神大 60票)
- RH 種田 (東大 30票)
- LB 竹内 (東大 42票)
- RB 宮部 (關大 34票)
- GK 佐野 (早大 50票)

冬季競技の雙壁である「蹴球」ならびに「ラグビー」は、ともに過般東都で行はれた東西對抗試合をもつてひと先づシーズンの幕を閉ぢることとなつた。本誌はかねて記事に、寫眞にこれらシーズンの華たる斯技の普及發達に貢獻するところあつたが、今回さらに兩球技のシーズン・オフを記念するため、それらの協會役員、先輩、現選手等の權威者を煩はし、全日本チーム

の選定推舉のことを委囑することとした。もつとも兩球技を通じてフオーメーション並びに戰略的な立場からすれば、この種の選拔は極めて困難、かつ矛盾の多いものではあるが、幸ひ先輩諸氏の坦懐なる回答に接し、こゝに發表の機會をえたことはひとり本誌の欣快とするのみならず、過ぎ去りしシーズンを顧る總決算として全日本ファン諸氏に贈る絶好の記念たる事を信ずる。

※右ページからつづく

れば、關西側は物凄い精神力を以て、一層の方面を克服したに反し、關東側はグラウンドの悪コンディ

ションの爲に、その質的の困難を増加されてきた。この邊に、試合内容と、残りにもかけ離れた四對零

といふ大差の現はるゝ理由が存するものと考へられなからうか。

蹴球フアンの観戦對話また聞き

?? X・Y・Z

A……關西はスコアがたわい、關東と關西と試合つて、關西が勝ち得る自信がある競技は、まづ蹴球といふわけか……

B……大抵の競技は、問題なく關東のためにシテやられるが、まあ對等近くまでやり得るものは、蹴球くらいのもぢやないだらうか、一時關大の野球部が西村、北井、御園生、黒澤、大橋などの優秀選手がいた黄金時代に、相次いで西下した關東の諸大學を貢がして、關西のフアンをヤンヤと興奮せしめたこともあつたのだが、しかし關大が一人頭抜けて強かつたのみで、これに従ふものがなく結局後援つづかずの形となつてしまつた。

A……今度の東西選抜試合の豫想では、關東側の連中は自分の勝にきまつてゐるさ、と、たかをくくつてゐたものが多かつたやうで、ひどいことになると思つてゐたのもあつたよ。

B……それは、關東側の立場から見れば、東西カレッジ優勝校の争覇試合や朝日新聞の招待大會で早慶の兩大學が關西の二強に勝つてゐる上に、關東は遊へ撃つといふ地の利をもつてゐるので關西恐るゝに足らずと、うそぶいたのもある程度首肯出来ないことはなかつたが、それにしても4-0と對抗試合始まつて以來の大きな開きで、關東がベタ負けしてしまつたのに對しては、關東最良早慶の餘地なしといつたところだね。

A……試合終了を告げるホイッスルの鳴つたあとで、關西側監督の「君に「僕がつたね」といつたところが、王君曰く「まだ一點足りなかつたよ」との返事だ。「關東に一點入れられる積りだつたのか」と反問したところ「なに、五點だよ」との心臓の強さにはこれまたあきれ終つたよ。

B……とに角、關西も相當強氣であつたことは事實だね、たゞ懸念されてゐたのは……關東も同じだつたらうが、市橋君と一人だけ0-0選手で、ほかは若い選手ばかりだつたことだ、試合が始まつて見ると、關東は遮二無二に關西を押し捲り、駒崎君あたりから頻りに關西ゴールを襲ふので、試合は矢張り關東のものになるのか、といふ豫感が浮んだものだつた。

殊に、前半の中頃だつたが、關東は關西の反則チャージにペナルティ・キックを得たときなんか、これで試合の均衡が破れるんぢやないかとさへ思はれたが、播磨君は餘り慎重に構へ過ぎたのか、G五上吉川の真正面を衝いて一點を拾ひ損ねたのは……結果論になるものか知れないが大きかつたね、關東はここで一點リードすべきところでも、もしさうなつてゐたら、勝運は或ひは位置をかへて、關東が観衆を擧げてゐたかも知れぬよ

後半の初めに關西が一點を加へて二點のリードしたときでも、まだどうなるか分らなかつた程だから

A……關東の敗因の主なものバツクの布陣がシツクリと合つてゐなかつたからではないだらうか

B……なるほど、コーナー・キックから二點と、石川君の蹴り損ひから自派の一點を奪はれたところなどから見れば、さういへないことはない、それにしても、關東のフォワードには川本君を中軸として播磨、西島、駒崎などの古強者に、最近のあたり屋二宮君などがあつたから、一點もゴール出来なかつたなんて、FWにもその責は大いにあると思ふね、ヨーロッパの話によると、乾燥した地方の南歐では細かいパスを用ひられることだ、それからすると當日のあの泥濘の悪いコンディションでは關東式の細かな動きは非常な損だよ、時に應じて大きなパスを用ひるのも確かに得策だ

A……それでは關西の勝因は？

B……まづ第一に、バツクの健闘だね、ゴール・キーパーの上吉川君は實に良くやつてゐたよ、また今シーズン急に喧しくいはれ出した、スリー・バックス・システムも、完全に近頃までこなしてゐた。前川、田島の両インナーが深過ぎると思はれるくらい後退して、W字型の態勢をとり、それにOのHの木下君が川本君をガツチリとマークして、完全に近頃まで川本君の動きを潰してゐたのなどは

好戦の主因だつた、ハイフあたりで、よし抜かれても、更にその後方に他の選手が控へて、二重の垣を作つて徹底的に潰してゐたことも成功してゐたな。

A……關東のO日松丸君も、關西の大谷君に、始めから終りまでクツキ切りだつたが、木下君が川本君を抑へたやうには行かなかつたね、見てゐても氣の毒な位だつた。

B……松丸君は大谷君に比して上背もなく、又走力も可成り劣つてゐた様だから、一對一で向ひあつたら松丸君の勝てる筈はないから、結局オジシヨンの問題になつてくる。松丸君は勘のよい選手でよく動き廻つてゐたのは認めるが松丸君が追ひ込んだ後に、他の選手が大谷君の進出を豫見して、さうに壁を作ることが足りなかつた。

A……關東の惨敗は、人の和を得てゐなかつたからだとの聲をチヨコく聞くが？

B……確かに、その缺點もあつたやうに思はれるね。とに角東西の優秀選手を集めた試合だから、もつと試合に變化があり、面白いだらうと思つて懸けたのだが、全く期待外れで勢がなかつたよ。

A……關東の惨敗は、人の和を得てゐなかつたからだとの聲をチヨコく聞くが？



危機を脱す 後半二十八分、關東右隅蹴からの攻撃を(ディング)で防ぐ關西軍

たつ飾を後最後のシーズン 戦球蹴抗對西東



タツクル！ 前半三十四分、關西CF大谷に向つて關東C H松丸がタツクルする刹那



關西軍のゴール・イン 後半二十六分、關西CF大谷左側に迫り、H前川にパスして樂々得點



ヘディングに挑む 關東二宮と關西藥原兩選手



優勝した關西軍 (前列右から) 小野前川 木下、三田(後列同)大谷、藥原、市橋、上吉川、宮部、中西、田島の諸君

準備第一 年を終へ

わが蹴球界に望む

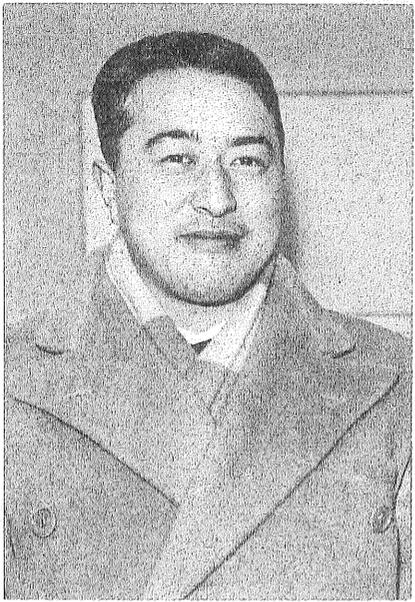
東京大會制覇の鍵は？

田邊治太郎

世界の諸國を東京に迎へるに當り、わが蹴球界は國家總動員的覺悟と用意をもつてこれに準備せなければならぬのを考へるとき、殘る歲月は餘りにも短いのを嘆ぜねばならぬ。そして協會諸機構の強化、人的要素の結合などは別とすも、政策的には試合の増加、ことに大試合の増加を極めて必要とする。

國內的競技の向上に關しては先づ東西選抜對抗、東西學生對抗、選手權大會、東西兩學生リーグ、或ひは朝日招待などにおいて參加諸チームの精神的ハリキリと熱戦を従つてこれに對する周到なる研究と猛烈な練習とを必要とするであらう。

◇
ドイツへ行つて感じ、オリンピッククにおいて更にその感を深う



筆者 田邊治太郎氏

し、更にイギリスの蹴球を観るにおよんで判つたりと感した事は、日本の蹴球が軌道を外れてゐなかつたといふことである。恐らく現今の最高水準であらう英蘭プロリーグにおいてこれある哉と思つた事は、形こそ小さけれ、わが日本にも有する理念であり、技術であつた。なほその上に我々が持つ精神的な良さ(もちろん缺點短所は多々あるが)と、練習方法の良さを發見するにおいて甚だ愉快であつた。従つて我國蹴球の進むべき路は新知識を研究吸収し、在來の良さを絶對的に助長せしめることにある。

大正十一、二年ごろにおけるショットパス・システムの使用から、全員の運球より攻撃を誘導せんとする東京帝大の連覇時代、これに對する感應の「早いつづし」の

攻撃における問題は甚だ多いが、川本(皇大)大會(神商大)の示す寄せの切れ込みの美しさ以外には、チームとして早稲田の問題の緩徐調に幾多の期待とも疑問符ともつかぬ氣持を抱いてゐる。あれで樂戰第一主義のつもりであるなら不可、多くの寄手を含ませようとする研究途上のものなれば、最も割目して待つべきものであり、變化の多い攻撃があの緩徐調に含まれて來ることを期待する。

別の場合に、いへば、あの緩徐調を一應採り上げて研究し、含み手の多い寄せは如何にして組成するやを各チームは研究すべきである。

防禦における重大問題として「2F・Bか、3F・Bか」の問題がある。3F・BがU・H後退による攻撃人員の減少のために、蹴球を退化せしめるとの説は一應考慮するとしても、元來戰術は現實の事實がこれを規定すべきものである以上、將來豫想されるべき相手國チームが如何にもあれ、一應は強力なるF・Bを考慮に入れる上は、これに對する策として3F・Bの防禦に關する研究を進めて置く必要はあらう。そしてオリンピック・チームがこれを

學んだのは歐洲であり、この戰法を採るは北歐に多く、その根柢は英國であることにおいて、これが中心的理論にや、研究不十分のものがあるやうに思はれる。

本來この3F・Bシステムはオフサイド・ルールの改正によつてもたらされたものであり、從來敵ウィングをマークするはハーフか、バックかと同様問題であつたものが、敵F・Bをオアワードの強大すると共に、これに對するU・Hのマークから自然翼ハーフ對敵インナー、バック對敵ウィングの陣形組成より招來されたものである。從來目に觸れ難きをなすを聴くも、3F・Bゲームは多く單にU・Hの位置および他の兩F・Bとの連繫が問題になつてゐたやうである。またこれを採用したチームにおいても、これ以外に誘導されて來る問題は等閑に附して來たやうである。従つてU・Hを後退せしめた中央陣における空隙の問題は解決されてゐなかつたのである。

元來英國プロにおいて個人技術の高さに伴ふ活動範圍の増大は、深目のW陣を形成し、2、2、3、1と最も廣範圍に全場技場を人的網によつてカバーし、中央陣に遺憾なからしめてやり、全面的布陣の研究をまつてこそ3F・Bシステムの研究は完成されるのである。

なほ、防禦においては一時閑却されてゐた「追ひ込み」を研究し、防禦における能率を極大するの要があり、これは2F・Bまたは3F・Bの何れにおいても大いに練習する必要がある。

個人技術的不満はオリンピッククにおいても痛感したところのものであるが、單にチーム・ゲームに良いものを持つてゐるといふことに満足せず、大いに研究を進めねばならぬ。

チームの良さは、矢張り個人的な基礎技術によつて築かざるべきものである。従つて目的とするチーム・ゲームに必要な個人技術の獲得に對し、練習方法が定められねばならぬ。そして流動性と變化を如何にすればより多く得られるかが問題であり、これを忘れては我國蹴球は今日以上の進歩はない。本當の良さを持つてゐるプレイヤーは極めて少く、絶えず自己以上の敵を目標とせよ、同等程度の相手では別に目立たぬ缺點も、自己以上の敵に對する時、或ひは天候などにより僅かな條件が變るとも、缺點を現はして來るものである。絶えず自己より上の水準を考へて研究なり、練習なりをやらねばかゝる微細な點の進歩は望めず、しかもこの微細な點を克服せねば一定以上の水準を抜くことは不可能である。

また、全面的にはスケールを大きくすることに努め、シュートインゲの距離も練習において引きのばし、これに伴ふ身體の重心の位置の移動状態なども研究する必要がある。

球を受ける場合における動き、いひ換へれば動きながらの球の受け方の不味さは、現今の第一線においても相當見受けられる。良かつた者までその良さを知らずに失つてゆくことすらある。

大體生産的な練習方法により、一應球を得るまでのスピードは増大されたやうであるが、球を得てからの早さは二、三著名のプレイヤーを除く以外多分の未完を嘆かざるを得ない。

球を持つた際に於ける大きな逆へのとり方は、非常な研究を要する事柄であり、果に抜ける敵が抜き切れないのは、多くこの點が完成しないからである。自己以上の敵を考へよ、人的問題としてはU・Fに大谷、川本級を有するとしても、優れたインサイドの養成、およびウィングに對する不満を擧げねばならぬ。フオアワードに過重の研究重點を置かれてゐたにも拘はらず、これは大きな皮肉である。

ハーフおよびバックにおける缺點は、單に技術的に研究が等閑に附されて來たといふに止らず、所要の體格を有するプレイヤーの缺乏して來たのにある。従つてかゝる見地よりしてはフオアワードより所要體格の所有者を以つて至急に後衛の養成に當る事等も、あながち捨てた策でもあるまいと思はれる。

ゴールイにおける水準は、昭和五年東京極東大會以後比較的高い水準に達したと思ふが、近來の競技規則の改正等より大いに保護される點を研究し、外國式の強く早いショットに對する練習を要する、これは反面にフオアワードがかゝる優位に置かれたゴールイに對する研究を一層必要とする結果となる。

大日本蹴球協會においては技術指導機關を常置し、爲しうる限りの機會を利用して選手を集合教育し、その進歩の最大能率をあげねばなるまい。

各地方協會においてもそれ／＼適當の指導機關を設置し、技術的

向上を計ると同時に全日本の活動を圓滑ならしめ、更に進んでは、直接オリンピック選手養成に關係なき中等學校蹴球も發達向上の手段を講じ、或ひは俱樂部級試合の増大練習を計り、もつて全面的に蹴球熱を興隆せしめねばならぬ。

なほ、良い芝生が「よい技術」を生む事を考へると、かゝる競技場の設置も由々しき一大問題であると思はれる。

關東OB蹴球リーグ

帝大O・B連勝

小野卓爾

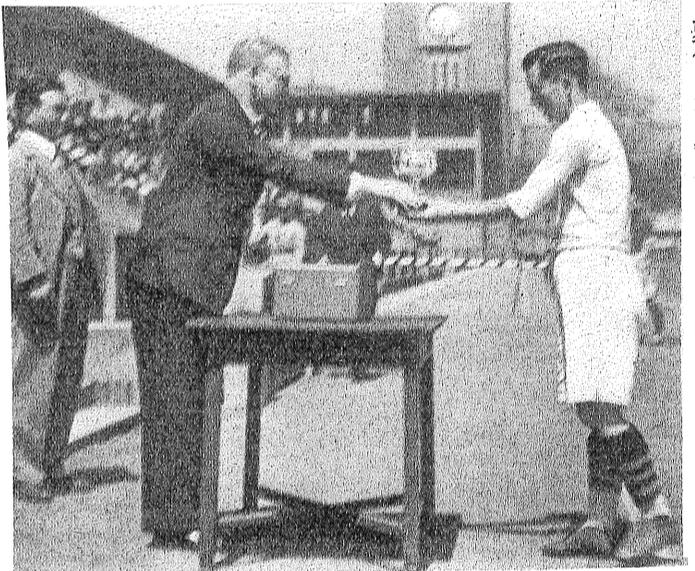
關東OB蹴球リーグ戦は、過日來大球場において行はれ、去る三月七日帝大OB對慶應OBの決勝戦をもって終了した。さすがに決勝の名に恥ぢぬ内容あり滋味に満ちた大試合を行ひ、結局帝大OBが辛勝して前年度に引續き覇権を獲得した。過去七年間のうち昭和八、九年度に慶應OBが優勝せるほかは、すべて帝大OBが優勝してをり、今回で五回目の制覇である。

一位、以下文理大、早大、法政の順となつた。この組における早慶戦は傳統の對抗意識に燃えて前半零對零、早大豫想に反した善闘をしたが後半になつて潰滅し、古縁鈴木サンの奮闘も、ウ下山選手(工藤)の坂田の金時の様な健闘も、野村男爵の「勝ち抜き」の異名も無となつて敗退した。

このリーグ戦は帝、慶以外のチームは手兵不足で、従つて技術的水準も、氣魄、技倆ともに現役選手と拮抗し得るこの二チームに比し格段の相違があるが、多數往年の名選手の出場は、懐古的な興味を呼んでいはゆる蹴球通の人達の間、ゲテモノ蒐集の様な人氣を集めてゐる。だから試合ごとに帝大球場はファンに取り圍まれ、名選手のなれの果ての姿に追憶の微笑を投げ、老いてますます、現役を凌ぐ聲優選手に快哉を叫んでゐる。

リーグ戦の形式は、加盟チームを抽籤によりA、B二組に分ち、各組四チーム間にリーグ戦を行ひ、更にその二組の勝者間に決勝戦を行つて覇権を決定するものである。A組においては豊富なメンバーを有する帝大が壓倒的に大量得点を以て榮勝して決勝戦に進み以下青學、明大、農大の順となりB組においては慶應が全勝して第

一位、以下文理大、早大、法政の順となつた。この組における早慶戦は傳統の對抗意識に燃えて前半零對零、早大豫想に反した善闘をしたが後半になつて潰滅し、古縁鈴木サンの奮闘も、ウ下山選手(工藤)の坂田の金時の様な健闘も、野村男爵の「勝ち抜き」の異名も無となつて敗退した。



關東クラブ蹴球リーグ戦優勝チーム
東京クラブ・ダンロップトロフィーを獲得す(於明治神宮競技場)

慶應對帝大のOB蹴球試合に勝つた帝大チーム



海外ニュース

ピカン選手に鐵槌
オースタリヤ蹴球聯盟は、所屬の有名な蹴球職業選手ピカンに對し、一九三七年二月十五日から向ふ四ヶ年間に、蹴球競技に出場することを禁じた。理由はピカン選手が職業選手規定を遵守せず、二重契約を結んだためで、この斷乎たる制裁は、世界各國蹴球聯盟間にその所屬選手に對し、一大警鐘となつたものとして注目される。

各競技團體の強化方針

明治神宮外布展技協を主催技協團體の施行策如何を窺ふに、何れも海外遠征、外國チームの招致、國內の充實、競技場の獲得等々着目と制覇を目指しての過激なき進歩が進められてゐる。

蹴球

ベルリン・オリンピックで、一躍世界の水準に浮び上つた我が大日本蹴球協會は、本年度先づ組織の整備を眞先にかゝけてオリンピック準備委員會を結成、各部門の活動に依り三年後の東京大會に、輝かしい成績を収めようとして切つてゐる。オリンピック準備委員會は、深尾陸太郎男會長に、總務部、財務部、外事部、宣傳部、設備部、審判部、技術部に分け、各部の活動がそのまゝ東京大會に對する強化準備となるやう計畫されてゐる。

この中で最も主眼としてゐるのは、選手層の強化と國際試合であつてこれは技術部の中の技術指導委員會に依つて行はれることになつてゐるが、先づ昨年度の各種競技界の戦績を基準に、昭和十二年度日本代表チームを二十五名で編成、七月中旬に神宮(豫定)で二週間の合宿を行ひ、

なほ六月には全日本選手權大會があり、九月に入つては五日から二十日までの東京三試合(名古屋一試合、大阪三試合)の豫定で日韓對抗戦を舉行、これらが終わつてリーグ戦シーズンに入るが、このリーグ戦は學生選手にとつて、試合数の多いことと技術的研究により、實力の向上は十分望み得るものであるから、協會としてはリーグ戦も強化策の一部門に入れてをり、リーグ戦終了後再度の合宿を行ふことも計畫されてゐる。

このほか、オリンピック審判研究會を設置し、シーズン始め(三月)と終り(八月)に全國協會より委員を集めて研究會を開催し、役員としての大會参加策も考へてゐる。

球技協は組織委員會で決定された舊射撃場を妥當とはしてゐるが、完成までの代用球場獲得にも乗り出すこととなり、芝生グラウンドの建設に邁進することになつてゐる。

以上が蹴球の今年度における強化策の概要であるが、之等に要する經費は約十萬圓、計畫はすでに着々實行化されてゐる。



蹴球協會會長 深尾陸太郎氏

八月初旬からこれら選手を全國に派遣し、中等學校のコーチに當らしめるところとした。これはホッケイと同様、現在の日本代表第一線選手で、三年後のオリンピックに便する選手が少く、また優秀選手養成には少くとも三年間を要する爲中等學校上級層に目をつけたもので、札幌、阿部、仙台、富山、横濱、名古屋、京都、大阪、神戸、廣島、高松、熊本および東京を中心に、夏季講習會の名目で開催される。

對外的には、まづ外國選手と接することを目的として、來る四月八日から十七日まで北支チームを招聘、東京および大阪で四試合を行ふ豫定で、さらに世界選手權大會轉東ソンの對關印との試合も、今年度中に終了せねばならぬが、此の精細に就ては未だ何等決定はされて居ない。然し、代表選手は七月に選ばれた廿五名の内から決定されることは確実で、この試合前にもまた合宿練習を行ふことも決定してゐる。

S12-4-1



蹴球 第七回東西OB對抗蹴球試合
 は三月二十一日、名古屋市鶴舞公園
 球場で行はれ二對一の接戦で關東が
 優勝した(白が關東)

S12-5-1



戦熱の合試球蹴大早對團球足寧北 ゲンイデツヘ

全勝記録を樹立した 北寧足球队の來征

「北寧足球队」——詳しくは北寧鐵路局足球队と呼ぶのであるが、その構成メンバーは北支における優秀選手を網羅してをり、その來征はわが蹴球界に多大の期待と興味を引くものがあった。果せるかな、渡日第一戦において文理大を破り、さらに早大、慶應と相見えてこれを撃破し、さらに關西に轉戦しては餘勢を驅つて全關西軍を鏑を削り、遂にこれにも打勝つて全勝の記録を樹てた。もちろんわが國のチームがいづれもオフ・シーズンのためコンディションの整備に欠いてゐたにしても、北寧足球队が各試合に臨んで示した個人技術には確かに學ぶべき多くのものを含み、オリンピック準備期にあるわが蹴球界に多大の暗示を與へたことは事實であつた。今これらの戦跡を顧みて權威者の検討に聽くこととしよう。

東都の三試合を通じ、 その實力を檢討

竹腰重丸

對文理大戦

北寧鐵路局足球队は、來朝第一戦として先づ文理大と對戦した。文理大は昨秋のF・Wのエース松永を兵營に送り、その他二、三の卒業選手があつて、新チーム編成後一週間足らずの練習で對戦しなければならなかつたから、苦戦を免れず、北寧の強さが前觸れ通りであつたならば、勝敗は自ら明瞭と豫想せられてゐたものであつた。

北寧には實際にはオリンピック出場正選手は一人も無く、この點はその前觸れと相違してゐたが、F・Wの中央三人は噂に違はず良く纏つた技を持ち、他の選手も戦前の練習から見て強チームとは思はせるほどの技術を示してゐた。文理大は日曜の休を利用して松永

を参加させて無人のB・Bに起用したに止まり、單にメンバーの數を揃へたに過ぎぬ感を抱かされた。北寧が十七分、二十三分と堂々たる二點を先取し、その後文理大が落ち着きを得

を突いて速攻による二點を回復し後半戦には風上に廻つた北寧が四點を加へて六對二で終つたのであるが、その中一點は文理大G・R中垣内が不用意に蹴つてF・Bに當つて、與へずともすむ點を失つたもので、結果は先づ順當といはなければならぬ。

北寧守備陣が パスに弱い處

文理大は、相手の希望に従つて對戦した次第で、確信のない試合振りも賣めては斷の感なきを得ない。従つてこの試合は北寧に調子

を整へる機會を與へたに過ぎなかつたといつて良からう。

對早大戦

川本を卒業によつて失つた早大は、果してどの程度の攻撃力を持つてあらうか、またその攻撃が纏らず粘りを失つた場合兩F・B、O・Hによつて布く三バック制の守備は、良く堅實さを失はずに守備の全きを期し得るであらうかなど、私は早大チームに對して可なり疑問を懷きながら興味を以てこの試合を迎へた。

北寧は文理大との試合にO・F・L・Iの巧緻な足技、B・Iの精力的な活動、兩翼F・Wの我が大學生選手に優る強さ、全隊員皆守球を交へたパスの處理に強味を示し、守備としては疾走しながら滑らかにパスワークに弱さを

現はすけれども、早大の得點を三點以下に喰止める力を有することと思はせたので、北寧F・Wが後く並び、足技と浮き球のパスによつて球をキープすると共に、早大守備陣に混亂を起させることが出来て三點をあげるくらの戦況となれば、川本のない早大攻撃は二點程度に止まるであらうけれどもチーム全體の纏りから見て、まづ早大三北寧二くらゐの得點になることが豫想せられた。

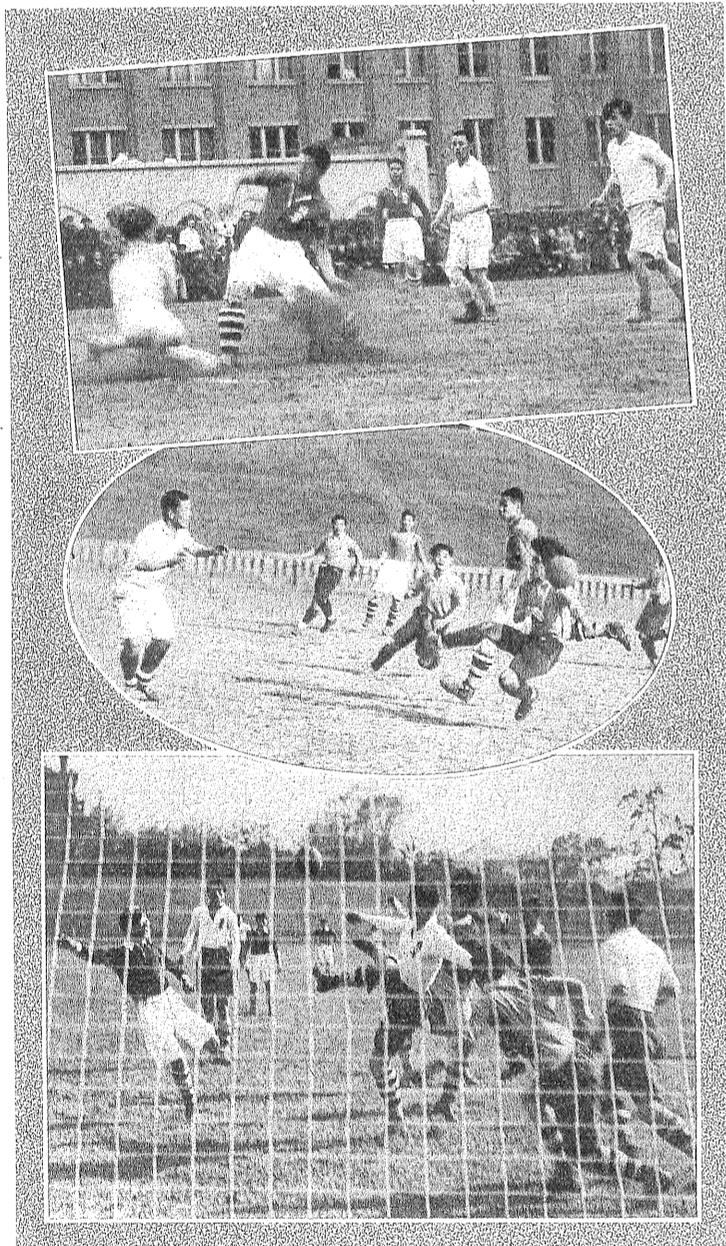
この日はかなりの強風が西から吹き、長蹴からの展開が荒れ氣味となつたので、試合内容は多少纏りを缺く傾向が生じた。また前半戦は北寧、後半戦は早大と風上に位置した側が優勢を持する戦況となつた。

北寧はバックからも高い球を送り、F・Wも上背を利用しての（ツディングと）

足技による浮き球の處理の巧さを攻撃の武器とし、戦法としてはF・W中三人で浅いパスを繰返した後、大きく翼F・Wに出してそのウイングの突込みを契機にF・W揃つて突込む攻法を用ひたが、早大の兩翼H・B金、關野が良く兩インナーをマークして振り離されず、又ウイングに出す球も兩F・Bの閉いた三F・B制のF・Bに中斷される事がしばしばでミッドフィールド戦で早大の守備陣を亂すことは出来なかつた。殊にF・Wのヘッドインゴの力は、果敢な早大後陣の跳躍に押されて威力を現はしえなかつたので、攻撃のチーム北寧も十分な成果を擧げ得なかつた。

早大の守備力は、概して北寧の攻撃力に優つてゐたといふ事が出来やう。唯これは早大の後陣のみでなく、我國一般のH・B、F・Bに共通な缺點であるが、球技ひが拙いのでF・Wに攻撃の端緒になる好アイドを出し得ない事と球を得ても急ぎ過ぎ、時に敵手に球を蹴りつけるため、守備として一應成功しながら、却つて攻撃を反復せられて重壓を蒙り勝ちであつた。もしG・K佐野の好防がなかつたならば、風下に位置して重壓を受けた前半戦に少くとも二點は擧げられたであらう。ハーフタイム直前に早大の失つた一點は、重壓を蒙つた戦況から北寧L・Hが長蹴を右に送り、B・Iの果敢な突込みと、早大L・BとO・Hとの判斷の錯誤が加はつたものでG・Kとしては殆んど防衛術がなかつたやうである。

前半は北寧絕對優勢の中に一對零で終り、後半戦は早大優勢となつたが、その戦況の中に早大F・Wは全く無方針で、氣持の上でも技術的にも全く



北寧足球队の活躍——上「來征第一戰對文理大試合の一場面」中「神宮競技場における對慶應戦（後半慶應ゴール前の接戦）」下「對早大試合における北寧ゴール前の混戦」

纏りと迫力の 無さを暴露し

てしまつた。F・W右翼の新人二人には技術も、攻法の諒解も不足で、何物をも期待すべきではなからうが、古夢の左からの三八には今少し氣持と足車を揃へた攻撃を示してはしつた。オリンピックに参加した彼らには、個人的にもいままの迫力があつてよいはずである。殊にベルリンでは、力強い活躍に優秀選手中に數へられたL・W加茂弟の退歩は甚しく、オリンピック選手としてのよさを全然喪失してゐるかに見えた。

對慶大戦

慶大は守備に難があり、北寧に勝つことは困難と思はれたが、兩翼F・Wが弱くても、インサイドに二宮、播磨を配した攻撃は、早大に比しパスワークの巧さがあらうから、二點位の得點は出来ることと豫想せられたが、またしても期待外れに終つて四對一の結果が示すくらの、戦況にも開きがあつて慘敗を喫してしまつた。

悪質のタツク ルは行はな

つたやうである。しかるに、慶大F・Wは前二試合を見て氣おくれしたか、兩インサイド以外は相手に打勝たうとする氣持のプレイが少しも現はれなかつた。二宮、播磨兩インナーは大體において期待に副ふ落ちつきと、足技の巧さを示したが、他の三人は全く攻撃精神を缺いて迫力がなかつた。

前半風上で一點を先取したところには、慶應攻撃の巧さを示したがその後G・KとF・Bとで二度の自殺的な失點を與へて後は、全體として意氣銷沈の感あり、後半風下となるや徒らに北寧F・Wに足技の巧さを樂しませるやうな試合となり、北寧は樂に戦つてさらに二點を加へた。

※左ページへつづく

(注)小見出しは本文を兼ねている

※右ページ、うつつく

北軍の巧さは、全真球に良く値れ、バツクで廻して好フイドを出し得ること、F・Wの足技による釣りの動作に巧みなことであるが、全體の力としては、秋の早慶には接戦はしても敗れ、文理大には勝ち得る程度の強さであらう。個人としてはF・W中央

三人の技術は 支那代表選手

に劣らず、殊にF・W許のごときは、體操の關係から押し切る力と

シュートの威力は劣るが、支那足球队の偶像、オリンピック・F・李惠堂にも優る巧さを示してゐたL・Iも巧味があり、またR・Iの活動力は、動きの激しい近代蹴球のインサイドの役割に耐へ得る體力を示し、やがては代表選手の中心となり得るであらう。

わが蹴球界は、彼等の足技には驚まされただけの力はあるが、探つて以て強化の一助にすべきものを持つてゐたやうであり、この點に於いて利する處があつたはずである。

個人技に學べ

北寧對全關西蹴球所感

高田 正夫

東都における文理大、早大、慶大の對三大學戰に連勝した餘勢をかつて西下した北寧足球队を邀へ先ごろの東西對抗戦に大勝を博して意氣頓にあがれる全關西選抜軍が、如何なる作戦をこらしてこれと戦を交へるか、また東都諸大學の雪辱を期し得るか、それとも全勝の名譽を彼らに與へるかなど、諸種の興奮を盛つた北寧足球队對全關西選抜軍の一戦は、久しく對外來チームとの試合を渴望してゐた全關西蹴球界の待望裡に開始された。

グラウンドは芝の張り替へ直後の事としてやゝ軟弱だつたので一部分プレーし難い場所もあつたやうに見受けられたが、アウト・オブ・シーズンとしてはこの日のグラウンド・コンディションは先づ無難といはねばなるまい。天候は曇天、無風。

全關西軍はこの戦ひに備へ、先ごろ遠く九州へ就職したオリンピック・プレーヤー右近を呼び寄せてR・Hに、川西をL・Bに起用した他は、過日の東西對抗戦に善闘した選手を配し、慎重を期しての應戦振りであつた。

前半、數段すぐれた北寧チームの體力のため大いに壓迫され、それに加へてアクロバティックなフ

ットワークに幻惑を感じて、更に織り交へて執拗とも覺える彼等のあまりにも數多きラフ・プレーにあひ、期待された全關西軍の意氣容易に揚らず、無駄にエネルギーを消費する點が甚だ多かつた。それにもかかはらず、互角に戦を進め、返つて得点をリードする好戦振りを發揮した。たゞ、前半の始めに全關西軍が得たペナルティ・キックをもつて得なかつた點にあとをきりめきれぬものを残して後半戦へと移つて行つた。しかし試合の進行に伴ひ、極度の緊張による精神的負擔と、ラフ・プレーによる負傷者續出、更に練習不足による疲労者を加へるにおよんで、全關西軍が誇るチーム・ワークによる豫期の成果を納める以前に、ホープ大谷、市松、右近らの活躍する餘地もなく、彼らのあまりにも秀れた個人プレーの下に遂に全勝の榮譽を譲らねばならぬやうな結果に終つた。

全關西軍この日の敗退に關してはあまりにも人的要素の整備にのみ急にして、却つて彼らの技術を輕視し、練習を不足したといふ悔いを殘さぬものでもない。全體を通じて、彼等の個人技術の數段な相違に後味悪きものを殘すのみであつて、チーム・プレーそのものに關しては何ら期待し得るところはなかつた。

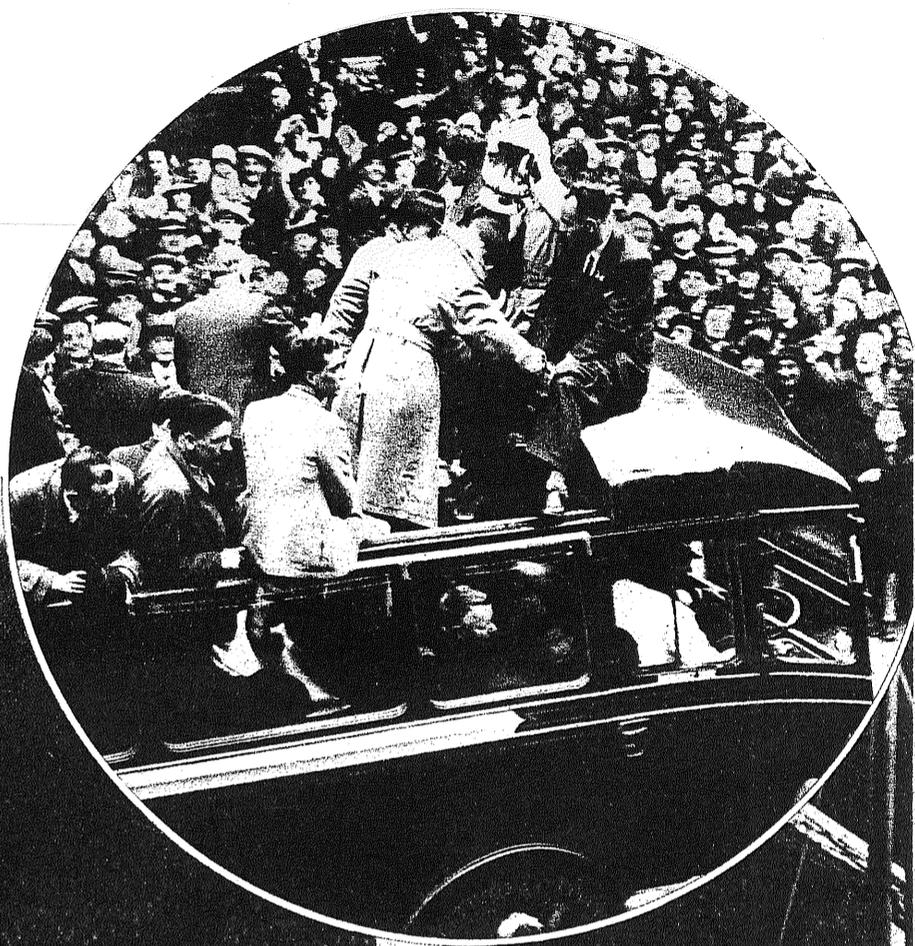
東都における諸大學戦後にも、多くの入達によつて提唱されたやうに、個人技術の再檢討といふ重大なる要目を、近く東京オリンピック大會をひかへて強化對策に緊張する我蹴球界に與へてくれたことに對し、北寧足球队の來征は大いに意義付けられる事が出來ると同時に、兎角對外的刺激の少い我國蹴球界に可成りの刺激を與へてくれたことに對し感謝に値ひするものが認められるのではなからうか。



南甲子園における北寧對全關西の試合 前半大谷のシュート極つて得點の場面

S 12 - 6 - 15

ノ・ントスレフとドンラーダンサは戦勝決のアツカAFスリギイ
萬數で揚球の(ソドンロ)レブンエウ日一月五で間のとドンエ・ス
ンラーダンサでアコスの1-3局結がたれさ行擧てれさ繞園に衆觀
目點二第が手選ターカのドンラーダンサは(下)たし勝優ち勝がド
へ市ドンラーダンサてれらへ迎にアツ土郷は(右)ろことたげ擧を
着歸



今季蹴球界の展望

戦端既に開く

関東の形勢

塚部 徳三

十月三日の蹴球祭により、関東大リーグ戦は花々しく開幕された。初優勝東協会長が述べられたことこの非常時局に際し、われわれは国民體育作興の精神に則り、このリーグ戦において團體訓練に重點を置き、いかなる困難艱苦をも打破する勇猛果敢な精神と忍耐とを涵養し、併せて来る東京オリンピックに備へて技術を練る覚悟を持たなくてはならないのである。

さて、今シーズンに期待されるオリンピック土産の話題として「バック・システム」と、審判法とについて云々され、昨今多くのチームはこの「バック」制を採用するやうになつた。いままでもわが國においても試合中ときどきこの體形を採つてゐることもあり、例を挙げれば、ホワード・センターが非常に強力であり、前方に残り氣味の時、彼をマークするために「ハーフ・センター」は自然ついで後退し、従つて他の「S、H、S」および「F、B」の位置も變つて「バック」形體になるのは、或る程度の戰術を考案してゐるチームでは認められることである。しかし、スリー・バック制の依つて来る眞の理由を知らないで、G、Hがそのマークする相手に關係なくF、Bの線に後退し、最上の戰態であるかの如く考へるのは誤りで各個人の動き、および技術に従つ

てその體形を採ることを忘れてはならない。この意味において、今夏大日本蹴球協會の國際試合候補選手の中合宿において、技術指導部がこの問題を取り上げて種々研究し、一般的に或る程度まで高水準の研究心を喚起せしめたことは注目すべき點である。

一方審判技術の方は、従来の審判法と一變した如く喧しくいはれてゐるが、なんらルールの解釋の仕方に相違はなく、審判員がその規定をより忠實に則る事を心懸けることになつたに過ぎず、たゞ主審と線審の密接な協力の缺くべからざることを痛感されたことである。以上、審判員の自覺を促すことにより、斯界の體面に大なる一助を齎すものと確信するものである。

さて、去る三日の留文、早明の二戦を基として、今シーズンの大學第一リーグ早慶帝文、商、明各チームの展望に移らう。

留文大

今年も一般に豫想されてゐたのは早、慶、留三チームの覇權をめぐる華々しい三巨戦である。ところが、留文大の活躍に依り大番狂はせを演じ、今後の見通しを益々困難なものとし、同時に一入興味あるものとした。文理大G・K中垣内、主將の金門の死守と、全員の烈々たる闘志がC、F松水、H・B木村なき跡の缺陷

を補つて留文に苦蓋をなめさせたのである。今後の試合にこの旺盛なる闘志と、激しい動きをいよいよ強化し、その頑丈な體格と走力および強いキックを利用し、久下小川、長島をして操縦線で十分活躍せしめ、他の新人バック原崎(志太中)松濱(松玉剛)三塚、藤田ともに恩賞に動き廻るとすれば、多数新人を持つて編成されたにも拘らず豫期の不安も解消し確かにそのスピードと激しさは他チームにとつて一大強敵である。

帝大

昨年メンバーの中心名手、不整の一戦を

早大

昨年メンバーの中心名手、不整の一戦を

明大

唯伏七年の苦闘の後二部リ

商大

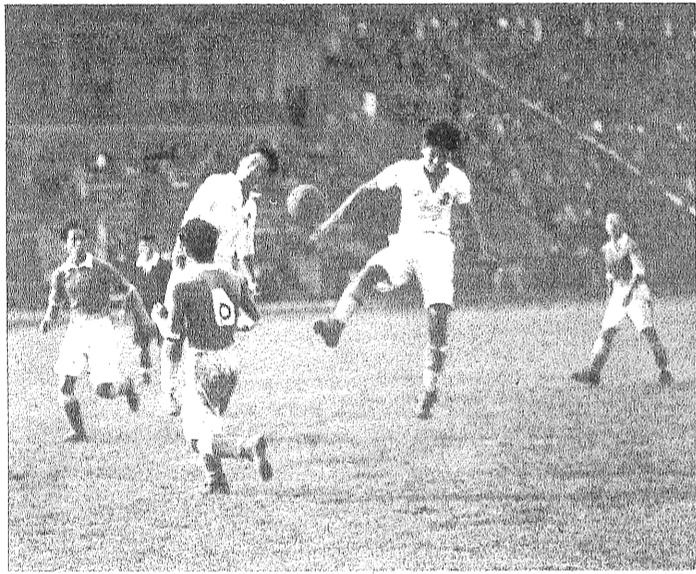
大掛、林田、村井を前線と

執拗な、また粘着力ある動きを缺き、剛部一人の奮闘もライン不揃ひのためF・W間の聯絡極めて低調であつた。メンバーに多士濟々であるが、速かに一定のポゼッションを興へることが急務と思はれる一方バックメンはO・H種田を中心として藤、藤岡、菊地らも體格がっちりしてをり、敵に面と向つた時は非常に強いが、横のパスに弱く、また、ランニング・バックが遅いやうである。兎もあれ、吾人は優れた先導指導者に恵まれてゐる帝大が、七年連続當時の氣品ある巧敏のチームたることを切に望む次第であるが、同時に過日の敗戦を期として大覚悟をするであらうから、今後の試合にますます興味を持たすものである。

さか物淋しい氣がする。しかしたは如兄兄弟あり、配するに高橋(刈谷中)渡邊(神戶三中)末岡を早くからその線に加へ、巧妙なフットワークおよびコンビネーションの整頓に餘念なく、また高橋、渡邊兩新人もビッグゲームに馴れて來たので、その得點能力は他チームの脅威であらう。

H・Bには吉田(三ツツバックセンター)として兩翼に堅實な關野、老巧野野を配し、時として新人村田(廣高師附中)を起用し、危まれたF・Bも上野、確實となり、また西村(府一應)の忠實な動きは、後陣よりの佐野主將の下に傳統的強い守備陣を形成してゐる。とまれ各優れた個人技に在來の烈しい闘志を盛り、一致團結する時五年連続の職業は期して待つべきである。

感となることである。松丸監督の下に、右近、駒崎、伊藤なき缺を早くより整頓し、全日本選手權に優勝した慶大は、好事多磨の世の變への如く、今夏合宿に増田、宮川、菅原、西本の多数が病氣のために缺場し、コンビネーションの整頓に支障を生じた。しかし増田の跡に新人小畑(慶一中)を抜擢し、菅原(慶豊)二宮、藤岡、藤崎(慶豊)の攻撃線は尖鋭な突破力を持つてゐる。H・B松本、菅原(神一中)は堅實な動きに典型的H・Bたんとし、石川また中心となつてF・B宮川加藤を使動すれば、G・K津田の死守とともに或る程度の強力防壁が出来よう。ともあれ慶大は、最後の二分に形勢を逆轉せしめる重砲のごとき地方を、その尖鋭な



帝大對文理大試合の一場面(後半三十五分、文理大ゴールに迫る帝大軍)

慶大

松丸監督の下に、右近、駒崎、伊藤なき缺を早くより整頓し、全日本選手權に優勝した慶大は、好事多磨の世の變への如く、今夏合宿に増田、宮川、菅原、西本の多数が病氣のために缺場し、コンビネーションの整頓に支障を生じた。しかし増田の跡に新人小畑(慶一中)を抜擢し、菅原(慶豊)二宮、藤岡、藤崎(慶豊)の攻撃線は尖鋭な突破力を持つてゐる。H・B松本、菅原(神一中)は堅實な動きに典型的H・Bたんとし、石川また中心となつてF・B宮川加藤を使動すれば、G・K津田の死守とともに或る程度の強力防壁が出来よう。ともあれ慶大は、最後の二分に形勢を逆轉せしめる重砲のごとき地方を、その尖鋭な



早明試合(明大陣に迫る早大軍)

近く火蓋を切る

關西の情勢

大谷 一一

近年著しく躍進した技術の向上は、國際的進出の渴望となつて遂にオリンピックにおけるスエーデンに力となつて現はれた。これと同時に國內的には個人技の強化、新フォーメーションの研究を目標として一流選手を集めた合宿が今夏山中に行はれ、關西においても常備の指導機關を通じて各チームの熱は非常なものである。そして、来る十七日の蹴球祭をもつて幕をあげるビッグゲームこそ、關西蹴球界を賑はす多彩な場面を展開することであらう。

新傾向といへば、先づ上半身を巧みに使つてボールを操ること、およびスリーフルバック制の採用と、それに伴ふフォアードラインの構成といふことに歸結する。身體の便ひこなしは、スライディング

への、新メンバー編成に事敵かぬ部員の豊富さは今年も一層の活躍を期待される。フォアードには進出の巧みな岡野をセンターに置き、動きの激しい野澤をインサイドに配して、田島との聯絡で給球を豊富にせんとした考慮は、駿足梅田中の兩ウイングを活躍させて無敵のラインを構成してゐる。バックは傳統のツウ・フルバックを守り、ハーフに田邊、三田、朝田に新人中村を適宜使用して積極的ミッドフィールドを振舞う力は、鈍重なフルバックの缺點を補つて十分である。

昨年神大バックに苦杯を嘗めさせられた單調な攻撃は、春以來の研究と猛練習によつてある程度是正されたこと、信ずるがコンビネーションは慣れによつて生れるものではなく、各場面における瞬間的な判断の一致により益々多彩な變化を生ずるものであることを一言したい。

神大

唯伏數年、漸く第一線に浮び出て、一躍關西の覇者となつた神大も、多数選手を卒業させてチームの中心を失ひ、メンバー編成に未だに困難を感じてゐる。試合巧者も相當の技術を伴はなければ、武器とはならぬ。

練習を遠ざかつてみた前川の回復によつてハーフに木下、フルバックに吉江と結んでタイトルを固守せんとしてゐる。春以來個人技の強化に専念してゐるといふが、フォアードも神田、藤野の右サイドに相當のキープが望めるなら得點力は倍加するであらう。

早くよりスリー・フルバックを研究し、實戦においても成功を収めて獨自のフォーメーションを案出したが、今年の狀態ではミッドフィールドのマークを或る程度放棄して、消極的なゾーンディフェンスに傾くのではないか。背水の

※左ペーシからつづく

融ではあるが、失点を二點以内に
でも喰止めれば前川、藤野の両イ
ンサイドを極度に動かしてウイ
グ、センターの突込みで得点を期
待することも出来よう。兎角敵の
意表に出なければならぬ今シーズ
ンの機会は、昨シーズンにも増し
て大である。

京大

往年關西に君
臨した京大の昨年の戦績は、實に
惨めだったといへる。更生を目指
して立つた今シーズンも、傑出せ
るプレイヤーが少いために、去る
三日の對神戸・B戦に明かにそ
の弱點を暴露した。引分に終った
ことよりも、初試合のO・Bを一
度も完全に振切れなかつた迫力の
不足は、相當系統立つたパスワー
クをして單なる横走に終らしむる
結果となつた。

ピカー小野を如何に使ふか、兩
サイドハーフの攻撃参加によつて
彼をして寄せに加へしめるならば
市山、伊藤のセンターリングにミ
ットして得點の機會を掴むことが



シュート成る。早大の前半二十一分、早大軍の得點

出来よう。スリー、フルバックを
構成する眞鍋、大崎、井上は巨額
を利用して積極的に潰せば、ハー
フのフィードは比較的樂になるの
ではなからうか。

關大

若い選手を以
て編成された關大は、沈黙を守つ
て鋭意練習に勵んでゐる。名手上
吉川をゴールキーパーに持つバック
は、地味ではあるがよく動いて
激し、キーパーの活躍範圍を非常
に廣くしてゐる。林、石垣、藤原
のセンタースリーは相當のキープ
力を持つが、新人の兩翼を如何に
働かすか攻撃の變化に影響するこ
ころは大である。

元來個人的に突込み過ぎて左右
への攻撃變化を忘れたかの感があ
り、バックも早く突き掛る關學等
には案外強いが、細かいパスワー
クには感ぜられる缺點があつた
が、今シーズンは如何なる姿で登
場するか各校注視の的である。

上位四大學に常に喰下る神戸高
商は、今シーズン三十名の部員を
得てビッグ・フォアの一角を崩さ
んとし、大阪、神戸O・Bの奮起
は二部阪大、同志社高商の擡頭と
相俟つて、關西蹴球界をより多彩
に飾らんとしてゐる。

第三回日滿交際蹴球試合のため
に來征した滿洲國代表蹴球隊は、
去る九月十八日東京における對早
大戦(四對零)を振出しに對慶
大戦(四對二)を對名古屋戦(四
對三)勝利、對全關西戦(六對二)
勝利、對全關東戦(三對二)勝利の五
試合を行ひ、二勝三敗の記録を残
して帰國した。

昭和九年第一回の來征の際には東
京において五試合(早大、慶大、
東大、東京O・B)關西において
三試合(關學、關大、京大)に果敢
なく敗退し、僅かに全名古屋に一
勝したに過ぎず、また昭和十年第
二回の交際試合には早大が日本代
表として滿洲に遠征、滿洲國代表
に八對零で大勝利、全新京四對
零、全奉天八對零と全勝してゐ
る。當時の滿洲國軍は技術的にも
戰術的にも日本の蹴球に比し遙か
にその水準の低かつたことは勿論
であるが、チームとしての纏りも
なく、またそれを構成する素材の
バランスもとれてゐなかつたのに
對し、スピードとそれを纏る強靱
な個人技の昂揚とによつて飛躍の
段階にあつた日本の蹴球との對戦
の結果は、前述のごとき我々の囁
りを記録され表現したものであつ
た。

今回來征の滿洲軍は、そのメン
バーの中特に目立つたプレイヤー
は居らなかつたが、チームとして
一應のバランスはとれてゐた。選
征前一ヶ月の合宿練習を行つたと
いふことである、纏りの上にもそ
れと背ける點があり、前回の來征
と比較すれば進歩の顯著なるを認
めることが出来た。

滿洲足球隊の印象

小野 卓爾

滿洲國 大使 阮振鐸氏の祝辭



個人技術上から見ればR・I李
正現、G・K王國棟などが比較的
に良いプレイヤーであり、O・F
郭義遠の老巧も目についた。長身
なG・K王の活躍は對早大、對慶
大戦においてしばしば味方の危機
を救つて得點差を僅少にした。

一般に無理な體勢におけるキック
に秀で、時にバックスはこれに
よつて良く危機を卻けてゐたが、
廻轉の動作が遅く、折角の効果は
これと相殺せられてゐた。そのた
めに立直りが悪く、側面から攻め
立てられた場合に感傷することが
多かつた。またヘディングにおい
てはタイミングが悪く、對早大戦
においては早大のために完全に制
空權を確保されてゐた。對慶大戦
においては奮起一番、玉碎的に頭
撞戦を争ひ、相當に物をいはず
したものの、コントロールに乏し
く、強き返して防ぐ程度を出でな
かつた。

戰術的にははゆるロブイン
グ・センターハーフを基調とし、
早大、慶大はサイドバックスより
この對戦は興味のあるものであつ
た。日本においては昨年ベルリン
遠征以來サイドバックスの効果を

本の蹴球飛躍の轉換期に相會した
譯である。滿洲軍はサイドバック
スによる攻撃を支へるには左程困
感はしなかつたが、この守備を破
るためには甚だしく困難した。對
早大戦においては両インナーとも
上り、F・Wは二線となり、爲に
易々と完全にマークせられ、ペス
ワークの角度が淺くなつて重厚な
早大の防備陣を破ることが出来な
かつた。サイドバックスを破る方
法としては、矢張りこれに對應し
て両インサイドが下つて深いW型
を取り、ハーフバックをつり上
げ、そして攻撃の端緒を見出さね
ばならない。両インサイドがF・
Wの二線を構成せず上り過ぎてゐ
た結果は、例へばR・Iが球を得
た場合追ひ込まれてO・Fに縦に
流す場合、或ひはO・Fの動きに
應じてバックスが移動した場合
に、反對側のインナーにパスをす
る餘地を残さないことになつてし
まふ。對慶大戦においてはこの點
に氣遣つてか、両インナーが下つ
て深くW型を取つたが、両インナ

1の活動はF・Wの二線を構成す
るものではなくて、寧ろ徹底的に
防禦に加擔し、F・Wとバック線
とは切斷されてゐた。

とまれ、今回來征した滿洲代表
軍は、前回の來征の時に比し著し
く進歩したことは事實である。滿
人の蹴球に對する先天的な適應性
と愛好性により、將來その水準を
昂揚して日本の水準に伯仲するで
あらう期待を持たせるに十分であ
つた、今春來征せる北支の北軍足
球隊は、個人的にも秀でた特徴の
ある選手が居り、チーム・ワーク
にもこれらの特徴を織り込んだ變
化ある動きを持つてゐたが、滿洲
軍にはそれほどの特徴も見出され
なかつたが、得意の個人技を一層
擴充して行けば、チームとしての
動きのうへにも變化が現はれて來
ることであらう。

滿洲軍中には前回來征した選手
が六名加はり、中五名は試合に出
場してゐた。今回の來征によつて
滿洲軍は戰術的に日本に學ぶ可き
點が多かつたと思はれるが、滿洲
後その點を研究し、理論的に一步
を進め、今回來征せる選手が偏軸
となつて稱進したならば次回の交
際試合においては伯仲の試合を行
ふことを豫想出来る。良きライバ
ルを持つことはスポーツマンの
幸福である。友邦滿洲國の蹴球が
ますます強くなりて日本の良きラ
イバルたらんことを希望してやま
ない。



早大對滿洲軍の試合。早大、滿洲國ゴールに迫る四十二分



満洲国足球队一慶応大戦

満洲国足球除幕 九月十八日の對
早大戦をトップに内地において五戦し
二勝三敗の成績を残して歸國したが今
回のチームは先年來朝したチームより
數段とリブアインされてゐた、寫眞は
對慶應戦において前半八分慶應のコー
ナーキックを満洲 GK 王君ジャンプ
してたゞきかへす

S12-11-1

大東日六十月十は合試の大明對應慶のゾーリ球蹴學大東陽 **球蹴明慶**
和利たつ成ルーゴの應慶分十半前は負勝したし勝伏が應慶で零對十、行學でドンウラ



フットボールの

三F・B制の研究(上)

大谷 一二

オリンピックの成果から見てU・Hのサイドバック・ゲ
ーム——いはゆる3F・Bシステムは、その守備線にお
ける堅牢を證明すると同時に、イギリス一流プロチームによ
つて、七八年前より採用せられ、このシステムがわが蹴
球界においても實戦化して、必ず効果あるべきことを如實
に物語つてゐる。



筆者大谷 一二氏

近年わが国内チームでも優秀な
O・Fを持つ特定チームなどに對
しては、ロビングセンターハー
フとしての役割を放棄し、サイド
バックとしてU・Fをチェックす
るやうな戦法を採つた例は少なく
ない。消極的な理由ではあるがF・
W特にO・Fに優秀なプレーヤー
を排出したこと、またウィングが
盛に切込んで攻撃を集中化するや
うになつたために、守備線の厚み
による防禦と、對人的に極度にマ
ークを厳重にして玉碎的な體當り
による盾しが必要となつたこと

に起因する。従来いはゆる勘で
守るといつたことは、現在の鋭い
フオアードの寄せに對しては實戰
的にも、理論的にも不可能となり
攻撃の集中するある地域において
防禦も最も堅固でなければならぬ
といふ考へが、次第に濃厚となつ
てゐた。オリンピックで我が代表
チームが、急に3F・B制を採用
して相當の結果を齎したのも、
すでに國內でこの傾向の中に育て
上げられたプレーヤーが多かつた
からだと思ふ。

① オフサイド・ルールの變更によ
つてチーム全體の隊形が、従来よ
り縦に編成される様になつたこと
は、この3F・B制と深い關係に
ある。極端に或る地域——ゴール
マウスに攻撃を集中化して、機會
を多くし、且つ得點のペースセン
イチを高めんとする戦法は、過度
的な曲害に近い足技と、敵を臍差
するが如き巧緻なパスワークにと
依る精力の消耗と、その迂回的な
手段を排して單的に攻撃の集中點
に巧みなフイードをなすことに依
つて、一舉にゴールをねらふとい
ふ、かつて原始的とも思はれる
方向に進んでゐる。

② 3F・B制によるチーム全體の
縦への編成は、最も有効に守備に
また攻撃に力を集中するといふ、
理論的には合理的な戦法である
が、限られた體幅と技術といふ條
件のもとでは實戦にいかにも運用
すべきであらうか。このシステムの
持つ精神を分析するとともに、各
個の條件下にあるチームにおい
て、その應用の方法を考へるなら
ば、非常に興味のあることであ
らう。

則であり、防禦の厚みをつつ
て、攻撃の集中化に對して防禦を
最も堅牢にし、最終線に幾層的な
守備線を布くのである。

③ それにはU・Hは巨大な體格の
持主で、防禦に強い者でなければ
ならぬし、常にO・Fを數ヤード
の距離の中に置いてマークしO・
Fに侵する攻撃の手は完全に防が
ねばならない。マークを容易には
ぶされる様では却つて大きな缺陷
が出て来る。それは両サイドF・
Bが比較的に開いてウィングをマ
ークするポジションを探り、C・F
は一應U・Hに委すからである。

④ 3F・Bのバックラインの編成
は、このO・H即ちサイドバック
の動きを中心として聯絡をつけ、
ゴールマウスを死守する立前から
萬一U・Hが振り残された時は、
F・Bの一人が巧みにこの地域を
カバーしなければならぬ。

⑤ 防禦における厚みといふ事は非
常に重要なである。敵フオアードの
巧みな釣出しと寄せによつて、F
・Bが開いたまま厚みを壓縮され
て、殆んど一線にならんとする際
間、タイミングよくミートされた
縦パスは最も危険な襲撃手段であ
り、敵両インサイドやセンターフ
オアードの鋭い突込みが加はれば
意外な結果を生ずる。従つて特に
F・Bは厚みを考へ、O・Hも正
面から攻撃を受ける時に、味方バ
ックに有利な方向に攻撃を流させ
ることも心得べきであらう。

の編成は極度に深いW型を形成す
るであらう。正確なキックを持つ
バックメンは巧みなフイードで一
舉に最前線のホールドを動かして得
點を狙はせるであらうし、F・W
もまた鋭い動きと巧みなスリッパ
で、敵のマークをはずしシュート
を決めるであらう。イギリス一流
プロチームでは、かかるフイード
によつて、その十分の一でも完全
に生かし得るなら十分勝ち得るも
のとして、グラウンド一杯に配陣
し、ミッドフィールドのパスを省
略した戦法を探り、一見力一線
の編成は極度に深いW型を形成す
るであらう。正確なキックを持つ
バックメンは巧みなフイードで一
舉に最前線のホールドを動かして得
點を狙はせるであらうし、F・W
もまた鋭い動きと巧みなスリッパ
で、敵のマークをはずしシュート
を決めるであらう。イギリス一流
プロチームでは、かかるフイード
によつて、その十分の一でも完全
に生かし得るなら十分勝ち得るも
のとして、グラウンド一杯に配陣
し、ミッドフィールドのパスを省
略した戦法を探り、一見力一線

⑥ いパスによる攻撃は、技術上困難
である。今夏山中において行はれ
た選抜選手合宿練習でも、最も問
題となつたのはこの中盤戦の運び
方である。従つてゲームの興味も
こゝにある様だ。F・Wが攻撃上
の變化の手をどれだけ含めてゐる
か、巧みに變化の手を出せばパッ
クの釣出しに成功するだらうし、
無理な突込みや極端な横走りにな
ればバックの思ふ處に落込り結果
になる。

⑦ 3F・B制では両インサイドの極
度の後退と、サイドハーフの極
度の勢を強ひる結果となるか
ら、たとへば體格は小さくても、こ
の四人は最も精神的な者でなけれ
ばならない。かつウィング・セン
ターの三人のF・Wはある程度後
退をして、常にインサイドとの聯
絡を切れない様になければなら
ない。一人のインサイドが後退
してクォーターハーフの役割を
する場合でも、F・Wは縦にも横
にも攻撃を變化出来るやうな聯絡
を保たねばならぬ。攻撃には常に
インサイド、サイドハーフの適切



長明雨中の蹴球戦、前半三十分程度のゴール成る

⑧ さにのみによつた戦況を展開して
ゐるさうである。

⑨ 個人技が極度に發達すれば、
かかる戦法も可能であらうし、シ
ステムも技術と力に順應してはじ
めて作戦上の効果を擧げることが
思へば、3F・Bの精神もまた我
國チームの力量に適當したシステ
ムの上にも守らるべきものであら
う。

⑩ 現在わが國チームの状態では
中盤戦を省略するやうな正確な鏡

なホローがあつて自在な變化なり
鋭さも出来る。三人のF・Wが早
くから突込みを仕掛けるなら、結
局シュートする時に力が盡きるや
うになる。中盤戦はかかる意味か
らも攻撃のはじまる地域である
と共に、いかに變るかの防禦の備
へをつくる地域である。七人で攻
め八人で護る守備線と攻撃線の交
替するところである。こゝに老巧
なプレーヤーを配することは最も
チームの特徴を發揮出来ること
にならう。

⑪ 縦横にパスを混ぜ或は敵を釣出
し、或はみざぶつて来る攻撃に對
して、守備は常に厚みを殘さなけ
ればならない。センター・スリー
で正面を衝かんとする場合は、兩
サイドハーフは極力後退してO・
Hと協力して潰すか、攻撃をそら
すかしなければならぬ。そしてイ
ンサイドの後退を求めて前線との
聯絡を保ち、防禦の隊形をつくる
のである。

⑫ 敵の攻撃が側面を突く場合、O
・Hは釣り出されることがあり、
ハーフがインサイドに完全に抜か
れたとき、O・Hは或る場合には
一舉に潰しに行かなければならぬ
い。その時フリーにされたO・F
または無人のゴールマウスは最も
危険である。これをF・Bが適當
にマークして、この地域の守りを
一瞬たりとも怠らないやうにする
ことによつて守備の厚さが出來
る。

⑬ 即ち敵左インサイドによつて、
O・Hが釣出されたならば、右サ
イドすなはち反對側のF・Bが眞
中を警戒してO・Fをチェック
し、サイドハーフを後退させて右
サイドのウィングおよびインサイ
ドを潰し得るポジションにつかせ
なければならぬ。

(へい)

フットボールの

三F・B制の研究 (下)

大谷 一 二

C・Hが極度に後退して三F・Bとなり、専ら防禦のみに當るボチションを探る型は3F・B制の基本的な特徴であり、ゴールマウスといふ防禦の最も重要な地域を固守し、敵C・Fを封じて鋭く寄せる集中攻撃を巧に流し、攻撃力を分散せんとする意圖こそはこのシステムの特徴である。鋭い寄せや攻撃テンポの自由な變化など、F・Wの武器に對してはロービングC・Hをして、止むを得ず防禦の役割にのみ當らせる様になつたのである。従つてこの防禦の中心に、常に聯絡された防禦陣が布かれなければならぬし、またC・H即ちサイド・バックには味方の者の判断のつきかゝる標的な独自のプレーを許さるべきものでない。

3F・B別のかゝる基本的な特徴は、非常にスピーディーなゲームの展開に對して

最も合理的な方法

といひ得るが、これがそれ／＼素質の違つたチームに採用される時は、そのチーム全體のボチションから見れば、自ら興つたシステムとして變化して来る。いはゆるF・Bとしての基礎的な方法と、その精神においてはすでに研究され、すでに昨シーズンからオリンピックチームならびに二一

三の大學において試練を受けたが國內的に見ても未だ十分消化した時機には到達してをらない。それだけに多くの問題を残してをり、各チームに苦心の跡も見えるのである。

單的にこの問題を分析すれば、いかにして3F・Bを強化するかそれに連絡する攻撃線がいかに構成するかといふこと、その防禦陣をいかになる攻撃方法で破るかといふことに歸する。3F・Bの防禦としては、體力的に恐られた管りの強いこと、個人技——即ちテクニクに優つてゐるといふ

絶對的に有利な條

件を有すれば、常に積極的に一人對一人のマークによつて、敵F・Wにキープする餘裕を興へない様に潰せるが、個人的に劣勢であれば、對人的のマークは非常な危険を醸すことがある。それがために、ミッドウェイでは或る程度マークを放棄して、最終防禦線を中心めなければならぬことであらう。即ちボールを持つ敵に對しては、それをマークするバックメンは攻撃の方向を味方の防禦陣の厚い方へと流させ、いはゆる追込みの手を考へつゝ、他のバックメンは素早く後退して厚みのある防禦陣を布かなければならない。分散したまゝの布陣でF・Bが釣出され、

逆襲への折返しは

正確なキックと、その時機によつて出来るのである。之が或る程度期待出来る標的なバックでなくては3F・Bは最も消極的なシステムとなる。この消極的な缺陷を補はなければならぬ現状からすれば、F・Wの後退と縦への鋭い動きを強制しなければならぬ。従つてインナーとサイドハーフの極度の動きに依つて、ルーズボールを巧に生かして前線へ送るとともにC・F及びF・Wも或る程度後退してインナーの攻撃線参加を助けなければならぬ。

インナーの防禦的な動きとサイ

ドハーフの攻撃的な動きが、ミッドウェイで最も巧みに聯絡出来るならば、攻撃のチャンスは先づこゝから出て来るといひ得る。ミッドウェイのボチションの編成は、常に防禦的には敵インナーに對する味方インナーとサイドハーフといふ二重のマークがあり、攻撃には敵サイドハーフ一人の防禦に對する味方インナーとサイドハーフといふ二重の攻撃線になるやうに、素速くルーズボールを生かして攻撃優勢に移さなければならぬし、防禦に對する體勢も種々方

ければならない。インナーの防禦範圍とサイドハーフの攻撃範圍が交叉して、ミッドフィールドを完全に包まなければルーズボールは生かすことは出来ない、七人で攻めて八人で守るといふことは、常にこのシステムの運用に考へられなければならない鐵則である。

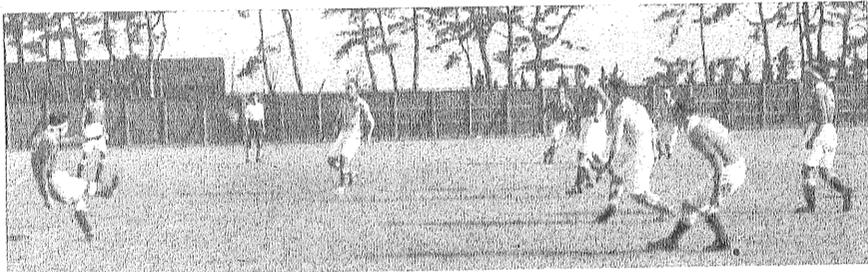
3FBを破るには

釣出すことが第一であらう。單調な攻撃テンポとパスによつて、七分通りの壓迫を續けながら逆襲に敗れた例は少くない。急激に仕掛けて行く方法のみによれば、敵のバックは標のやうに反撃するのみである。常にサイドを變へて敵をゆさぶり、個々の間隙を捉へて鋭く突込むか、個的に切返して来るパスを利用して切込むか、或は適當に寄せの時機を捉へるべきである。漠然とゴールを圍むだけでは、バックのフリードも單にキーパーの好餌となるのみである。突込みのタイムが各自噴進へば決定的なチャンスは得られない。攻撃體勢の建直しをするだけの餘裕を捉へ、極端にはハーフからゴールキーパー迄のバックパスをする様な気分をもつて、常に局面の展開を考へなければならぬ。漠然たる攻撃は單に精力を消耗するのみで、却つて逆襲の危険を醸す様なものである。

常に最前線のF・Wは、最もよきボチションを残しつゝ、パスする者の判断と相俟つて次の瞬間にこのボチションを探るやうに位置しなければならぬ。この判断の一致こそ眞のコンビネーションで速くこの位置を占めると

敵のマークを嚴重

にするだけであり、最もよき位置にゐるF・Wがなくなつてパスの



が可能であるし、必ず敵バックは左右に振られて釣出され、そのマークのはづれたときに一舉に寄せる方法を探ることが出来る。何れにしても最後の寄せの瞬間は、秀れたテクニクで完全にマークを振切らなければならない。

3F・B制を採用するやうになつた結果、F・Wはマークをはづさなければならぬし、はづさんとすればますます固くマークされ、フリーでボールを持ち得るチャンスが非常に少い。バックメンは、體管りで潰して完全に振切られることを恐れ、ミッドウェイのストライディングタックルは非常に少くなり、F・Wは巧みに上半身を使ひスリッパして振切らんとするがとき一人對一人の優勢を争ふ場面が多くなつた。その一方

破られた防禦線に

對して直ぐカバーして行く防禦線の厚みが研究され、F・Wは概して非常に精力的な動きをしなければ破れない。良きボチションを占めるバックに對してF・Wは數等優れたテクニクを持たなければならぬ。

3F・B制は、先づ防禦的には非常に堅固である、チーム全體に結び付いたシステムとして見れば、やはりその作戦上の型を最も有效ならしめる技術を持たなければならぬし、非常に精力的に動くバックメンを揃へたチームは、2F・B制によつてロービングセンターハーフを適宜に攻撃に参加せしめて成功してゐる。要はシステムの型に捉はれることなく、技術的な條件を調査した方法に依らなければ効果は擧げられない。

(を は り)



大詰に近き関東リーグ

早大の連覇危し?

近年稀な慶應の充実

野村正二郎

すでに蹴球シーズンもその半ばを過ぎ、東京における学生リーグ戦九十試合のうち、今後に残るは約二十試合であるが、これらの試合にこそ今年度の成果を盛るものであるといつても過言ではない。そのうち大関第一部の試合は、来る二十日の慶大―商大、早大―帝大、二十七日の商大―文理大、二十八日の早大―慶大の四試合でこの試合に對する我々の期待は非常に大きい。なぜならば

國際的飛躍 を目標とし、今年度の蹴球界において、その根柢ともいふべき慶應生蹴球、特に大関第一部に屬する各校の張り切り方は當然とするところであつた。さて、待望のシーズンに近づいて見ると各チームともその内容が著しく低調で、當事者をして痛く失望せしめたが、その後の各チームの努力により最近に至つて一齊に好調となつて來た。

然るに慶大はその後ベストメンバーを揃へるに至り、シーズン第一戦の對明大戦では折柄の悪天候を衝いて、その鋭敏多岐の實力を展露して一方的試合のもとに明大を粉砕し、頗く對文理大戦にもこれを繰り一蹴してゐる。對明大戦に現はした慶大の戦力力は相手方の防禦策に陥陥があつたといへ、實に恐るべきものを持つてゐた、この調子がシーズン中盤くもとのすれば、優勝候補といふよりは優勝確実と斷言してもよいほど素晴らしいものであつた。

一方連覇を 目指す早大は、比較的堅な試合のみを経験してをり、シーズンに入つて幾分は沈滞氣味から脱しつゝはあるが、未だ不十分な點多々あり、名稱は違つてゐた

が實質上の早大メンバーであるW・M・Wとして、去る三日の神宮大會決勝戦に清津チームに平勝し

てゐる程度である。しかし勝運に憑かれてゐるといふか、未だ決定的な破綻に見舞はれないことは、却つて早大として戒心を要するところであらう。これらの事情から推して二十日の慶大―商大、早大の二試合を見ると、早慶の力を比較するに最もよい指針となるものといはねばならない。



十月二十四日東京高校球場で行はれた帝大對明大蹴球戦、後半十八分帝大渡邊のゴール成る

迫る早慶戦 は大體において、そのまゝのコンディションで持越されるものであるから、早慶戦の明暗もといへる、特に帝大は、慶應よりも早稲田の方が興し易いといふから、この日の帝大にもまた見るべきものがあらう。

さて、結局本年度蹴球の興味の中心は、矢張り二十八日に行はれる早大―慶大の一戦ではあるが、この試合の見通しを付けるほど難かしいものはない。他の慶應のいはゆる早慶戦におけると同様に、しばしばその豫想が覆へされてゐる。最近数年間の記録を想して見るも豫想的の中したのは十年度の試合だけといつてもよい。この試合では慶應が不調とはいへ思ひもかけぬ八一二の大差で取れた。また昨年度では再び得點戦を演ずるだらうと噂をされてゐたのが、二一〇を以て慶の無得點を記録してゐるといふ譯で、この試合の豫想は實に着手といふはかばかない。何か慶防線が張つてゐるやうでも

あるが、これ等のことを考慮に置かないでは早慶戦を云々することとは出來ない。従つて、今年の早慶戦もやつて見なければ判らないといひ度い。今日までのところを以て判斷すれば

慶應六分、 早大四分といふところであらう。しかし、最初の一點が何時いかなる形で、何れによつて得點されるか、余試合を通じての勝負を左右するのではなからうか。すなはち、第一點をきつかけとして得點となれば、慶に勝味があり、反對に試合が膠着して持久戦となれば早に有利となるであらう。早に取つては慶大のW・W―特に三宮をどの程度にまでマークし得るかといふことに勝負の分岐點があるやうである。

早大の氣分的低調の一原因は、昨年の善戦を嘗てゐる選手が少く、多くの試合において實質的には鬼に角、結果において勝つて來てゐるために、幾分試合そのものを

を轉じてゐる點にあると思はれる。川本なき早大軍が、川本を中心とした動きから川本なきWとしての動きに、判然たる移行を見せてもよいなどである。對帝大戦を経て對慶大戦に至る道程において、この慶應を如何に打開するか、早大連勝か否かの分れ目であらう。どういかなる式の氣分をもつて此の試合に臨むのでは、今の慶大には一寸勝つ望みがない。

※右ページに続く

ぜんとするためか、個人的な強さから見れば、比較的シューティング・レンジが狭い事を感じる。とまれ、今一つ興味をもつて期待することは、第三F・Bとして

京大—關學—神商大

伯仲の二三強鼎立

リーグの中間展望

關西學生蹴球の昭和十二年のスタートは、先づ昨年よりの選抜チームの再訓練に依つて火蓋は切られた。技術委員も之に加はり異常の緊張を見せ、八月の山中に於る全日本選抜合宿には關西側選手が用意周到なる準備練習の後参加した。これらの選手が各自チームに編つて自己の體験を傳へ、また日



京大對關大蹴球試合における京大のドリブル攻撃

のO・Hの動きが、最も明白に効果を現はすであらうといふ點である。第三F・Bの調子の出来、不出来も、この試合の大きい分岐點であらう。3バック・システムを

治忠橋市

關學—神商

優秀

本に蹴球が何の方向に進んであるかを認識し、關西蹴球界のレベルは勿論、全日本蹴球の水準も一段と引上げらる事を期待してシーズンを待ち、蹴球界に参列して我々蹴球マンの威容を、高らかに中外に示すと同時に蹴球マンたることの誇りを感じ、全日本の制覇を心に念じたのであつた。先づ既

關學—神商

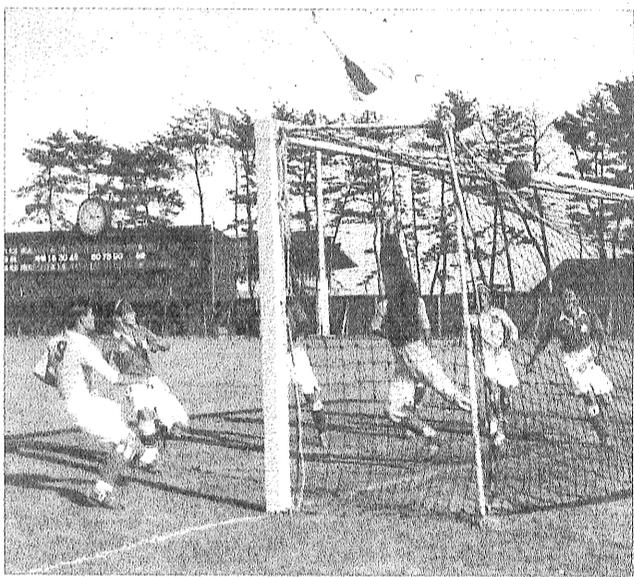
對關

學に膠着を喫した神商は、小橋君の出現に依つて意氣相當高きものがあつた。野原一歩を先取して試合を面白く展開した。關大前川君の横通ひには定評あるが、彼から出る縦パスを生ずる丸谷君は未だ追方に欠け、その上高橋は前川君との一騎討ちに敗れて居た、防禦に前線の望山君迄が度々ゴールライン近く迄逼つてゐたのを嘆次見たが、兎に角元氣一杯に闘ひ關大は波瀾の形であり、残る木下、吉江君が柄にもなく狼狽してゐたのは見苦しかった。これも望山君一人の體験策に引掛つたといつて過言ではない。

關學—神商

對關

學に膠着を喫した神商は、小橋君の出現に依つて意氣相當高きものがあつた。野原一歩を先取して試合を面白く展開した。關大前川君の横通ひには定評あるが、彼から出る縦パスを生ずる丸谷君は未だ追方に欠け、その上高橋は前川君との一騎討ちに敗れて居た、防禦に前線の望山君迄が度々ゴールライン近く迄逼つてゐたのを嘆次見たが、兎に角元氣一杯に闘ひ關大は波瀾の形であり、残る木下、吉江君が柄にもなく狼狽してゐたのは見苦しかった。これも望山君一人の體験策に引掛つたといつて過言ではない。



十一月七日甲子園兩運動場で行はれた京大對關大蹴球戦は二對零で京大が勝つた、寫眞は前半二十五分京大最初のゴール

共通缺點と

三強の熱戦は?

今までに行はれた試合から各チームの動向を見るに、一般に攻撃において手が細か過ぎる感がある。大體3バック體制はO・Hを除き、F・Bは非常に攻撃的な位置にあり、之を破るには中盤における三三の細いパスは、やがて陣を破る準備行動と考へねばならぬ。膠着された局面は勢よく噴出する。攻撃は恰も斯の如くなつて初めて成功をもちたすであらう。防禦においては全般的に初歩的な事ではあるが、敵がボールを受ける瞬間にそれを粉砕する事が缺けてゐる。關東のバックが富りの強さと感ずるのは、この事がマスターされてゐる故であらう。またボールを持たざるプレイヤーは許されない。

京大—神商

試合

時間中非常に無駄が少く、且つ始終スピードに雙方燃然とプレーを進行させてゐた。高橋の膝すかしは對關大戦のみ、最も油のつた時で全線の動きも試合毎に活版に磨つて来たかに思はれたが、微しき欠けてゐる感があるところがある。

京大の攻撃は、練習試合に比較して非常にスムーズになつて来た。兩Wのセンターリングも比較的時間を得、リーグ戦最初に見た

これは非常に考へなければならぬ點だと思ふ。將棋に於て相手がある。フットボールに於ては相手の位置と動きに依り、多少の相違はあつても正攻法一手一歩は寄せ手があつた。これを眼を開いて考へ練習するに非ざれば、よし關西の弱者となるも、全日本の弱者となるには餘りに無意味なフットボールをしてゐるといへよう。敢て自軍を促す次第である。

兩軍強化法を一言するならば、關學に意識の上立ち試合を運べ、神商に若さを誇り、野原力において勝て。

關大—神商 對關學に膠着を喫した神商は、小橋君の出現に依つて意氣相當高きものがあつた。野原一歩を先取して試合を面白く展開した。關大前川君の横通ひには定評あるが、彼から出る縦パスを生ずる丸谷君は未だ追方に欠け、その上高橋は前川君との一騎討ちに敗れて居た、防禦に前線の望山君迄が度々ゴールライン近く迄逼つてゐたのを嘆次見たが、兎に角元氣一杯に闘ひ關大は波瀾の形であり、残る木下、吉江君が柄にもなく狼狽してゐたのは見苦しかった。これも望山君一人の體験策に引掛つたといつて過言ではない。

關大—神商 對關學に膠着を喫した神商は、小橋君の出現に依つて意氣相當高きものがあつた。野原一歩を先取して試合を面白く展開した。關大前川君の横通ひには定評あるが、彼から出る縦パスを生ずる丸谷君は未だ追方に欠け、その上高橋は前川君との一騎討ちに敗れて居た、防禦に前線の望山君迄が度々ゴールライン近く迄逼つてゐたのを嘆次見たが、兎に角元氣一杯に闘ひ關大は波瀾の形であり、残る木下、吉江君が柄にもなく狼狽してゐたのは見苦しかった。これも望山君一人の體験策に引掛つたといつて過言ではない。

球技の妙趣

地方チームの躍進

関東代表 W・M・W 優勝

小野 卓爾

蹴球

第九回明治神宮體育大會蹴球選手権大會は關東(W・M・W)北海道(函館蹴球團)東北(T・Gサッカー)北陸(富師蹴球團)關西(關西學院大學)中國(廣島二中俱樂部)九州(熊本俱樂部)朝鮮(清津蹴球團)の八代表によって行はれ、結局關東代表と朝鮮代表とが決勝戦において相見え、朝鮮代表の猛追撃も效なくつひに關東代表が優勝した。W・M・W(早大)の掌握するところとなつた。

この大會は隔年に現はる、各地方の水準を察知し得べき好個の機會であつて、前回は北陸、北海道、東北、九州などに躍進の跡が見え就中、低調だつた北陸の進歩に顯著なるものがあつた。

第一回戦

における朝鮮 對中國の試合

は、強靱な朝鮮の前には弱冠中國の健闘も後半に潰え、その體力の差に壓倒されてしまつた。關西對北陸の試合における北陸は、攻法が單純であり且つゲーム馴れに不足の點も認められ、その浮腫を衝かれて前半すでに三點を負擔し、關西のやゝ優れたる組織力の前に敗退した。北海道對東北は勇壯な肉弾戦を展開し、兩軍同じ闘子でキック・アンド・ラッシュに終始したが、北海道はよく好機をものにしたに反し東北は決定力弱く、且つ北海道G・Kの奮闘に阻まれ後半一點を得たのみで敗れたが、四對一といふスコアに現れたより



蹴球に優勝した關東代表早大チーム

は伯仲せるゲームであつた。關東對九州の試合は、九州が關東の優越せる個人技と組織力により感服倒せられ、その重壓に堪へかね奔命に疲れ果て無残な敗退を喫した。

準決勝戦 における朝鮮 對關西は、關西は西生氣に缺け消極的な反し、朝鮮は強靱なキックを以てキック・アンド・ラッシュに出でて前半に二點を先取し、そのまゝ押し切つてしまつた。この得點は二點共關西側のミスより拾つたものであつて、一點はL・Fが腹を衝かれたといへ十分償し得たものであり、他の一點はG・Kのミスキックを拾はれたもので、關西の生氣なき一面を物語るものである。後半に入つて關西はP・Kを得て二對一と追つたもの、依然としてゲームは退嬰的でサイドバックスの形をとつたもの、O・Hは意味なく後退し、敵のC・Fをして兩

ウイングに易々と好送球を行はしめてゐた。

關東對北海道の試合は、北海道の荒武者も關東の變化あるパスツングに難澁し、關東は着々合理的な型において得點を重ねて優勝した。

決勝戦 における關東對朝鮮の試合は、前夜より降り續いた雨のためにグラウンドは水溜りが出来、悪コンディションであつた。この状態において行はるゝ試合は、組織的な技術と巧緻なパスワークを主調とする關東に取つては不利であり強靱なキックと頑健な體態に依り長戦を放つて一舉に相手の陣に雪崩れ込む特徴とする朝鮮に取つては却つて有利であつた。

試合は早大調に依りてすゝめられ、六分球をR・IよりL・Wに出し、L・W中央に軽くかへすをO・F高橋軽くツツシユして一點を先取、その後も再三の好機があつたが、得點に至らず、關東

優勢に前半を終つた。後半一進一退の接戦となり二十九分まで兩軍共に得點に至らなかつたが、關東R・WよりのパスをR・I加茂(兄)受けて朝鮮バックスをかはし、シュートして二點をリードするに至つた。これまでは、得點差は少いが、關東側は危氣ない試合を進めてゐたが、卅分ころより朝鮮は猛烈と攻撃を開始し、R・Wは深い前送球を受けてシュートして一點を返し、引續き猛烈なるフイナルラリーを行ひ、絶好のチャンスがあつたがオフサイドに終り、遂に追撃ならず二對一にて關東代表が覇權を獲得した。

關東代表 W・M・Wは瀟灑なグラウンドに惱まされて前日に見たやうな、ミッドフィールドにおける多彩な變化に富むパスワークが亂れ勝ちであつた。前日もさうであつたがミッドフィールドからゴール前の寄せに移る場合はテンポにアクセントなく、同一の闘子で殺到するため、好機を今一步のところ

の効果を減殺し、危氣なく試合を進めつゝも得點の好機をそつなく捉へることが出来なかつた。

朝鮮代表 清津蹴球團は全體としては粗笨であるが、強靱なキックと優秀な體態に物をいはせてゐた。戦法としてはゆるキック・アンド・ラッシュであるが、ミッドフィールドにおける試合の進め方は最後の寄せに至る計畫の含みがなく單調を繰り返す前に組織的な守備、特にサイドバックを破るには困難してゐた。W・M・Wより擧げた一點はキック・アンド・ラッシュに依る得點の二つの型であるが、これは寧ろW・M・Wの左側バックスの動きの齟齬より空いた穴であつた。

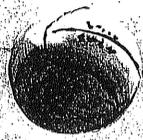
とまれ、試合全體を迫つて見ればW・M・Wはより多くの得點を得べきであり、その優勢を賞するよりは、寧ろ清津蹴球團の健闘を偉とすべきものであつた。この試合の最後のオフサイドの判定に對して、清津の選手が取つた態度は非難されるべきであり、誠に遺憾であつた。ゲームのみならず、その選手としての態度もカルチュアあるべきである。

の効果を減殺し、危氣なく試合を進めつゝも得點の好機をそつなく捉へることが出来なかつた。

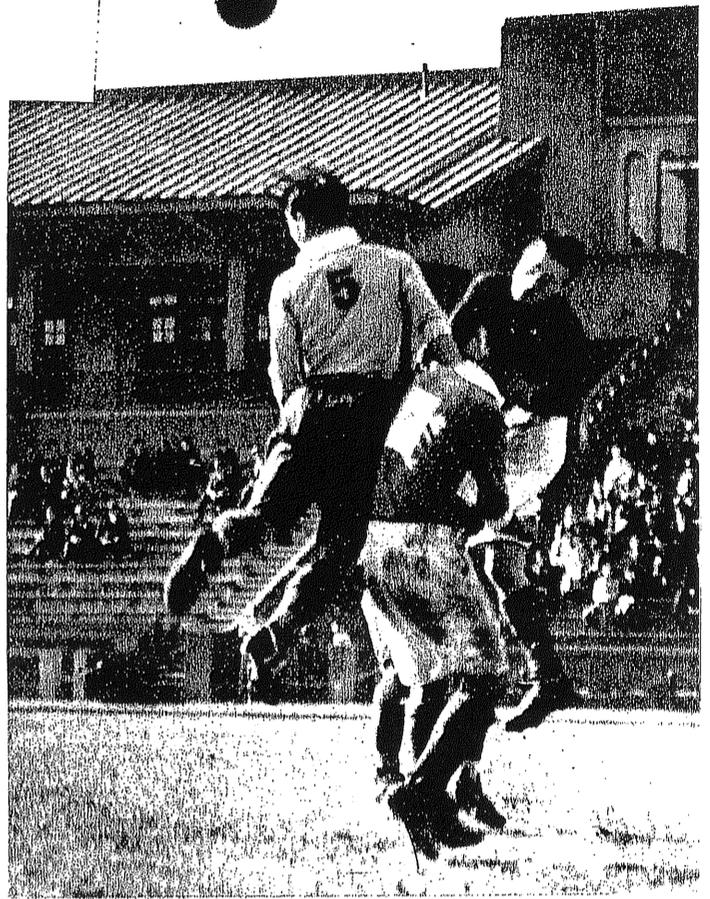
ツープラスセサア

12月第1号

朝日新聞社発行



職業選抜争覇戦
體位向上問題



一十は合試の大商對應慶ゲーリ球蹴學大東關 球蹴
し勝樂應慶で差大の〇一七れは行で場技競宮神日十二月
攻猛に大商應慶分十三半前は眞寔 た

S12-12-1号の表紙 (約2分の1に縮小)

S12-12-1



は合試の學關對大京るす決を權覇のゲーリ球蹴生學西關 球蹴
振年三ち勝が大京で〇一二れは行ていおに園子甲南日三十二月一十
戰混の前ルーゴ大京は眞寔 たつ握を權覇のゲーリにり



回取高潮の蹴球界

東大バックスの善闘

覇を指す慶應と引分

工藤 孝一

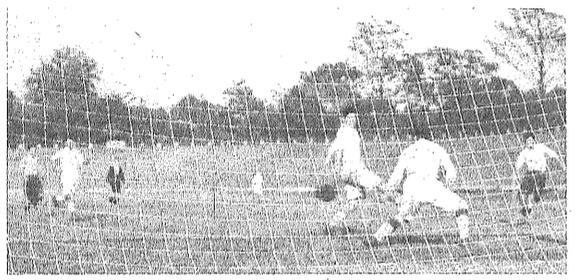
明、文を軽く一蹴して一路覇權に邁進する慶應の好調に對して、勢頭の對文理大戦に不覺の黒星をつけた東大の低調さでは、誰しも慶應の勝利を疑ふ者はなかつた。果せるかな慶應は、開始直後の中盤戦に優勢を示してバラエティに富む組織、華麗なパスワークで、帝大バックスを左右にゆすぶり、十九分播磨、二宮のスルーパスを、更に左に廻して猪俣のフリーシュートで先取得点の實を結び、續いて猪俣に再度フリーシュートの好機訪れ、帝大崩壊の徴を思はせた。然し猪俣意外の凡庸に帝大辛くも救はれた。

此處で、Wの調子付きに過信した慶應、ピンチを脱した帝大が互にホツと息付いたとたん思はぬ破綻が生れた。即ち二十四分帝大L・B菊池のカツテイングから蹴り出された左前の送球を、L・W松村良くダッシュして

慶應 1-0-1 東大

(11月8日、神宮競技場)

【東大】 大村機橋邊部 田 池岡勲
【慶應】 猪俣 小 二 播 松 石 宮 加 津
【審判】 W F B G K K K
【記録】 大村機橋邊部 田 池岡勲
【東大高波阿 種 菊藤 野 7 7 21



慶應蹴球戦の前半十九分慶應の蹴球がシュートして最初の一点を奪ぐ

手凡夫に救はれ、直後に生れたラッキーボーイ松村の得点で、全く立直りの機を掴んだのである。更に慶應が前半帝大バックスの弱はぬ間に、強シュートの威力を誇る二宮をして、その特徴を十分活用せしめなかつたことは見逃し得ない誤算であり、帝大C・H種田が張り切り過ぎてか、しばしば慶應のセンタースリーの三角コンビの真只中に、早目に飛込んでゴール前を空にしてみた隙を衝かなかつたことは、どうかと思はれる。

世評を裏切つて引分けの大試合を演じた帝大の善闘は、一にバックスの活躍に負ふもので殊に兩F・B菊池、藤岡の奮身のスライディングタックル、巨軀を利用する體當りの成功は殊動中に價する。前半浮動したC・H種田も一對一となつて後は漸く冷静に返つて良くマーク網を固めると共にこの三者から放たれる長蹴はF・Wへの好送球となつてゐた。然しサイドハーフ森、福はフォロイ不足で、攻撃の中盤役をなし得ず、ために帝大攻撃線は厚みのない断片的なものに陥り、合理的な得点経路の開拓は幸々望み薄となつた加ふるに頼みとしたR・W阿部不振で射撃器用を振り切れず、宿將高橋また腕力不足で押し足らぬ苦境では、個人突撃に依る得点機も断念せねばならなかつた。

要するに、慶應F・W對帝大バックスの正面衝突が、この試合の全貌であり。

駒を揃へられた技術の融し、戦局を有利に導きながらも決定的シュートの不發に終つた慶應は、帝大バックスの氣力と體當りに抑へられたもので、誠と覺悟の悪い半尾を付けられたが、奮起良く巨軀と四ツに組んだ帝大には矢張り腐つても駒の味があつた。

蹴球の王城陥落

東大の重爆、早大を撃破

高師 康夫

「東大は根本の練習まで始めたが、來年に備へてかな」これは早稲田ファンである「蹴球は早稲田だ」との觀念は觀衆の大部分の心を占めてゐる。開始十分前といふのに、まだ出て來ない早大エレवनに對して「自信があるものだから早稲田は出て來ん」などいひつてゐる。早大風上の千駄ヶ谷側に陣しての試合開始は午後二時二十分。

「愈よ面白くな

りやがったな、試合といふものは溜息が出たり、力溜を入れたり、肩で隣の奴をつきとばしたり、風邪をひいたみたいブルブルとふるふたりするやうなのでなければ面白くない」などいひつてゐると近くのお嬢さんが「アラ、あたし今ハンドバッグを膝の上へ押しつけたので、踵を割つちまつたワ」と、いひ出す始末。しかし、スタンドの力溜にも似ず、早大の攻撃はどれも切れない。バックスのL・F上野あたりが、東大の舉げた球にチンチンカモカモをやるな



早稲田蹴球戦の後半三十分早大ゴール前の混戦

ど、どうも板についてゐない。これに對する東大はG・K岩動に何とか危げなところがありながらバックスのC・H種田を筆頭とする重機甲に物を言はせて、なかなかよく頑張る。それからいふか、東大L・F菊池と早大R・W中林とが正面衝突し、ウエイトの差は如何ともし難く中林が跳ね飛ばされしかも鈍丁感にそれが三度も繰返された。スタンドの大半を占める東大系の觀衆は大罵りである。

ながらも、ヘツデイングでは當代の名キーパーたる佐野の左右を脅かして行く。「東大やるぞ」の感は誰の胸にも浮んで來る。しかし、まだく動きの上からは早大に分があることは確かだ。ノーゴールがあることは確かだ。ノーゴールのまゝ前半を終ると見えたが、四十分早大はR・W阿部がタツチライン際で球をこね廻したのも、強引に引かれてパスすれば、待ちかまへたC・F高橋がこれをG・K佐野の右側にシュート。佐野は

「まるで重爆と

薄歩様の戦術のやうなものだね」早大はC・Kやバックスメンの長脚、加茂弟の好パスなどかなりなチャンスを作るが中央の突込みが足りず、もう一步といふところではなから落ちなし。東大も元氣で、ラッキーボーイ松村のかけふるのやうなドツチングや、高橋、高橋清の孫の頑張りで、これはと思ふほどのシュートはない

「まるで重爆と」體勢が崩れて辛くも叩き落し、チヤイチヤと見ると見るや身を倒してしがみついたが時既に遅く、アツと思ふ間に球は遠慮なくゴールイン。スタンドは沸く、勿論、これに奮起した早大の猛攻を豫想し、加茂兄弟の快技があるだらうとの期待は、直ちにその鋭鋒に片鱗を見せた。だが、間もなくハーフタイムになる。

※左ページへフック

東西蹴球の覇権決す

慶應の覇業成る

熟考を要する早大

竹 腰 重 丸

早慶両チームで、最近五ヶ年間のリーグ戦優勝を独占してをり、

早大は零對一の敗戦を演じながら、この試合が今シーズンの優勝戦となつたので「早慶戦」の名も加はり、一般はこの試合の勝敗に多大の興味をもつてゐるものゝやうである。しかしながら、少数者の間では勝敗は到底問題にならず、順當に行けば慶四早二、慶應が抽戦すれば三對三程度の戦績と豫想せられ、従つて勝敗の興味よりもどのやうな作戦が行はれるかど注視の的であつた。

▲▲▲▲▲
慶應の攻撃
は、良いフイダーである。二宮と「エース」二宮とを軸とするパスワークが冴えた力を持ち、中央突破によつて二宮、播磨がきめるか或はミッドフィールド下作戦の巧み左右翼から攻めて「W」猪俣の決定力によつて得点するの得意とする攻撃である。これは後陣からのフイットを期待しなくとも、F・W線のみで相當の得点力を持つものであつて、攻撃力としてはリーグ隨一と認められてゐたもの

▲▲▲▲▲
慶應 5(3-1)1 早大
(11月28日、神宮體育場)
【大】 保富 宮崎 元川 原川 藤田
【慶】 猪俣 小松 松本 松石 松宮 加津
【早】 F W H B F B K C K R K
【早】 正 藤 藤 藤 藤 藤 藤 藤 藤 藤 藤
【早】 加 加 加 加 加 加 加 加 加 加
10 3 15



優勝した慶應チーム

この日までの戦績に徴すれば、慶應のF・Wはその守備陣が混乱しても、早大守備者は元來パスに對しては弱く、また審判の鋭さを欠きかつ九十分間の激しい動きに耐へるだけの精力を費つてゐたので、三點は必ず得点すること、豫測出來たのである。慶應守備陣は動きに抜かりがなくパスに對しては強いが、個人的勝負には脆さがあるもので多少の危氣はあるが、早大のF・W程度の足業では決定

的に振り離されることが、さう度はは起らずいかに混乱しても三點以上を失ふことはないと思はれた。これに加ふるに、チーム全體の體格として、慶應の方が早大より長く纏つて居り、動きの激しさや耐久力の點では慶應の方が格段に優れてゐるので、早大の勝つべき要素は殆ど見出し難かつたのである。

▲▲▲▲▲

ベストメンバで對陣したが、唯一つの変更は早大の両インサイドが位置を交代して、左翼に加茂兄弟を直したことである。個人技を主力と頼む早大としては、元々まゝで頼るべき兩人に、廣い活動範圍を與へた方が勝つてはゐなかつたかと思ふが、早大の意圖は兩人を集めて一角を突き崩すことであつたのだと想像せられる。

試合開始直後は兩軍突撃陣出の亂闘で、いづれが良いスタートを切つたとも判じられなかつた。その間に早大加茂兄弟は、鋭いドリブルシュートをC・Eの位置から放つたが得点にいたらず、七分ごろにいたつて慶應播磨は、自陣から球を拾つて二宮に軽く渡し二宮から篠崎へ森崎からのサイドチェンジを誘はつて、その間に播磨は二宮の後方からその左前に鋭くダッシュして抜け出て経パスを受け、直ちに果敢なシュートを放つて慶應に先立よい先取得点をもた

らした。このやうな経過を経た一思ひ切つて近接マークを探つた慶應守備陣の活動を便利にする効果をもつたやうである。

早慶蹴球 前半三十二分早大唯一のゴールに二點を擧ぐ



スワイクの冴えといふべきではなく、調子の悪はぬ間に果敢な突撃を試みた播磨の殊勳と見るべきである。

▲▲▲▲▲

のち、陣中は漸く正調となり慶應はその後約十分間深く進出した二宮に、頻りに長遠球を集中して運攻による中央突破を試みた。慶應としては確かなパスで廻しても速攻によつても攻落の可能性を持つもので、速攻中央突破を試みた二宮の速いドリブルから三、四回の好機を迎へたが兩ウイングの能力不十分でそれに追ひ付き得ず

▲▲▲▲▲

そのやうに豫測せられたが、その後數分間の早大は奮闘に懸命の努力を拂ひ、激しく突進して強攻を繰返した。その強攻に慶應のクリアし損じた球を高橋が拾つてシュートして二點を回復した。これによつて或は慶應バックが混亂に陥るのではないかと思はれたがF・Wの活躍と勝利への確信に救はれ、四十二分にはC・Kから更に二點を得て前半戦を終つた。

▲▲▲▲▲

後半戦開始のフイールドに立つた早大には、まだ勝利への意氣込みが窺はれたが、再開直後三分間に雖も二點を失つて五對一と開いて了つた。即ち早大キックオフの球を奪つた二宮は、右タッチラインに沿つて快走しL・Bのタッチルを外して後、大きく左に長パスを送り猪俣のヘンディングによつて二點を加へ、その直後、今度は二宮に代つて猪俣が大きく揚げた球を佐野がC・Kにしようとして聞き損じ、雙方果敢たるうちに

王座は京大へ

對關學大戰評

郎太治邊田

關西における學生蹴球リーグ第一部の首位は當然關學大と神戸商大が争ふものだが考へて居た大部分の人の豫想を裏切つて、この二、三年雌伏して居た京大が突如これを奪つてしまつた。

た思ふ果敢なる京大の活躍は、事實技において優れたる關學に優るものであつた。今まで光らなかつた兩翼は俄然活躍し、両インナーまた思ひつかつ激務に耐へ、よく敵を制した。C・E山中は球歴が比較的長いだけに割に味方を生かしてゐたが、彼自身より強い挺身的ダッシュを敢行したなら、この日の兩翼側の活躍と相呼應して

※右ページからつづく

中央突破が 案外容易に

成功したであらう。

C H大砲は大砲成功した様であるが、もつと積極的な演習に出た際C H活動の機を完封するのが本手であらう。左バックのリターン・キックの不備なることは幸にも破綻を見せずに終ったから良い様なもの、あの程度の威力では東西対抗等思ひもよらない。

◇ ◇

關學は、前の試合の疲労いまだ回復せずと考へられるが對京大戦における演技は必ずしもこれを問題にするほどのことはなく、幾多の缺點の存在のために不必要に一敗を失つたと見られる。

即ち、C Hが消極的にB Bの位置のみを固守してゐた相手ばかりで存外の利を占めたことに馴れてゐた關學O H岡野は、何故に案に抜けるのか、或ひは展開が容易なのかといふ自己反省を忍せにしたことは京大O H大砲の比較的積極的なマークの前に遂に破綻を示すに至つた。マークが接近して来たといふB B制の下で、O Fが自由であるのが大體間違つてゐるのである。岡野が押へられて両側の田島、野澤にパスが適宜に出せ



京大對關學戦 前半京大ゴール前の攻防

京大 2 1 1 0 0 關學

(11月25日、甲子園南運動場)
關學 岡野 中野 須田 井坂 村松 10 7 7
梅野 岡田 三田 笠原
【F W】 H B F B G K G K F
大 山野中 藤原 藤原 上本 12 7 3
市小山 伊政 大友 井岡

よる攻撃の進展は完全にその機能を停止して、両インナーは完全に中に浮いてしまつた。京大O Hがあの場合には消極的過ぎたと思はれるに拘はらず、關學O H岡野がこれを抜き得なかつたのは先づ體軀の相異にもよるが、一つはその若さにもよる。萬が一、限定の攻法が駄目だとすれば手を懸へねばならない。田島、野澤共に激しく動いて受球態勢を打開する方法を講ずべきである。しかるにこの両者は平常通り出るはずのないパスを勝手に決定して中に浮いてゐたのである。激しい動きによる受球態勢への工作は、吾々技術指導委員が再三再四忠告したにも拘はらず、昨冬以来改良されてをらないのである。唯備かに一回

後半田島が 鋭い前進で

中央からの球を受け、敵攻を背に附けたまま、左斜に突入したと

きには聲を呑んだ、それほど鋭い動きだつた。これは不幸にして彼が何かに頼んだ爲に成功はしなかつたが、あの動きだけで關學は残された時間に幾多の得点を重ね得たであらう、しかもそれは遂に最後までもう一度演習されはしなかつた。

各自の動きの激しさを伴はないパスは無力である。東西共に激し



優勝した京大チーム

く忠實に動いたチームが勝つてゐる、一つ一つの瞬間を忠實であつたチームが90分を支配してゐる。全部が全部、正しい判断によつて早い演習に出るならば、如何なる場合といへども、停止してパスを受けることも、パスをすることも不能になるか、さうでないまでも、甚だしく効果を減殺され、次の手が利いて来る。従つて受け取る者も敵を逃げ切るために激しく動いて球を受け、或ひは動いてパスを任意に出すことになり、流動性のある攻撃が幾多の「盲点」を露しなげら展開されて行く。それが近代戦である。日本の最高水準がそこまで來てゐるのに、これに近い連中がこれに到達し得ないことはその人々の責任である。

◇ ◇

兩翼田中、梅岡ともはどういふ若へか、自身で突入すべき場合にもセンターし、そのため絶えず好

機は自分からこれを逸し、その得合不利な態勢にある京大守備陣に立直る餘裕を興へ、従つて目前の努力によつて開拓することを得たる優位な情勢において、當然獲得すべかりし戦果を徒らに失つたものである。ウイング自身の進撃とセンターリングによる展開があるならば、守備側は兩翼の備へを必要とする。そこに守備の難點を生じ手薄にならざるを得なくなる。しかし、必ずセンターするものとすれば、受球者にのみ守備のマークを置けば足りる。關學前線の不振は、主として動きの不足に起因する。動きの不足は恐らくは練習方法の缺陷に因る、如何な足技も、パスワークも、動きを伴はないならば無力に等しい。一つ、一つの球に對して

敵より早く 球を取る事

が萬事を解決する。球を持たない者の動きが次の展開を導きもし、また駄目にもする。要は「より多い労働」である。

G K中村の失策は、過去の戦績に徴して見ても當然京大の預期し得べきものであつた。又これを保護すべきバックスに一服の不安を存する事實は、京大右翼上りの攻撃に對するR B平井の淺過ぎ、且つや、外過ぎの位置の誤れる占據により、スルーパスの如き形で京大L W市山の單身突入の得点を招來した。

個人的に見てC H三田、R H田邊の力戦奮闘を賞するに足るのみである。

最後に、京大はこの幸運に安んずる事なく、關學またこの失敗に應ずる事なく、より高い水準へ向つて我國蹴球界のために精進を續けられたい。